
君色ブレンド

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君色ブレンド

【Nコード】

N2584W

【作者名】

滝沢美月

【あらすじ】

男子が苦手なれいは大学二年。友達の七海に誘われて行ったカフェバー「ブルーベル」はイケメン店員ばかりの喫茶店。コーヒー好きでいきつけになるけど、れいは同じサークルの秀先輩に片思い中でイケメンには興味がない。それなのに、ちょっかいを出してくる奏の真意が分からなくて

第1話 最悪の記憶

あれは高校一年の春

高校生になって二週間くらい経った頃だった。

下校時間を過ぎ校内を歩いている人はまばらで、校舎から校門に続く桜並木をゆつくりと歩いて行く。並木道の隣の運動場からは部活をやっている生徒の声が聞こえてくる。

青い空に雪のように白く映え、うつすらと紅に染まった桜の花びらが、風に乗っててくるくる舞い落ちてくる様子があまりにも綺麗で、空ばかりを見上げて歩いていた。

だから後ろから声をかけられて、最初は自分と呼ばれているんだと思わなかった。

「羽鳥さん　っ！」
はとり

振り向くとすぐ目の前、息が触れそうな距離に男の子が立っていた。身長は私とさほど変わらない、黒く量のある髪は少しうっとうしそうに目にかかり、眼鏡の奥の瞳は見えない。

えっと確か、彼は同じクラスの　そう考えたのは振り向いてからほんの一秒くらいの間で。

振り向きざまに、彼と私の唇が触れる。

っ！

私は驚いて、ぱつと体を後ろにそらして彼との距離を開ける。

振り向いた時、あまりに彼が近くにいて触れてしまっただけかとも思ったけど、彼が私との距離を一步步詰めてくるから、彼が纏う雰囲気から、事故じゃなくて故意にキスしたんだと伝わってきて、背中がひやりとする。

「羽鳥さん、好きです」

そう言われた瞬間　私は彼に背を向けて走り出していた。

私のファーストキスが……！

振り向きざまにキスされてしまったことがあまりにもショックで、それ以外なにも考えられなくて、夢中で駅まで走って家に帰った。

だから今では、彼の名前は思い出せないし、顔すらおぼろげにしか思い出せない

昔の嫌な記憶を思い出したのは、気分が沈んでいるからかもしれない。

サークルで資料として一冊三万七千円する本を買うことになって発注を頼まれたんだけど、一冊買うはずが十冊注文してしまい先輩にはそこまで言わなくてもつてくらい怒鳴られまくり、気持ちへこへこに沈んでいた。業者さんに頭を下げてどうにか返品してもらうことが出来たけど、さすがに今日は飲まずにはいられなかった。

いきつけのカフェバー『ブルーベル』でビールを頼んで次から次へと喉に流しこんでいく。

大酒のみの父親の遺伝なのか、お酒には強くていくら飲んでも顔が赤くなったりはしない。女の子なのにお酒が強いなんて可愛げがないかもしれないけど、飲めても私はあまりお酒が好きではない。このカフェバーに来てもいつもは　　というか今までは、コーヒーしか頼んだ事がなかった。

だけど今日は飲まずにはいられなくて、やっていられない気持ち

を誤魔化するように瓶が空になれば追加を頼み、すでに机の上には空き瓶が何本も溜まっている。

いつもみたいに親友の七海と一緒にいれば「飲みすぎだよ」って止めてくれたかもしれないが、残念ながら七海は今日はバイトで一緒にいない。

ぼーっと見つめる視線の先、店内はぼやけてよく見えない。そんなに飲んだつもりはないのに頬が火照って、思考が鈍くなる。

空になったグラスを机に置き、くにやりと力の入らなくなった体を机の上に乗せて頬杖をつく。

お酒に強いつていても、普段飲まなかったら弱くなるものかしら

それとも、気持ちが弱っているから、こんなに泣きたい気分になるのだろうか

目の前のぼやけた視界に人影が近づき、何か話しかけられる。

「　　っ」

なんと言ったかは聞こえないけど、知っている声に、私はふわっと微笑む。

「秀先輩……」

サークルの三年生、犬飼^{いぬかい}秀先輩。すらりと長身で、ノンフレームの眼鏡の奥に見えるのは優しいこげ茶色の瞳。日に透ける細くて柔らかい髪は癖があつて、瞳と同じこげ茶色。

私のミスに激怒する三年生の中で、唯一私を庇ってくれたのが秀先輩だった。

「迎えに来てくれたんですね、うれしい……」

愛しい人の名前を呼んで

私の意識はそこで途切れた。

第1話 最悪の記憶（後書き）

人物紹介

はとり
羽鳥 れい

武蔵野理科大学二年、コーヒー好き、人見知り、男性が苦手、視力が悪い、秀に片思い中

第2話 ラベンダーブルーの薫り

翌朝目覚めると、一人暮らしするアパートのベッドの中だった。いきつけのカフェバーで酔いつぶれて、秀先輩に家まで送ってもらったような気がするけど、夢だったのかな

そう思っただけでベッドから抜け出て、洗面台に行く途中の姿見の前で動きを止める。

鏡には、ふわりとうねる肩まで伸びた髪の毛、白い肌、二重で日本人にしては茶色い瞳が目立ち、白地に小花柄のプリントの半袖丸襟シャツに黒い細身のパンツを履いた私が映っている。

私の格好は昨日の服のままで、心なしか頭痛がする。

ゆめ、じゃ、なかった　！？

酔いつぶれたんじゃないかなければ、着替えずにそのまま寝るなんてありえなくて、その結論に辿り着く。

「あつはー、笑える！」

大学の講義室。二限目が終わって昼食を食べている七海があまりに大きな声で笑うから、その声が頭に響いて私はぎゅっと唇をかみしめて不快感を表す。

だんだん夏らしい気候になり、この前までは中庭で食べていた昼食も暑すぎて外では食べられなくて、冷房のきいている講義室に避難してきた。

「確かに笑えるかもしれないけど……ひどい、笑いすぎだよー」

私はミネラルウォーターのペットボトルを片手に椅子の背もたれに体重を預けてうなだれる。

人生で初めて経験する二日酔い　少しの頭痛と胃もたれ。何も食べる気になれなくて、朝から水しか飲んでいない。

「ご飯を食べない理由を聞かれて、昨日カフェバー『ブルーベル』で酔いつぶれたことを話したら、七海の笑いつぼを刺激してしまっ
たみたい。」

「だって、れいが、ザルのれいが酔いつぶれたなんて相当飲んだんでしょ。いやあ、酔いつぶれたれい、見てみたかったな」

七海とは中学からの付き合いで、家もわりと近いし一番仲良い親友だと思う。背中に流した長い黒髪と、大きな黒目が印象的な綺麗な女子。私と違ってさばさばしてて、男子とも女子ともすぐに打ち解けてしまう羨ましい性格。人見知りで男性が苦手な私は、だいたいいつも七海の後ろに隠れて、七海を通して初めての人とは会話を
する。ってか、そうじゃないと、まともに話せないの。

一つ前の座席に机を挟んで座った七海は、頬杖をつきながら言う。

「で、秀先輩に送ってもらったって？」

「それが、覚えてないんだ……秀先輩だった気がするけど、秀先輩が私の事を迎えに来るはずがないでしょ？」

昨日は酔っ払ってて現実と願望の境がおぼろげで、話しかけてきたのが秀先輩だって思いこんでいたけど、冷静に考えてみれば秀先輩じゃない確率が高い。

だって、秀先輩は私がブルーベルにいるなんて知らないだろうし、

迎えにくる理由がない。もし来たとしても私のアパートを知らないはずだから、家まで送るのは無理だ……

「やっぱり夢だったのかな……」

考えれば考えるほど、結論は夢ってことになる。

「じゃ、酔いつぶれてどうやって帰って来たの？」

「自力で？」

そう答えて、苦笑する。自力は無理そうだけど、それ以外に考えられないもの。

カフェバー『ブルーベル』は、私 羽鳥 れいが通う武蔵野理科大学と最寄りの運河駅の間にある。

茶色を基調にして揃えられたアンティーク家具の店内は落ち着いた雰囲気。コーヒー豆の種類を数多くそろえるコーヒー専門店なんだけど、サイドメニューやアルコールメニューが豊富で、特にニューヨークチーズケーキは最高に美味しく、週に一回は食べに行ってるんじゃないかな。

初めてブルーベルに行ったのは一年前の夏。七海が「素敵なカフェを見つけた」と言って私と七海と他に学科の友達が四人の計六人で訪れた。利根運河沿いの道から一本裏道に入った場所に、木々に囲まれたオープンテラスがある喫茶店があった。

黒い縁の硝子扉をあけると、西部劇に出てくるバーのような木の床とカウンター、天井にはお洒落な茶色いライト付きのシーリング

ファンが取り付けられている。店内の至る所に観葉植物が置かれ、壁にはラベンダーブルー色のベルの形をしたスズランに似た花が描かれていた。

「ねえ、ここが？」

「きゃー、こっち見たっ！」

友達がそわそわと囁く中、私はラベンダーブルーの花に見入って壁に近寄る。壁一面に描かれた花はまるで本当にそこに咲き誇っているようで、匂い立つ美しさがある。

「この絵、気に入って頂けましたか？」

ふいに声をかけられて、びっくりと肩を震わす。壁の絵から声のした方に視線を向けると、三十代半ばのがっしりとした体格で顎に髭を生やし、艶やかな少し長めの黒髪を無造作に流した男性がカウンターからこっちに歩いてくる。

「えっと、あの……」

なんと答えたらいいか分からなくて、というか話しかけられるとは思ってなかったからてんばってしまう。

「綺麗な花ですね……」

なんとかそう言うと、目元を和ませた男性が壁に視線を向ける。

「“ブルーベル”というイギリスで初夏を告げると言われている花ですよ。開花の時期になると森一面に咲き、ブルーの絨毯のようでとても美しい風景になるんです」

ブルーベル　お店の名前の由来が分かって、男性がこの花をすごく好きだと言う事が伝わってくる。

私は人見知りするし男性は苦手なんだけど、お互い花の描かれた壁に視線を向けているから、緊張感が薄れる。

ブルーベルの壁画にはそれだけ魅力があつて、ついつい見とれてしまふ。しばらく二人して壁の絵を見つめていると、若い男性の声が聞こえる。

「虎沢オーナー！　なに、お客をナンパしてるんですかつ」

「ははっ、辰巳たつみじゃあるまいしナンパなんかしないよ」

オーナーと呼ばれた男性は声をかけてきた男性の首に腕を回して体を引き寄せ、じゃれあふ。

えっ、ナンパ　！？

その言葉にビクリしていると、オーナーがにこりと優しい笑みを浮かべて私を見、窓側の席を顎で指す。

「お友達、あつちの席にいますよ」

「あっ、ありがとうございます」

私は慌ててお礼を言い、七海達が座る席へと向かった。

「わー、オーナーもイケメンっ！」

「私は、あの彼が格好いいと思う！」

私は七海の隣の席　通路側から二番目に座る。注文をしてから、みんなはそんな会話で盛り上がっている。

「ねえ、れいちゃん。さつき、オーナーと何話してたの？」

向かいに座る桃花ちゃんに聞かれて、私は首を傾げて答える。

「えっと、壁に描かれた花の名前を覚えてもらったの」

「それだけ？ れいちゃんはオーナーみたいなタイプが好みなの？」

と聞かれて……困ってしまう。助けを求めるように隣の七海に視線を向けると。

「あー、ないない。れいは男性が苦手だから、好きなタイプとかないから」

助け船を出してくれたんだけど。

「えっ、そうなの？ れいちゃんって男性恐怖症！？」

なんか逆に興味を持たれてしまう。

「恐怖症って程のことではないんだけど、もともと人見知りだし、なんか男の人は苦手で、話すの緊張するっていうか……」

もごもごと最後の方は声がしぼんでくる。

「まあ、話すの緊張するっていうのは分かるけど……ほら、あの店員さんも、あの店員さんも、あっちの店員さんも！ すごく格好良くない！？ そういう風に思わない？」

桃花ちゃんに瞳をキラキラと輝かせて聞かれ、苦笑するしかない。
あの店員さん　って言われても、私は視力が悪くて、そんなに

はつきり顔が見えないんだよね。コンタクトか眼鏡をしたらいいんだろうけど、裸眼で生活しても少し見えにくいだけで特別困ることはないし、授業の時しか眼鏡をかけていない。

だって周りの人の顔が見えない方が、まだ少しは人見知りしないでいられるというか。

ってか、そつか。ここの店員さんはみんなイケメンなんだね……興味が悪かれた訳ではなくて、七海が「素敵なカフェ」と言った理由が分かって納得する。七海は三度のご飯よりイケメンが大好き、美男子が大好きなんだ。

「男性を苦手になったきっかけてあるの？」

なぜか私の話は続行していたらしく、桃花ちゃんに聞かれて、私は記憶の手綱を引っ張って高校生の時の記憶を引っ張り出す。

「高校生の時……名前を呼ばれて振り返りざまに好きでもない男子にキスされてね。それがファーストキスで、今では相手の名前も顔も思い出せないんだけど、もしかしたら、それが原因だったのかもしれない」

正確には、もっと前から男の子は苦手だった。ただそれまでは話したり一応出来てて、その出来事があったてからは、七海を間に挟んでじゃないと男子とはまともに会話も出来なくなってしまった。話しかけられるとびくびくしちゃうし、目も見られなくて、すごく悪い態度になっちゃう。

「あー……」

私の話を聞いて、みんなが渋い顔をして憐みの視線を向ける。

「ファーストキスがそんな苦い思い出だったら、男性恐怖症になったのも頷けるかも」

桃花ちゃんが同情して頭を優しくなでてくれたんだけど、七海が余計な一言を言う。

「そんな男性恐怖症のれいにはねえ、好きな人がちゃんというのよね〜」

にたあーつと頬を歪ませて口元に手を当てて横目で私を見る七海に、かあーつと顔が赤くなる。

「なつ、余計なこと言わないでよ……」
「お待たせ致しました」

七海の口を塞ごうと伸ばした手を、男性の声が聞こえて、ぱつと引っこめる。

「モカ・クラシックでございます。紫陽花ブレンドでございます」

そう言った店員の声は澄んでいて、隠れた七海の背中から向かいの席に座る三人に視線を向けると、みんなぼーっと店員を眺めている。声もすぐく素敵だけど、顔もきつと格好良いんだろうななんて想像して、まあ、興味ないけどねって、テーブルに次々と置かれるコーヒーに視線を向ける。

店内だけでなく、コーヒーカップの一つ一つもデザインが違い、お洒落で可愛い。

「本日のおすすめブレンドでございます」

私の注文したコーヒーが置かれて、七海の背に隠していた顔を少しだけ覗かせて、湯気の立つコーヒーカップを眺める。

「アイスコーヒーでございます。ごゆっくりどうぞ」

すべての注文を置き終え、お辞儀をして店員は戻って行った。

「すごくいい香り……」

そう言ったのは私じゃなくて七海で、首を動かし七海の顔を見つめる。

その視線の先に、カウンターに戻っていく半袖の白いYシャツに黒ズボン、腰に黒いロングエプロンを巻いた男性の後ろ姿がある。遠目でも分かるさらさらの黒髪は上半分だけ　　ハーフアップって言っのかな　　が結ばれている。

「あの店員さん、すごくいい香りがした……」

ぽつんと呟いた七海の言葉に、私は首を傾げた。

第2話 ラベンダーブルーの薫り（後書き）

人物紹介

さるわたり

ななみ

猿渡 七海

れいの中学からの親友、イケメン大好き、武蔵野理科大学二年

第3話 恋愛対象 星降りの丘

夏休みになり、サークルの合宿で群馬に行くことになる。

私が所属している天文研究部は一年から三年生まで合わせて三十五人、学校に集合して大型バスを貸切り、合宿所へ向かう。日程は八月十一日から十四日までの三泊四日で、十二日に群馬天文台で行われるベルセウス座流星群の観測会に参加する。それ以外の日も夜は観測、日中は大学祭の展示物の作成をする。

全員参加のこの合宿、天体観測も楽しみなんだけど、私にはもう一つ楽しみがある

行きのバスの中、隣の窓側の席に座る七海は寝ちゃって、窓の外に視線を向けたままぼーっとしてた私の頭がぼんっと叩かれて、驚いて後ろを振り仰ぐ。

「羽鳥、手出して」

通路に立っている秀先輩の姿を見て、ドキンと胸が高鳴る。言われるままに両手を広げると、両手から零れるような量のキャンディーやラムネ、クッキーなどのお菓子を乗せてくれた。

「あげる」

にかつと白い歯を見せて爽やかに笑って、通路を挟んだ斜め後ろの席に戻っていく秀先輩の姿に胸が鳴り響く。

「あ……りがとうございます」

秀先輩はすでに席に座ってて聞こえていなかったとは思うけど、お礼を言って手のひらのお菓子を見つめる。

どうしてお菓子をくれたのか分からないけど、秀先輩の優しい気持しが詰まっっていて、食べるのがもったいなく感じてしまう。

ちらつと後ろを振り向くと、通路側に座った秀先輩と視線が合っ
てしまい、ぱつとそらす。

わぁー、思いつきりそらしちゃったつ。嫌な子って思われちゃっ
たかな。

焦る気持ちにもう一度振り返ると、秀先輩がじいーつと私を見て
て、くすりと笑った。

わっ、秀先輩に笑われちゃった。

恥ずかしくて顔を真っ赤にしたまま前を向き、手のひらに視線を
落とす。このままじゃ食べられないから、お菓子を一度膝の上に置
いて、ラムネを一口に放り込む。

しゅわーつと溶けてしまったラムネは甘酸っぱくて、心を温かく
した。

残りのお菓子は鞆にしまって、大切に食べようと決める。

合宿所に着いて部屋割、荷物を運び終わると、まずはミーティン
グ。十一月に行われる大学祭の展示物について何を作るか発表する。

合宿の日程、一日目は夕飯まで展示物作成、夜は観測。二日目は
午前中展示物作成、午後から群馬天文台見学と夜通し観測会。三日
目は自由行動、夜は合宿打ち上げの飲み会。四日目は午前中展示物
作成で昼食後帰宅。

ミーティングをしている二十畳の和室の部屋の上座に三年生が座
って、牛丸部長が説明をする。

「三日目自由行動の企画係、説明して」

部長が言いながら私と七海に視線を向け、部員の視線が集まる。

「はい。企画係の猿渡と羽鳥です」

七海が言っ、私はその横で俯いてお辞儀する。

「今回は玉原たまはらラベンダーパークに行きます。十時ロビー集合、十時半から十二時まで自由時間、十二時から十三時まで昼食、その後合宿所へ戻ります。これがパンフレットで、数枚しかないので回してみてください。参加費用は入場料とバスのガソリン代で千二百円です。参加する人は、今から回す名簿に名前を書いて下さい。参加表明は明日の午前中までにお願いします」

企画というのは、毎年二年生の企画係がどこに行くか何をするかすべて企画する。三日目は朝四時まで天文台で観測会に参加して、合宿所に帰ってきてからは昼ごろまで寝ている人が多い。大学祭の展示物はグループでやっていて、だれかが寝ていると進まない。それで、起きている人が時間をもてあまさないようにこの企画がある。企画係は二年二人でやるのがきまりで、七海が立候補して私も付き合うことになった。

ほんととはこんな人の前に出てやる仕事は苦手だからやりたくはないんだけど、いつも助けてもらっている七海のお願いを断ることも出来ない。

「一年は六時から夕飯の準備があるから遅れないように。じゃ、夕飯まで解散」

牛丸部長が言っ、ぱらぱらと部員が散っていく中、七海は手元

に戻ってきた名簿を見ている。企画に参加する部員の名前が書かれている。

私は七海の横から名簿を見て、誰が参加するのか確認する。

あっ、秀先輩参加だ。嬉しくて、自然と頬が緩んでしまう。

はっとして隣に座る七海に視線を向けると、にたあーと意地悪な笑みを浮かべてるから、慌てて顔を引き締める。

「良かったね、先輩参加で」

でも、その言葉には素直に頷く。

天文研究部に入部したのも、七海と一緒に入ろうって言ったのがきっかけだった。私は何かサークルには入ろうとは思ってたけどこのサークルがいいとかはなくて、七海が天文研究部の見学に行くと言っからついて行った。

部室には牛丸先輩と犬飼先輩の二人だけがいた。室内の電気を消して、手作りプラネタリウムの試演していた。

「あー、天文研究部に入りたいんですけど……」

暗幕を引かれて薄暗い室内に入り、七海が声をかける。私はその後ろについていく。

ぱっと部屋の電気が付けられて部屋の明るさに瞬いて、目の前に立っていたのが秀先輩だった。

「一年生？ 入部希望者？」

ふわりと人懐っこい笑顔を向けられてドキンとする。

普段は初対面のいきなり声をかけられたら恥ずかしくて七海の後ろに隠れるんだけど、ノンフレームの眼鏡の奥に見える優しげな瞳に吸い込まれそうになって、見とれてしまった。

「はい、そうです。見学いいですか？」

「大歓迎だよ。俺は犬飼です、こっちが副部長の牛丸。真一、説明してやって」

後半は牛丸先輩に言ったんだけど、きりつとした一重の牛丸先輩は抑揚のない声で。

「俺説明苦手だから、秀お願い」

そう言って、机の上に置いていたプラネタリウムを丁寧に片し始めた。

真面目でクールな雰囲気の牛丸先輩と対照的に人懐っこい笑顔が印象的だったからかもしれない、私は秀先輩に一目惚れ 初めて会った日から惹かれ始めていた。

男性が苦手と言っても、恋愛に興味がない訳じゃない。ただ今までは、男性とまともに話す事が出来なくて、恋愛対象になる人がいなかっただけ。

入部すると、秀先輩とすぐに仲良くなった。秀先輩は優しくていつも手際が悪い私を気遣ってくれて、秀先輩が相手なら七海を間に挟まなくてもちゃんと話せた。

秀先輩が優しいのは私にだけじゃなくて、誰にでも優しいのは気づいている。私が特別とか、そんな勘違いはしていない。だけど。

七海に誘われて天文研究部に入った私は自分の意思で入った訳じゃないくて、天文のことは高校の授業の内容までしか知らないし、人

見知りの性格も手伝って、あまり積極的に部活に参加していなかった。

それが気に食わなかったみたいで、一学年上の先輩からいじめ無視されたり、一人で掃除をさせられたりした時期があった。

そんな時、私を目の敵にする先輩から庇ってくれたのが秀先輩だったから　好きな気持ちがどんどん大きくなってしまった。

秀先輩はいま三年生、今年の秋には部を引退してしまう。そうしたら私と秀先輩の接点は何もなくなってしまふ。そんなのは悲しすぎる。

だから、この合宿中に告白しようと決意したの。だけど、人見知りの私、四六時中部員がいる中で告白をする機会を見つけられるか分からなくて、悩んでいた私に七海が企画係になって告白の協力をしてくれると言った。

つまり　自由行動の企画の日、私と秀先輩が二人つきりになって告白できるようにしてくれるって言うの。

企画は徹夜明けの日と言うことで参加人数はそんなに多くない。合宿所よりも二人きりになるチャンスは多いはず。

秀先輩が私を好きかも知れないなんて自惚れてはいない。告白してこの恋が実る確率は低い。だけど、例え確立が低くても気持ちを伝えずになかったことにすることは出来ない。

人を好きになって、気持ちを伝えるだけでも　私にとっては進歩だから。この恋で、少しでも成長出来たらいいと思っているの。

合宿二日目、昼食後に群馬展望台に行く。空はあいにくの曇り空で雨は降っていないけど、星はとも見えそうにはない。

観測の時間までは天文台の見学をし、東洋最大級の望遠鏡を見た

りして時間を潰す。

空が宵闇に包まれた頃、外の観測広場に寝転がって全天の夜空を見上げる。

左隣には七海が、右三十センチの所にはなぜか秀先輩が寝転がっている。少し手を伸ばしたら触れられそうな距離に心臓がバクバクいつている。

昼間より雲が少なくなり晴れ間が広がり十三夜月が顔を出す。空はどこまでも澄みきり、無数の星が瞬いている。

降ってきそうな星空に目を大きく見開き、両手を空に伸ばす。恋焦がれている輝く星に手が届きそうで

当然だけど星には手が届かなくて、空をむなしくかく。

右側からくすりと笑い声が聞こえて月明かりの闇の中、顔を右に向ける。

「何やってるの、羽鳥」

秀先輩の純粋な笑い声が聞こえて、ドギマギする。

星を掴もうとしたなんて、子供じみたところを見られて恥ずかしい。秀先輩は 星みたいに眩しく輝いていて、私には手の届かない人に感じる。それなのに今はこんなに近くに存在を感じて、愛おしさに胸がいっぱいになる。

寝転がったままひたすら空を見上げ、時刻は日付をまわり十三日午前一時頃。

キラッ と空に一条の煌きが走り抜ける。

「わぁ っ！」

瞬間、広場に歓声があがる。

一つ、また一つと流星が出現し、星が夜空を走っていく。よく、流れ星が流れる間に三回願い事を唱えれば願いが叶うって

言うけれど。

たった一瞬だけの輝きを見せ夜空に吸い込まれるように消えていく流星は、美しいけれどどこか儚くて 見入ってしまったて願い事を唱えようという気にはならなかった。

「わぁ っ！」

また一つ、走る星に広場がどよめき、感嘆の声が聞こえる。私も思わず声を出して空を見上げる。

「綺麗……」

仰向けに寝転がった体の横に投げ出していた手が誰かの手と触れてしまつて、ぴくりと反応する。

右側を見なくてもそこにいるのが秀先輩だつて分かつて。秀先輩の手と触れてしまったんだつて分かつて、鼓動が一気に早くなる。

ふわっと、触れていた手の甲から手のひらに温もりが広がつて、秀先輩に手を握られた。

秀先輩 ！？

突然手を握られて、てんぱってしまう。微動だに出来なくて固まっていると、再び流星が流れて広場に歓声が響き、すっと手が離れていった。

第3話 恋愛対象 星降りの丘（後書き）

人物紹介
いぬかい しゅう
犬飼 秀

武蔵野理科大学三年、天文研究部副部長

第4話 恋愛対象 流星のように

十三日の早朝、流星群の観測を終えて合宿所に戻るバスの中、私は広げた右の手のひらに視線を落として、小さなため息を漏らす。天文台から合宿所まではバスで二十分も掛からないのに、部員のほとんどが寝てしまっている。徹夜で観測したのだから仕方がないのかもしれないけれど。

私も眠かったけど、あまりに胸が高鳴って眠れない。

間違いじゃなかったよね

気のせいじゃなかったよね

自分に問いかけて、温もりの消えない手のひらを見つめる。流星のようにほんの一瞬だったけど、秀先輩は確かに私の手を握った。間違いとかじゃなくて、私の手だって分かって握ったんだ

もしかして、秀先輩も私のこと

そんな甘い期待を胸に抱いてしまって、大きく頭を左右に振る。ダメダメ、期待して振られたら、どんなに絶望が大きくなるか……でも、だけど。

心の中で葛藤が繰り広げられる。私が告白するのは、もう今日なんだ

合宿所に着いたのは五時少し前。朝食は七時から皆で食べるんだけど、この日は朝食の時間は決められていない。部員はすぐに部屋に戻って仮眠をとるか、昼まで寝る。

私と七海は企画係だから集合時間の十時よりも少し早く準備をしなければならぬ。八時くらいまでは寝られるかな。

部屋は二年女子五人の12畳の畳部屋。部屋に帰ってくるなり、

みんな片付けもほどほどに布団を敷いて寝てしまふ。

私も片づけを済ませて、携帯のアラームをセットして窓側に敷いた布団に横になったんだけど、もやもやが頭の中から離れなくて、バスの中よりも完全に目が冴えてしまった。

遮光カーテンの引かれた窓の隙間から朝日が差し込み、室内はうつすらと明るい。

寝ようと思って瞼を閉じてても、色々考えてしまふし、瞼の裏は明るくて、到底眠れそうになかった。

私は音をたてないように静かに起き上がり、財布と携帯だけを小さな鞆に入れて立ち上がる。

確か合宿所の近くに湖があるって言うってたな……

そんなことを思い出して、合宿所を出て歩き出す。

外はすでに日が昇り始めて、見上げると空の真ん中で夜空と朝空がまじりあつて絶妙な色合いをしている。

合宿所の前の坂道を登り、畑の中のうちった細い道を進んで、若葉が生い茂る林を抜けたところに細長い湖があった。湖の際まで寄ると、ぴちゃぴちゃと水が打ち寄せてくる。靴が濡れないような位置を歩いて湖を一周して、しばらく時間を潰してから合宿所へと戻った。

入り口の階段を軽快に駆け上がり、自動ドアをくぐって、私はぴたっと足を止める。すぐ目の前のロビーのソファで秀先輩がうたた寝をしているのが視界に入ってビックリする。

秀先輩、どうしてこんなところで

そう思いながら近づく。秀先輩は一人掛けのソファの肘かけに寄りかかるように体が斜めに傾いで寝ている。間近で見た秀先輩の顔、眼鏡の下の睫毛がすごく長いことに気づいてほれぼれとしてしまふ。

ああ、私は秀先輩のことが好きなんだ

愛おしい気持ちに突き動かされて、日に透けた色素の薄い髪の毛に手を伸ばす。少し癖のある髪の毛は外に向かって跳ねている。ず

っと思っていた、秀先輩の髪の毛は柔らかそうって。触ってみたくてうずうずして手を伸ばして、額にかかる髪に触れる直前。

「ん……」

ぴくつと肩を揺らしてみじろいだ秀先輩に、私はびっくりして手を引っ込め、慌てて部屋へと駆け戻って行った。

わっ、私ったら、何しようとしたの？ 寝てる秀先輩の髪に触れようとしてたなんて、なんて恥ずかしいのかしら。自分の行為を思い返して、見る間に顔が真っ赤になってくる。

よかった、触れる前で。秀先輩が寝てくれて、良かった。

ほっと胸をなでおろして、扉を背に立っていた私は力が抜けてへなへなとその場にしゃがみこんだ。

集合時間の十時、企画に参加するのに集まったのは十五人で、三年生は秀先輩の他に二人、二年が私と七海とあと二人、一年生が八人……

一年生が多いのは、若さのせいかしら。そんな事を考えて、自分ももう二十歳だということを実感して悲しくなる。

合宿所のマイクロバスを借りて、玉原ラベンダーパークに向けて出発する。山道を降りて登って、予定より数分早く到着する。十時半前だというのに夏休みだからか、駐車場には多くの車が止まり、園内もそれなりに人が入っているようだ。

「では、十二時まで自由行動です。昼食場所はリフト降り場の側のレストハウスです。十二時にレストハウス前に集合して下さい」

ゲート前で私が人数分のチケットを買って渡して回っている間に、七海が手早く説明する。

近くにいた人から順番にチケットを渡し、他の三年生と一緒にいる秀先輩には目を見れずに渡してその場を素早く離れる。

展望台で手を繋がれた事も、朝のロビーで私から触れてしまった事も夢か現実がよくわからないのに、胸のドキドキだけが現実だと告げていて、秀先輩の顔をまともに見られなかった。

「時間厳守でお願いします。解散です」

七海の言葉で十五人の部員はゲートをくぐり、ぱらぱらと園内に散らばっていく。

ゲート入ってすぐ横で立ち止まり、パンフレットとチケットを鞆の中にしまっていた私の腕を七海が力強く引っ張る。

「ほら、れい。秀先輩に声かけなよ」

七海は言いながら私達の少し先にいる秀先輩に視線を向け、私もつられて視線を向ける。瞬間。

こっちを見ていた秀先輩のこげ茶色の瞳と視線が合う。

「あっ……」

視線があっただけでこんなにも意識してしまって、体中が石になったみたいに重くて動かない。

「ほらっ」

七海が急かすように私の背中を押すけれど、私は身じろぐ事さえ

出来なくて。

じつとこつちを見ている秀先輩の視線が突き刺さって、顔がどんなほてっていくのが分かる。

言わなきゃ　そう思うのに、言葉が出てこなくて。

私と秀先輩の視線が交じわっていたのは、ほんの数秒だったのかもしれない。だけど私にはすごく長く感じて。

「……………」

秀先輩がこつちに一步踏み出して何か言おうと口を開く。ドキんと胸が大きく飛び跳ねる。何を言われるのか期待と不安で胸が押しつぶされそうで、ぎゅっと瞳をつぶって斜め横を向く。その瞬間。

「犬飼君、一緒に行こうよ」

他の三年生に声をかけられて、秀先輩はいてしまった。

しばらく俯いたまま黙っていると、七海が呆れた様なため息をつく。

「あーあ、行っちゃった。まあ、緊張するのは分かるけどね、頑張るんですよ」

私が緊張して声をかけられなかったんだと思って、七海が励ますように背中をばしばし叩く。

「いつ、痛い……七海」

本気で痛くて、少し涙目になって七海をしたから睨む。

頑張ると言った私の背中を押してくれる七海の気持ちは嬉しいけれど、緊張してるんじゃないかって気まずい……なんて言えなくて、複

雑な感情にはあーつとため息をついた。

「とりあえず私達も行くのか？」

時間をもつたいないという様に、七海が歩き出しながら言う。

「リフト乗る？ それとも歩いて行く？ 歩いて二十分くらいみただけだ」

リフトに乗るもの気持ち良さそうだなって思ったけど、リフトの列に視線を向けて、その中に秀先輩をいるのを見つけて ここからの距離じゃ、先輩がこっちを見ているかなんて分からないのに見られている様な気がして ぱっと視線をそらす。

「二十分ならすぐだよ、歩いてみよう」

「天気もいいし、散策しながら行きますかっ」

秀先輩を避けた私の心には気づかずに、七海は軽快な声で言うて遊歩道を歩きだした。

目に飛び込む爽やかな緑に囲まれた板敷きの小道は緩やかな傾斜になっている。雄大な自然に囲まれた遊歩道を登りきると、そこには一面のラベンダー畑。

ラベンダーブルーの絨毯のように、そここで紫色の小さな花が風に揺れている。

大きく深呼吸して、ラベンダーの香りを肺いっぱい吸い込む。すうーとした匂いと甘い香りに心が満たされて、ぎゅっと目を閉じる。

何年ぶりだろうか

小学生の頃、家族旅行で行った北海道で初めてラベンダー畑を見

とても感動した。小さな花が丘一面に咲き誇って、凜とした美しい景色が鮮やかで、甘さと爽やかさの調和のとれたフローラルな香りに一瞬で虜になってしまった。

お土産物屋さんでラベンダーの香り袋を買い、枕元や衣装棚に入れた。母に頼みこんでラベンダーの鉢植えを買って、それ毎年育てている。

私が一番好きな花。心が癒される花。

あれ以来　ラベンダー畑に行くことはなくて。今回の合宿先が群馬と聞いて、前から言ってみたいと思ったたんばらラベンダーパークが近くにある事を知って、企画の行き先は『ここだ！』って即決した。

念願のラベンダー畑をもう一度見る事ができて、嬉しくて仕方がなかった。

目を閉じて香りを満喫していた私は目を開けて、ラベンダーブルーの絨毯を見て頬がだらしく緩んでしまう。

そういえば　と、カフェ・ブルーベルの壁に書かれた絵を思い出す。あの絵に目を惹かれたのは、子供の時に見たラベンダー畑を思い出させたからかもしれない。だから、あの店に自然と足を運んでしまうのかもしれない。

そんなに広くもない園内。私達の後ろを歩いてきた一年生がやってきて、ラベンダー畑の前で一緒に写真を撮ったり、撮ってあげたりする。

秀先輩とも近くを通ったりして、何度も声をかけるチャンスはあった。

私の気のせいじゃなければ、秀先輩も私に声をかけようという仕事を何度かしていた気がする。だけど。

あっという間に自由時間は終わり、昼食中も席が端と端で　結局告白できないままに合宿所へ帰り、夜は合宿の打ち上げの飲み会

をし。

合宿最終日、帰宅の日になってしまった。

第4話 恋愛対象 流星のように（後書き）

人物紹介

牛丸 真一うしまる しんいち

武蔵野理科大学三年、天文研究部部长、秀の親友

第5話 恋愛対象外

気持ちを伝えないまま終わりにしたくない恋を見つけた。

その気持ちを伝えるだけでも、人見知りの私にとっては大きな進歩で。だから頑張ろうって思ったの。それなのに

どうしても秀先輩のことを意識してしまって声をかけられなかった。流星群の観察会から後 先輩とはほとんど話さず、もちろん二人きりになって告白するなんて出来るわけがなかった。

私の気のせいじゃなくて、秀先輩は飲み会中も私の方をじいーつと見てて。何度も声をかけられそうになつては、七海と話している振りやトイレに逃げたりしてしまった。

七海はそんな私を緊張していると思っていたのか、ため息をついても、煽るような事を言うてくることはなくて、少しだけほっとしていた。

帰りのバスの中、眠くはなかったけどほとんどの部員は寝てしまい、斜め後ろに座った秀先輩が起きているのを感じて、なんだかいたたまれなくて寝たふりをした。

こんな風に逃げてばかりいてもどうしようもないのに、心が不安に押しつぶされそうで、秀先輩の顔をまともに見る事も出来なかった。

「羽鳥っ！」

バスから降ろした鞆を持って素早く校門に向かおうとした私の腕が力強く引かれ、ぴくりと足を止め、視線を足元に落とす。振り返らなくても、呼びとめた声が秀先輩だって分かってしまって、切な

さと不安とない交ぜな気持ちで鼓動が早鐘を打つ。

「な、ん、ですか……？」

振り返る事も出来ず、震える声で聞き返すのがやっとだった。

掴まれた腕から心臓の音が聞こえてしまいそうで、離してほしくてみじろぐと、察したように少し困ったような秀先輩の声が後ろから聞こえた。

「あつ、ああ、悪い。少し話があるんだけどいいか？」

有無を言わせない言い方ではなく気遣わしげな声に秀先輩の優しさが伝わって、心が切なく震える。

私はゆっくりと振り返り、秀先輩の顔ではなくて繋がれた手に視線を向けて、こくと頷いた。

秀先輩はさりげなく私の手を離して歩き出し、私もその後、三歩離れた距離を歩く。

バスの中で牛丸部長の解散宣言がされ、バスの荷台から荷物を下ろした部員が次々と校門を出ていく中、私と秀先輩は逆方向 校舎へと向かって歩く。

途中、秀先輩は他の三年生に「どこ行くんだった？」って声をかけられると、「ちよつと」と笑って返した。

七海は私が秀先輩と一緒にのを見て、頑張れっというように手を振ってくれて、私は複雑な気持ちでっ少しだけ手を振り返し、秀先輩の後を追った。

車両門からすぐ横にある部室棟の前に止まったバスから、まっすぐ伸びる桜並木 今は青葉だけど夜で分らない を進み、食堂の手前で秀先輩は立ち止まった。

お互い大きな鞆を地面に置くと、秀先輩が振り向いて私を見つめる。

呼び止めてこんなところに連れてきてまでする話ってなんだろう
そう考えて、合宿所でも頭を廻った期待と不安が渦を巻いてぐ
るぐると胸に押し寄せる。

秀先輩の目の前に立っているだけで緊張して、逃げてしまいたい
衝動にかられる足を、必死にその場に繋ぎとめた。

「あの……」

「あつ……」

私と秀先輩が口を開いたのは同時だった。ぱつと顔を上げた私は
秀先輩の瞳と視線があつて、お互い大きく目を見開く。

まさか秀先輩が何か言おうとしたのと被るとは思わなくて、ばつ
が悪くて私は視線を横にそらしてきゅつと両方の手のひらを握り合
わせる。

「その……」

秀先輩には珍しく歯切れ悪く口ごもるから、思わず仰ぎ見てしま
う。そこには星のような優しい煌めきの瞳があつて、ドキンツと大
きく心が震える。

「天文台のことだけど……」

天文台？ 初めは何の事を言いたいのかわからなくて すぐに
手を握られた事だと気づいて、ぼぼと湯気が顔から出そうなほど
顔が赤くなつたのが自分でも分かって、慌てて俯く。

「びつくりしただろ？ 突然手を握ったりなんかして、ごめん。流
星があまりに綺麗で興奮して……」

無邪気な子供みたいな理由で、秀先輩らしいと思って苦笑する。

「はい、驚きました」

温かくてくすぐったい気持ちで胸がいっぱいになって、くすりと笑って頷いた。

「本当にごめん。そのことをずっと謝りたくて」

私と同じように、秀先輩もずっと手を繋いだ事を気にしてくれてたことに、気まずくて避けてしまっていたことが申し訳なくなる。気にしていません　嘘だけどそう言ってこの話を終わりにしようとしたんだけど。

「妹みたいに思っている羽鳥とは気まずくなりたくないんだ」

その言葉が鋭い刃物の様に胸に突き刺さる。

ツキン、ツキンと胸が締めつけられて苦しくなる。

もしかしたら、秀先輩も私のことを好きでいてくれるかもしれない。意識してくれているのかもしれない　その淡い期待が、無残にぼろぼろと音を立てて崩れ落ちる。

妹みたい　その言葉で恋愛対象外だと言われていることが分かってしまつて切なかった。

「　　」

秀先輩からそらしていた視線をくつと上げ、星の輝きの瞳をまっすぐに見据える。

「私は秀先輩が好きですっ」

気がついたら勢いで告白していた

目の前の秀先輩の瞳が驚きで大きく見開かれ、それから困ったように眉尻が下がるのを見て、ぎゅっと胸が痛み視界の端が滲みだす。こんな風に投げやりに言うつもりじゃなかった。

もつと慈しみを込めて言うつもり言葉が、ぽろっと瞳から落ちる冷たい雫と一緒にこぼれ落ちた。

「……羽鳥、ありがとう。だけど」

続きの言葉なんて聞かなくても想像が出来て、くしゃくしゃに顔を歪ませる。

「羽鳥のことは好きだけど、それは大事な後輩としてで」

困ったような秀先輩の言葉を最後まで聞かずに、私はその場を駆け出していた。

地面に置いた合宿の鞆も忘れ、手持ち鞆一つでただ無我夢中に走っていた

食堂の前からどこをどう走ったのか覚えていない。気がつけば、見慣れたウッドテラスの横の黒い縁の硝子扉を押し開け、右奥のラベンダーブルーの壁画の前の席に座っていた。

「いらっしゃいませ。ご注文は何になさいますか」

お決まりのフレーズが遠くで聞こえても、私は何も答えられなかった。

走っている間、瞳から涙が溢れて零れて夜風に飛ばされて、今はもう涙は出ていなかったけど、ぼんやりとした視界の中にはラベンダーブルーの絨毯のようなブルーベルの絵だけがしっかりと写されていた。

子供の頃に見た北海道のラベンダー畑。

昨日見た玉原のラベンダー畑。

そのどちらよりも鮮明で匂い立つような美しさの絵に焦点の定まらない視線を向けて、テーブルに頬杖についてふうーと深呼吸の様な小さなため息をついた。

ラベンダーは甘くて爽やかな香りだけど、ブルーベルはどんな香りなのかしら。そんな事をぼんやりと考えた時。

甘く爽やかなラベンダーの香りではなく、香ばしさの中に気品に満ちた薔薇の花のような香りがふわりと漂う。

ずっと、頬杖をついたテーブルの端にコーヒーカップが置かれ、そこからフローラルな香りが漂う事に気づいて顔を上げると、トレンチを脇に持って虎沢オーナーが立っていた。

オーナーとは初めてお店に来た時少し話しただけなのに、その後足しげく通うようになった私にいつも話しかけてくれて、時々サービスもしてくれる。私にとってオーナーは、七海を挟まずに話せる数少ない男性で信頼している人だった。

「オーナー……」

オーナーは片眉を上げ心配そうな顔で私を見て、その時になってお店に来てから一言も話していない事に気づく。

涙の後の残る頬を慌てて拭う。

オーナーの顔とテーブルの上のコーヒーとを見比べて、カップを手元に引き寄せて口をつける。カップを口元に近づけた瞬間、香ば

しさの中にある花のような香りがふわりと鼻腔をくすぐり、馥郁たる香りが立ち込める。

口を含むと、果実酒の様な酸味と甘さとコクがほどよく調和された絶妙な味わいのコーヒーだった。

「このコーヒーは……？」

今まで飲んだどのコーヒーとも違う味わいに首をかしげると、太陽の様なふわりとした笑みを浮かべてオーナーが言う。

「ブルームーンブレンドです」

「ブルームーン……そんなブレンド、メニューにありましたっけ？」

週三回くらいは来ているから、メニューもほとんど覚えてしまっている。だけどそんなメニューはなかったはずで、確認しようとメニュー表に手を伸ばすと、オーナーが苦笑して首を振る。

「いえ、メニューにはありませんよ。うちの従業員がブレンドした試作品です。お味はいかがですか？」

試作品と聞いて片眉を上げ、それからすでに半分ほどの量になっているカップに視線を落とす。

「美味しいです。甘さとコクがちょうどよくて、香りもすごく良いし。私、好きです」

目を閉じてブレンドコーヒーの香りを吸い込むと、さっきまで胸に渦巻いていた苦しい気持ちを吹き飛ばしてくれるような気がする。

オーナーは福福とした笑みを浮かべてカウンターへと戻っていく。私はブルームーンブレンドの香りを最後まで堪能した。

ずっと鼻をすすって、今更だけどティッシュを取り出して鼻をかんで頬に残る涙の跡を拭う。オーナーには泣いた事に気づかれたかもしれないけど、仕方ないと思ってしまった。

それよりも、失恋の辛さを消してしまいそうな不思議な味わいのコーヒーをじーっと見つめる。

こんなに美味しいコーヒーを作ったのはどんな人なんだろうという好奇心が湧いてくる。だけど。

ブー、ブーと鞆の中で携帯が振動し、取り出して画面を見てツキンと胸がまた痛み始める。

ディスプレイは秀先輩からの着信を知らせていた。

優しい秀先輩のことだから、話の途中で駆けだした私を心配しているんだろうと想像がつく。だけど今は、その優しささえひどく切なくて、私は泣きそうに顔を歪めて携帯を鞆の中に戻した。

ブー、ブーとバイブレーションがしばらく続き、やがて途切れて、はぁーと大きなため息をつく。

電話を無視するのはよくないって分かってるけど、今は秀先輩の口から聞くどんな言葉も失恋を思い知るだけで辛いから。とてもじゃないけど電話に出ることは出来なかった。

そうだ、私……失恋しちゃったんだ。

今頃になってその事を自覚して、胸がじくじくと痛む。

叶う恋だとは思っていなかった。両思いだなんてそんな期待はしていなかった。だけど　妹みたいという言葉は、好意を持ってもらってるのは分かるけど、私が欲しい気持ちとは全く違う。愛情じゃない。恋愛対象としてさえ見られていなかったことが、悲しすぎる。

もう涙は出ないと思っていたのに、ブルーベルの壁画に向けた視界の端がぼやけてきてくる。こぼれそうになった嗚咽を堪えて目元をぬぐおうとした時。

その腕を後ろからぐいつと引かれ、反動で振り返ったそこには二十代くらいの男性が立っていた。驚いて目を瞬いた瞬間、ぼろっと

涙が零れ、はっと我に返ったんだけど。

「ちよつと俺につきあって」

声は綺麗なバリトン。あまり抑揚のない声からは感情は読みとれないのに、言葉と行動が強引に私を引っ張り、立ち上がらせる。

「えっ……」

人見知りとか男性が苦手とかそんなことを言う間もなく、有無を言わさずお店から連れ出されてしまって

わっ、私、どうなっちゃうのぉ　！？

第5話 恋愛対象外（後書き）

人物紹介

虎沢 誠一郎
とろさわ せいいちろう

カフェ・ブルーベルのオーナー、三十六歳

第6話 愛を奏でる天使 強引な人

私の腕を引いてずんずん歩く男性はすらりと背が高く、紺のカーゴパンツに白いシャツ、ダイス模様の臍脂のカーディガンを着ている。艶めく漆黒の髪は肩につくくらい長くて、上半分だけ結んでいるのを、後ろから見上げる。

運河駅に着くと二人分の切符を買って電車に乗りこむ。どこに向かっていくのかも分からないのに、私は黙って腕を引かれるままに従っていた。

突然、声をかけてきたこの人は強引に私の腕を引いて歩き出したのに、店を出て鞆を持っていないと気付いた私の鞆をちゃっかり持っていたり、黙々と歩いているけれど私の歩調に合わせてゆっくり歩いている事に気づいて、強引なのか優しいのかよく分からなくなってしまうた。

いつもだったら知らない人と二人きりなんて状況は絶対にありえない。人見知りで緊張しているから黙って従っている訳じゃない。失恋でやけっぱちになっているのとも少し違う。

ただ、電車の中で見たこの人の瞳が心配そうに私を見ているからなんとなくついて行ってもいいかなって思ったの。

それに一人でいるのは辛いことばかりを考えてしまっただけ嫌だったから……

運河駅から電車に乗り柏駅で降りる。土曜日の十九時過ぎ、お盆期間という事もあって柏駅前のコンコースは学生や会社員、飲食店の勧誘の人でごった返していた。

彼はその中を上手にすり抜け、私の手を引いて歩いて行く。

時々、すれ違う女性の囁きが聞こえ、何人もの人が振り返ってこっちを見ている様な気がしたけれど、たぶん気のせいだろう、と思うことにした。

東口を出て駅前の大通りをまっすぐ歩き、辿り着いた場所に私は啞然として大きく口を開いて入り口の前で立ち止まったのだけれど、そんな私の様子には気づいていない彼にまたしても強引に腕を引かれ店内に足を踏み入れることになる。

自動ドアが開いた瞬間、耳を塞ぎたくなるような騒音と店内のBGMに、私は眉根を寄せる。

迷うことなく店内を進み、振り返った彼の瞳が心なしか輝いているように見えて、眉間の皺を深くする。

「どうしますか？」

その質問の意味が分からなくて、そのまま聞き返す。

「どうしますかって……？」

彼も私の質問の意味が分からないように首をかしげる。

「UFOキャッチャーやりますか？ それともレースゲー？ 格ゲーがいいですか？ マジアカも楽しいですよね？」

ね、と言われても……

ところどころ日本語なのかどうかも分からない単語に私は首をひねる。

「あの……カクゲーってなんですか？」

分からないから聞いてみたんだけど、彼がぼかんとした顔で私を

凝視するから、どうしてもいいか分からなくなってしまう。

「格闘ゲームのことですよ？ ゲームはあまりやりませんか……？」

少し困ったような声で彼が言うから、私は苦笑して首を横に振る。

「あまりというか……全然。ゲームセンターは一回目は少し入口のあたりに入っただけで、今回が二回目です」

「えっ、二回目ですか！？」

彼は目を見張り、私の手を握っていない方の手で戸惑ったように首を触って横を向く。

あんまり彼が黙っているのも、私は掴まれた手をちよんつと引いて彼を見上げる。

「あの、どうしてゲームセンターに来たんですか？ なにか用事でもあるんですか？」

普通に疑問に思ったことを聞いただけなのに、彼ははつとしたように動きを止め、ぎこちない動きで俯いてしまう。何か気に障ることも言ってしまったのかと思ったら、顔を上げた彼はばつが悪そうに額にかかった髪をかきあげて皮肉気な笑みを浮かべる。

「ははっ……。いえ、俺が用事があった訳じゃなくて」

そこで言葉を切り、顔を間近に近づけられる。うつとりするような漆黒の瞳に真剣な光を帯びて私の瞳を覗きこむ。

「あなたが落ち込んでいるようだったので、ゲーセンにでも行けば気持ちを紛らわせられるかと思ったんですよ……」

口元に手を当てて、言い訳するように言う彼の瞳が優しい光を宿
していて、胸に温かいものが込み上げてくる。

私が落ち込んでいるからお店から連れ出してくれたの？

そういえば 秀先輩の事で悲しかった心が、今は彼の行動の奇
怪さに戸惑って、すっかり失恋のことを忘れていた。

その時になって、ずっと気つかかっていた違和感の正体に気づく。

「あなた、もしかして……」

至近距離にある彼の顔をさらに一歩近づいて覗きこみ、バラバラ
になっていた記憶のパズルがかちりとはまる音がする。

そうだ。見覚えのある顔だと思っていたのは、初めてカフェ・ブ
ル・ベルに行った時、私と話しているオーナーに声をかけてきた従
業員の人だったからだ。

えっと、確か名前は

「たつみ、さん……？」

私の声に、たつみさんはぴくつと肩を揺らして星空のような漆黒
の瞳を大きく見開く。その瞳の奥には、焦がれるような熱と何かを
強く求めるような光があって、掴まれていた手にぎゅっと力が込め
られる。

あれ、違ったのかな……？

私が首を傾げ尋ねようと口を開くと、ぽつりと戸惑いがちな声が
聞こえる。

「どうして名前……思い出したんですか……？」

「えっと……オーナーが確かあなたのことをたつみさんって呼んで
ましたよね？ 違いましたか？」

私が困ったようにたつみさんを見上げると、一瞬鋭く瞳が光って、宿っていた熱がずっと引いて涼やかな瞳になる。

「ああ……そんなことがありましたね」

たつみさんは皮肉気に笑うと大きく息を吐いて、綺麗な笑みを浮かべる。

お店からずっと掴まれていた手を離して私の正面に立った辰巳さんが小首を傾げて私を見下ろし、さらさらの前髪が瞳の上で揺れる。

「自己紹介がまだでしたね。俺の名前は辰巳 かなで 奏です。よろしく、羽鳥さん」

「あつ、はじめまして。私は羽鳥……って、あれ？」

差し出された手を掴もうとして、辰巳さんをぱつと振り仰ぐ。

「どうして私の名前を知っているんですか……？」

喫茶店で何度も会っているとしても、名前を教えた覚えはなくて怪訝に見上げると、一瞬、寂しげに顔を曇らせてくすりと笑う。

「あなた、常連のお客様ですし。虎沢オーナーから聞きました」

「あつ、そうなんですか……」

もつともな理由に納得して、警戒したのが少し恥ずかしくて俯きながら改めて差し出された手を握る。

辰巳さんはふわりと薫るような妖艶な笑みを浮かべて、私の手を握った。

「では気を取り直して、羽鳥さんのゲーセンデビューと行きましょ
うか」

「えっ、えっ……!？」

また手を強引に引かれ、ゲームセンターの奥へと足を踏み入れた。

第6話 愛を奏でる天使 強引な人（後書き）

人物紹介

辰巳 奏 たつみ かなで

カフェ・ブルーベルのイケメン従業員

第7話 愛を奏でる天使 ガラスケースの秘密

店内のBGMと大音量の機械音に耳が痛かったのは最初のうちだけで、お店の中にいるうちに耳を塞ぎたくなるような騒音はぜんぜん気にならなくなっていた。

「ゲーセンといえば、まずはUFOキャッチャーですね」

そう言われて連れて行かれたのは店内入り口付近のUFOキャッチャーコーナー。ぬいぐるみは小さいものから大きいもの、ぬいぐるみ以外にもフィギアや時計、香水、お菓子まであって、どんなものがあるのか眺めているだけでも楽しめた。

「あつ、この猫……」

通り過ぎようとしたUFOキャッチャーのガラスケースに手をついて中を覗きこむ。中に並べられているのは、だるまみたいな体型に短い手足、愛嬌のあるタレ目のメタボ猫のぬいぐるみ。

一年前から私の部屋に居座っている三毛柄のメタボ猫と同じ種類のぬいぐるみに、つい見入ってしまう。

「何か気になる物がありましたか？」

立ち止まった私に辰巳さんが振り返って聞いてくるから、私は頬をかいて苦笑する。

「いえ……持っているぬいぐるみと同じのがあったので」

「これですか？」

ガラスケースの中を覗きこむ。

「UFOキャッチャーはやったことがあるんですね？」

「……？ ないですよ？」

断定的な質問に首を傾げた私を辰巳さんはちらりと見て、繋いでいた手を離して機械にお金を入れる。

「やってみますか？」

「えっ!？」

「アームは最初のボタンで左へ、次のボタンで奥に動きます。猫の脇を狙うのがコツです。大丈夫、やってみてください」

私の後ろに回った辰巳さんが、ボタンに恐る恐る伸ばした私の手に手を重ねて肩越しに話しかけるから、不覚にもドキドキしてしまう。

なっ、なにこの体勢！？

どうしようもない動悸にてんばって頭に真っ白になりかけるから、私は無理やり頭を動かす。

このドキドキはいきなり真後ろに立たれたからで、体が密着しているからで、そんないい訳を頭の中でぐるぐる考えたんだけど、人見知りとか男性が苦手とかそういう理由は思いつかなかった。

背中に全神経があるんじゃないかっていうくらい緊張して体がこわばってしまう。 فقط。

「あっ……」

ガラスケースの中で、アームに持ち上げられたメタボ猫が宙に浮

かびばてんつと落ちる。落胆の声を上げて、ガラスケースの中に真剣なまなざしを向ける。

初めてやったUFOキャッチャーでぬいぐるみがもうちょっとで取れそうだったから、気持ちが高ぶって。

「あー、おしかったですね」

その声に思わず振り向いたら、肩越しに花が綻ぶような笑みを浮かべている辰巳さんと視線があってしまっ、かぁーと顔が赤くなるのが自分でも分かって動揺する。

「そう、ですね……」

ぱつと視線をそらして、ガラスケースの中の落ちそうな場所に移動した白いメタボ猫を見つめ、しゅんとする。

初めてやったのだから取れるとは思っていなかったけれど、手の届きそうな場所に來たのに手が届かないのがもどかしくて、諦められなくてその場に立ちつくしていると。

「ちょっといいですか？」

辰巳さんに言われ、ガラスケースの前から横へと移動する。じゃらつとお金を入れて、慣れた手つきで操作ボタンを押す辰巳さんの瞳は真剣で、ガラスケースの中のメタボ猫じゃなくて、彼の表情につい見入ってしまう。

悔しそうに唇をcanで、それからぱつと少年のように顔を輝かせるから、辰巳さんからガラスケースに視線を動かすと、アームに引っ掛かった白いメタボ猫が落ち、落ち口に引っ掛かっていた白いメタボ猫に当たって二匹の猫が落ちていった。

取り出し口の前にかがみ二匹の白いメタボ猫を取り出した辰巳さ

んが、ふわりと薫るような妖艶な笑みを浮かべて私に差し出すから、心臓が早鐘を打ちはじめ。頭の片隅で微かに警戒音が鳴り響く。

「どうぞ」

「えっと……」

私を見つめる瞳に言い知れぬ熱が宿っているから、ドキドキして言葉に詰まる。

「受け取って下さい。羽鳥さんのためにとつたんですから」

そんな風に言われたら受け取らない訳にはいかなくて、恐る恐る手を伸ばしてぬいぐるみの一つを受け取る。

「ありがとうございますっ」

ぎゅっと胸の前でぬいぐるみを抱きしめて、心の底から感謝を述べる。手の届かないと思っていた存在が腕の中に確かにあって、愛しさに胸がいっぱいになって瞼を閉じて頬を綻ばせる。

「こっちもどうぞ」

顔を上げると、辰巳さんは手に残ったもう一匹のメタボ猫を顔の前に掲げてから、すでに一匹の猫を抱える私の腕の上にぽんと置くと、少年のようなあどけない笑顔で笑うから、とくんっとながら胸が跳ねる。

私は腕の上に乗せられた白猫を落とさないように掴み、辰巳さんに差し出す。

「一つだけでじゅうぶん嬉しいです。だから一つは辰巳さんのお家

に飾って下さい、お揃いですね」

ただメタボ猫を取って貰ったことが嬉しくて、顔の横でぬいぐるみを動かして笑いかけると、一瞬、辰巳さんが目を見張ってから差し出したぬいぐるみを受け取った。

「分かりました、ちゃんと飾ります」

畏まった言い方に笑みが漏れ、慌てて口元を押さえると視線が合う。はにかんだ笑みを浮かべた辰巳さんと二人でくすりと笑い合った。

辰巳さんはお店を出た時の強引な雰囲気ではなく、優しく私の手を掴んで歩き出した。

「次は、クイズゲームなんてどうですか？」

頷き、手を引かれるまま歩く。辰巳さんのおすすめのクイズゲームをし、レースゲームをして、まだ夕食を食べてない事に気づいてゲームセンターの向かいにあるイタリアン料理店に向かった。

ゲームセンターとは無縁の生活をしてきた私が初めてゲームセンターに行ったのは一年前。サークルの新入生歓迎会の飲み会と二次会のカラオケに行く間の時間つぶしに先輩達に連れられて行ったのだった。

先輩や同期がゲームセンターで遊ぶ中、私は初めて足を踏み入れたゲームセンターの大音量に戸惑い雰囲気圧倒されて、同期と一

緒にゲームしている七海から離れ店の外に出た。

外にはたばこを吸っている先輩が数人いたけど、人見知りの私は話しかけるなんて出来なくて、近くで夜風に当たって一人で立っていた。

すると、私の頬にいきなりふわふわした物が押し当てられる。驚いて振り返ると、ふわりと人懐っこい笑顔を浮かべた先輩がずんぐりむっくりの三毛猫のぬいぐるみを私の頬に押し当てていた。

「ふふっ、驚いた？ 羽鳥にあげるよ、これ」

「ありがとうございます……」

緊張のせいか、違うもののせいなのか、ドキドキする心臓を押さえてぬいぐるみを受け取った。

私よりも背の高い先輩は、少し腰をかがめて私と視線を合わせると、心配そうに眉尻を下げて尋ねる。

「ん？ 外にいるなんて具合でも悪い？」

「いえ、あの……」

ゲームセンターが初めてで慣れなくて そんなことすら言えなくてしどろもどろしている私に、先輩は苛立ったりせず話しかけてくれる。

「たばこ吸う……ってことはないか、まだ未成年だしな。どうした？ 何かあったのか？」

中学からの親友の七海さえ、私が初めてのゲームセンターで戸惑っていることに気づいていないのに、先輩だけが私の不安に気づいてくれて、胸にあたたかいものが込み上げてくる。

きつとその時には、秀先輩を好きになっていたんだと思う

第7話 愛を奏でる天使 ガラスケースの秘密（後書き）

人物紹介

安孫子 あひこ 桃花 ももか

れいの大学の友達、お団子頭

第8位 愛を奏でる天使 ハートブレーク

ゲームセンターの向かい、細いバス通りに面した建物の二階にあるイタリア料理のお店に入る。

時刻はすでに二十時半を過ぎていて、私はあまりお腹は空いていなかったけれど、辰巳さんもそうとは限らないから飲食店に行くことになった。

細長い店内は黒塗りの床、白い壁の所々にレンガが埋められ、カウンターはチェス盤模様になっているお洒落な雰囲気。木製のチョコレートブラウンの丸テーブルをはさんだ向かい側に辰巳さんが座っている。

メニュー表を広げると美味しそうな写真が載ってて、お腹すいてないとか言いながらエビとカニのトマトソースパスタとラザニアのハーフプレートとライムチューハイを頼んでしまった。

しばらくして料理が出てきて、辰巳さんの前に置かれたのがオムライス風グラタンと大盛りのカルボナーラで、その量の多さに目を見張る。

わぁー、男の人ってこんなに食べるんだ。繁々とテーブルに並べられたお皿を眺めて、こんな風に男性と二人きりでご飯を食べることが初めてと気づいて、また驚く。

親友の七海を挟まないで話せる男性なんて数人しかいないのに、人見知り体質で人と距離を置いてしまう私の側に辰巳さんは一足飛びで近づいてきた。

まるで青空に浮かぶ月のように影もなく側に寄ってきて、それでいて包み込むように見守っていてくれるような優しさがあるから、安心してしまうのかもしれない。強引な行動に戸惑うばかりで、男性に対する苦手意識や緊張することも忘れてて、気が付いたら普通

に話していた。

人見知りとか男性が苦手というのも、私の方から距離を置くから相手のことが分からなくて距離が縮まらない　のかもしれない。人見知りと言って他人と距離を置いていたのがなんだか恥ずかしくなつて、苦笑がもれる。

「どうしました？」

笑っている私を怪訝そうに片眉を上げて見る辰巳さんを見上げる。

「初対面の人とこんな風に外でご飯食べるのなんて初めてだから、不思議な感じがして」

店員さんが持つてきてくれたチューハイを一口飲んで苦笑すると、星空の瞳が一瞬揺らいだような気がする。

「そうなんですか……？」

「そう、なん、です。人見知りだし、男性とは本当に親しい人以外とは面と向かつて話せないし……」

お酒は一口飲んだだけで、酔つてもいないのに饒舌になるのは感傷に浸っているからなのかもしれない。

親しい人　そう言つて頭の中に思い描いたのは、言うまでもなく秀先輩だった。だけど、もう秀先輩とは今まで通りに接するなんて出来そうになくて、顔を切なく歪ませて乾いた笑いが漏れる。

この間、ヤケ酒して酔いつぶれたばかりだという事も忘れて、誤魔化すようにチューハイをあおる。アルコールが一気に体中を廻り、ふわふわしていい気分になつて、へへへと笑いながらお酒の追加を頼む。

その時、飲み物を何も頼んでいなかった辰巳さんがビールを頼む

のをぼーとする頭で聞く。

私はラザニアを一口頬張って、向かいに座る辰巳さんをじいーつと見る。

「辰巳さんって不思議な人ですね。親しみやすいというか話しやすいというか、今日が初めて話したなんて気がしないです」

ラザニアを食べながら言うと、辰巳さんは出されたビールをぐいっと半分ほど飲んでから、鮮やかな笑みを浮かべる。

「それなら 羽鳥さんのもやもや、俺に話してみるのはどうですか？」

思いもよらない提案にしばらく瞠目し、テーブルの上のお皿に視線を落としてフォークでラザニアをぐさりと刺す。

核心をつかれて胸が切なくざわついて、けれどもそれが嫌ではなくて、ぼつりと小さな声で話します。

「失恋しました……さっき」

自虐的な笑みを浮かべて、傷ついた心に気づかれないようにラザニアをぱくぱく口に運びながら喋る。

「初めて好きになった人だったから、とても大切な気持ちで……もつとちゃんと言うはずだったんです。まっすぐに先輩の目を見て言うはずだったんですよ。それなのに、先輩は私のことどう思ってたと思います？ 羽鳥のことは妹みたいに思ってる って、完全に恋愛対象外としてしか見られてなかったんですよ。どうしようもない失恋なんです……」

泣き笑いを浮かべて、へへつと変な笑いをする。

ラザニアから視線を上げると、丸椅子に深く腰掛け姿勢よく座っている辰巳さんが無表情で私を見ていて、だけれども瞳が優しく私を見つめているから、胸に溜まっていたドロドロしていたものがすうーっとどこかへと消えていく。

もし辰巳さんの顔が痛ましげな表情だったら、同情されているように辛かったけど、気持ちがとても楽になった。

三杯目になるチューハイのグラスを空にした私に、辰巳さんがくすりと笑う。

「そんなに飲みたい気分だったのなら、居酒屋にすれば良かったですね。酒に付き合うくらいなら出来ますよ」

「そうですね……」

大酒飲みと思われたことに苦笑して、あいまいに答える。

「辰巳さんはお酒好きなんですか？」

私に付き合う様にビールを注文してたから、お酒を飲む方なのかどうか判断できなくて聞いたんだけど、一つ質問するとほとんど疑問が湧いてくる。

「つというか、辰巳さんはいくつなんですか？　ビール飲んですから、もちろん二十歳は過ぎてますよね？」

一つか二つくらい年上だろうと思っていただけを確認のため聞いてみる。

辰巳さんは数回目を瞬き、口元に微苦笑を浮かべて首を傾げる。

「二十歳ですよ」

「同じ年なんですか!？」

驚いた声を上げると、目を見張ってなにか諦めた様な寂しげなため息をつく。

「そうですよ、年上だと思っていましたか？」

「二十一か二十二くらいかと思っていました。じゃあ辰巳さんも大学生ですか？」

質問責めにする私に少し困った顔をしながらも、辰巳さんは真摯に答えてくれる。

「大学には行っていません。高校卒業と同時にブルーベルに就職しました」

「えっ、そうなんですか？」

高校を卒業したら大学に行くのが当たり前だと思っていて、高校の友達も大学生が浪人生のどちらかが多いから、同じ年ですでに働いていることに驚きを隠せなかった。

辰巳さんは目元に優しい笑みを浮かべて頷く。

「俺の夢はカフェで働く事なんです。だから少しでも多く実務経験を積みたくて大学には行かなかったんです」

大学に行くのが当たり前だと思っていたのが恥ずかしくて、たと夢だと言った辰巳さんの口調は甘美な響きだけれども現実を見据えて着々と夢に近づいているのが伝わってきた。

目標に向かって着実に歩いている辰巳さんが、すごく誇らしげで眩しく感じた。

私なんて、理科が得意だからって理由で薬剤師を目指して、大学

に入ることが当たり前だと思っただけで高校卒業と同時に就職するという考えは全くなかった。

同じ年なのに、なんだか辰巳さんがすごく立派にみえて、へこんでしまう。

失恋の辛い気持ちはどっかに消えたと思ったのに、違うもやもやが浮かんで気分がへこんでしまう。

黙り込んだ私に、辰巳さんは空になった四杯目のグラスを指す。

「追加、頼みますか？」

思わず頷いてしまつて、くすりと小さな忍び笑いが聞こえて顔を上げる。辰巳さんが星空の瞳を和ませて私を見つめる。

「どんな形で夢を追うかは人それぞれです。俺はたまたま高校卒業してすぐだったけれど、羽鳥さんだってちゃんと目標の為に大学に通っているのでしょうか？」

私の些細な気持ちの変化に気づいて辰巳さんが言うから、胸がぎゅーっと締め付けられる。

「恋だつて　そうですよ。羽鳥さんはちゃんと自分の気持ちを伝えられました。先輩だつて、羽鳥さんの気持ちを聞いて嬉しかったはずですよ」

告白現場にいたわけでもないのに自信満々にそんなことを言うから、自分の瞳が泣きそうに揺れる。

「どうしようもなくなんかありませんよ。よく、頑張りましたね」

一つ一つの言葉に慈しみが込められて、ぼろっと瞳の端から雫が

流れ落ちた。

もう涙なんて枯れるほど泣いたと思っていたのに……

私の想いは無駄なんかじゃなかった　　で、誰かに言っただけじゃなかった。

今一番欲しい言葉を、辰巳さんがくれた。

肩を震わせて泣く私の頭を、辰巳さんが温かくて大きな手で静かに撫でていく。最後の一滴が流れ落ちるまで、ただ優しく頭をなで続けてくれた。

第9話 レシユノルティア れいの場合

合宿の最終日。失恋して落ち込んでいる私に気づいて連れ出してくれたのが、辰巳さんだった。

行動は強引なのにちよつとした仕草に思いやりがあつて、私を見る瞳に優しい光を帯びているから、いつもだったら緊張したり男性に対する苦手意識から話す事も出来ないのに、辰巳さんとは友達みたいに普通に話すことが出来ていた。

男性なのに男性って意識することがなくて、だから自然と話すことが出来たのかもしれない。

心にもややもやしていた気持ちを聞いてもらつて、「頑張ったね」って言ってもらつて、すごく安心して泣いてしまった私に、嫌味一つ言わずに、泣きやむまでずっと優しく頭を撫でてくれていた。

強引だし、見た目はクールでとっつきにくい感じがするのに、実は優しくて。

心を穏やかにする言葉をくれる人で。

私が心を許すには十分すぎるいい人だったから。

泣きやんだ私に、辰巳さんはどこから取り出したのかハンカチを貸してくれて、夜遅いからと家まで送ってくれた。

「遅くなつてしまって申し訳ありません」

「いえ、私こそ送ってもらっちゃつてすみません」

私のアパートの前まで送ってもらつて恐縮して頭を下げると、辰巳さんはふふつと皮肉気な笑みを浮かべる。

「いいんですよ、俺が連れまわしたんですし。それに、俺の家もこの近くなので」

「そうなんですか？」

顔を上げて聞いた私に、辰巳さんは目元を細めて。

「そうなんですよ」

今日何度目になるか分からないそのやり取りに、どちらからともなく笑みを浮かべる。

笑いが収まった頃、居住まいを正して目の前に立つ辰巳さんを見る。

「今日は本当にありがとうございました」

改めてお礼を言っていないことに気づいて、頭を下げると。

「どういたしまして」

辰巳さんは目元を和ませてふわりと微笑んだ。

「また、お店に来て下さいね」

「はい」

「お休みなさい」

「おやすみなさい」

そう言っ て街灯と月明かりに照らされた夜道を歩き出した辰巳さんの背中をしばらく見送って、アパートの二階へと続く階段を駆け上った。

この日まで、ほとんど辰巳さんのことを知らなかったのに、私の

中で辰巳さんは友達というポジションにすっかり落ち着いて信頼できる人になっていた。

三日後。大学に用事があつて、学校に行つたついでに図書館で休み中のレポートに必要な参考書を借りて、十一時少し過ぎた時間にカフェ・ブルーベルへと向かう。

学校がある期間は帰りにコーヒーを飲みに行くぐらいだけど、今みたいな夏休みで講義がない時期はランチを食べて、少し勉強したり読書したりしていくのが定番になっていた。

夏場はアルバイトで忙しくて、ランチを食べに来るのはすごく久しぶりだった。

黒塗りの縁のガラス扉を押しあけると、扉の上部に掛けられたパイプチャイムが涼やかな音色を奏でる。

「いらつしゃいませー」

八十席の店内にはオーナーの他に三人の従業員がいて、鈴の音に一斉に声上がる。

店内にはランチ目的のお客がぱらぱら入っている。

私は従業員が案内に来る前に、一人で来る時の定位置となる絵の描かれた壁側、窓際の二人掛けの席へと進む。

椅子に座つたのとほぼ同時にテーブルにお冷の入ったグラスが置かれ、顔を上げると半袖の白いYシャツに黒ズボン、腰に黒いロングエプロンを巻いた辰巳さんが立っていて、警戒心を完全に解いた顔で微笑む。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。こんにちは、羽鳥さん」

笑い返してくれた辰巳さんのトレードマークのハーフアップされた髪の毛を見て、伸ばしているのかな　なんて考える。

「ご注文はお決まりですか？」

辰巳さんがお冷を運んできたトレンチを脇に持ち、営業スマイルで尋ねてくるから、慌ててメニュー表を開かずに注文する。

「今日のランチってなんですか？」

「ペンネパスタのカルボナーラでございます」

「じゃー、それをお願いします」

テーブルの上に腕を乗せて、頭で注文を考えながら辰巳さんを見上げる。自称常連と思っているくらいだからメニューはほぼ覚えてるわけで、メニュー表を開かずに注文することが出来る。ただメニューは時々変更になるから、注文後、料理が運ばれてくるまでの間に眺めたりする。

「お飲み物は何になさいますか？」

「……っ」

聞かれて、おすすめブレンドと言おうと開いた口を止める。戸惑いがちに辰巳さんを見上げて。

「あの、以前オーナーに試作品のブレンドを頂いたんですけど、それってありますか？」

試作品の言葉に辰巳さんの片眉がぴくつと動いたのに気づいて、慌てて付け加える。

「あつ、なければいいんですっ!」

ランチセットのドリンクは基本コーヒーならどの種類からも選べるんだけど、試作品はさすがに無理かなと肩をすばめて返答を待っている、掠れた小さな声で辰巳さんが聞き返す。

「試作品って……もしかしてブルームーンのことですか……?」

「はい」

頷いた私に、一瞬、眉間に皺を深く刻んだ辰巳さんは、直後には完璧な営業スマイルで。

「オーナーに確認してきますので、しばらくお待ちください」

丁寧に頭を下げてカウンターに戻っていくから、眉間の皺は私の見間違いかと思ってしまった。

しばらくして戻ってきた辰巳さんに大丈夫と言われ、私はまたあの美味しいコーヒーが飲めることにうきうきしてて、その時辰巳さんが私をどんな顔で見ているかなんて気づきもしなかった。

料理が運ばれてくるまでの間、私はさっき図書館で借りた参考書を全部机の上に出し、ルーズリーフを出して課題に取り掛かる。初めてすぐに店内にきいた冷房で体が冷え始めたのに気づいて、カーディガンを取り出して半袖の上に羽織る。

ルーズリーフには調べることが箇条書きされていて、それを見ながら参考書を端から読んでいく。しばらくして。

「お待たせ致しました」

その声に顔を上げると、辰巳さんが立っていてふわりと薫るような綺麗な笑みを浮かべる。手にはトレンチを持っていて、私は慌ててテーブルの上に広げた参考書とルーズリーフをまとめて鞆の中に片付ける。

それと入れ違いにテーブルに置かれた仕切りの付いた磁器の白いランチプレートにはペンのカルボナーラとグリーンサラダが綺麗に盛り付けられている。

ホワイトソースと卵の匂いに混ざってフローラルな香りが漂い、コトツとソーサーに乗ったコーヒーカップが置かれる。

「あつ……ありがとうございます」

あの日、オーナーが出してくれたブルームーンブレンドを飲んだ瞬間、胸に渦巻いていた苦しい気持ちを吹き飛ばしてくれた。飲んだことのない不思議な味わいで、試作品じゃなくてちゃんとしたメニューになったらいいのと思うほど美味しかった。

そのコーヒーをもう一度飲むことが出来て、逸る気持ちにカップに手を伸ばし、香ばしさの中に混ざったフローラルな香りを肺いっぱい吸い込んでからゆっくりと口をつける。

喉の奥に広がる程良い酸味と、コクと甘さのハーモニーにうつとりと目を細める。

「お味はいかがですか？」

オーナーにも聞かれた質問に、私は同じように答える。

「美味しいです。いままで飲んだどのコーヒーよりも美味しくて、

私、好きです」

カップの中に揺らめく茶色い液体に視線を落として言う。辰巳さんの気配が和らいだ気がして仰ぎ見ると。

「じゅっくりお過ごしください」

マニュアル的なセリフと動作でカウンターに戻って行ってしまった。

またしてもこのブrendを作った人のことを聞きそびれてしまった。悔やむけれど、まあいっか、と思う。

コーヒーを置き、店内にぐるりと視線を向ける。

従業員はみんな男性で、「うちの従業員」というオーナーの言い方からしてブrendしたのがオーナーではないことは分かっている。辰巳さんでも……ないのかな。そうしたら、他の従業員だとしたら、作った人が誰か教えてもらったとしても人見知りの私が話すことは出来ない。

きつとこの中の誰かなんだな　そんな風に曖昧にするほうが、理想像が崩されなくていいように感じた。

ブルームーン　ネットで調べたら、そのまま満月のことだったり、カクテルや薔薇の名前だったり。極めて稀な事、滅多にないという意味で使われる言葉らしい。

青い薔薇の別名がブルームーンで、青い薔薇を作ることとは不可能とされていることからブルームーン＝不可能という意味が含まれる。

そのことを知って、なんだか既視感を覚える。

初めから不可能だと思っていたんだ　だけど。

人工的に青い薔薇が作られるようになって、不可能から奇跡という意味に変わったという。

不可能だった恋、ただど奇跡だった恋

私の初恋、そして失恋を慰めてくれるような味。心をとろかすような馥郁たる香りに、ブルームーンブレンドに惹かれない理由がなかった。

ランチを食べながらそんなことを考えて、ふっと視線をテーブルの脇に置かれた小型のスーツケースに移し、口元をほころばせた。

こんな穏やかに気持ちになれたのは 本当にこのコーヒーのおかげなんだ。

第10話 レシユノルティア 笑顔の理由

食べ終わったランチ皿をテーブルの端に寄せ、再び参考書とルーズリーフを取り出して勉強を始める。参考書の一つを手前に引き寄せてぱらぱら捲って、目的のページを見つけてシャーペンを握ってルーズリーフに書き映す。

半袖の上に着たカーディガンの襟元を引き寄せて、前を合わせる。夏場に冷房のきいた喫茶店で長袖のカーディガンを着こんでコーヒーを飲むっていう図はどうかと思うけれど、家や図書館で勉強するよりもカフェ（カフェ）が落ち着くから。

それになにより、コーヒーが美味しくて落ち着くここに来ずにはいらなかった。

時々、参考書をめくる手を止めてコーヒーを飲む。カップが空になったことに気づいて顔を上げると、ちょうど近くを通りかかった辰巳さんと視線が合う。

トレンチの上に乗っている下げた食器をカウンターに置くと、近づいてきた。

「食器、お下げしてもよろしいですか？」

「はい」

「夏休みの宿題ですか？」

器用に片手で持ったトレンチに食器を下げる辰巳さんに聞かれ、くすりと笑う。

夏休みの宿題 という響きが懐かしくて。

「そうですよ」

「どこか旅行にでも行かれるんですか？」

唐突な質問に首を傾げて、辰巳さんの視線の先を追ってテーブルの脇に置かれた小型のスーツケースを見ている事に気がついて苦笑する。

「いえ、旅行じゃないです」

その言葉では説明不足に感じて付け加える。

「サークルの部室に置き忘れていた合宿の荷物を取ってきたんです」
「置き忘れていた荷物……」

辰巳さんは怪訝に聞き返し、私はスーツケースを見つめてふわりと口元を綻ばす。

遡ること二日前　合宿の次の日。

お酒のせいなのか、失恋して泣いたせいなのか、体がだるくて、
だけど重いしこりが解けて軽くなった心でバイトに向かい、帰り支
度をしている時に携帯のバイブレーションが鳴る。

カフェ・ブルーベルで秀先輩の電話を無視してから約一日、ずつ
と携帯電話に触れていなかったことに気づいて慌てて携帯を開く。
着信は七海からのメールだったけど、それよりも早い時間　正
確には十三日に着信が二件とメールが一件あって、どれも秀先輩か
らだった。

秀先輩の電話を無視してしまった事に少しの罪悪感を覚え、躊躇

いながらメールを開く。着信は無視した一回目の着信の数分後、メールはそのすぐ後の時間だった。

『From：犬飼秀先輩

subject：無題

本文：電話にでないから、心配でメールした。

学校に鞆を置き忘れていたから届けようと思ったんだけど、今は俺に会いたくないよな……

鞆は部室に置いたから安心して』

メールを読んで初めて、合宿に持っていったスニーカーを食堂の前　秀先輩と話していた場所に置いたまま帰ってきてしまったことに気づく。

秀先輩から二回も着信があつたのは、鞆を忘れたことを伝えようとしてくれてたんだ。それなのに私つたらずつと電話を無視して。

秀先輩の気遣いにちくりと胸が痛む。

カーソルを動かすと、メールにはまだ続きがあつた。

『さつきはごめん……ありがとう。羽鳥が俺のことを好きでいてくれたなんて全然気づいていなくて、正直驚いたけど嬉しかった。

羽鳥の気持ちには答えられないのに、いままで通り仲の良い関係でいられたらいいと思うのは俺のわがままかな……？』

秀先輩の言葉がじわりと胸に広がっていく。

失恋してしまった

私の気持ちに秀先輩が答えてくれることはなかったけれどちゃんと気づいて、受け止めてくれた。秀先輩なりに私との関係を『仲がいい』と思ってくれてて、これからもそうでありたいと思ってくれたことが嬉しかった。

失恋してもう普通に話す事も出来ないとかと思っていたけれど、

秀先輩が今まで通りを望むのなら、それもいいか　と思う。

秀先輩が私に優しくしてくれるのが、妹みたいに可愛がってくれてたからだっていう事実は寂しい。

私の好きと、秀先輩の好意は違うもので、その気持ちが変わることはないのは切ないけれど。

たえろ思いになれなくても、いままで通りでいられるのなら、話す事も出来なくなるよりはいいと思った。

秀先輩があまりに優しいから、このままでいいと思った

失恋した夜からずっと胸にくすぶっていた重たい気持ちがすーっと爽やかな風に吹かれたようになって、清々しい気持ちになる。

辰巳さんが頑張ったねって慰めて励ましてくれたおかげもあると思う。

私は勇気を出して、携帯の着信履歴を押して電話をかける。

プルルル、プルルル……と耳に小気味良い音が響く。

しばらく鳴った後。

『もしもし……？』

耳の奥で響く大好きな声に心を震わせて、瞼を閉じる。それから瞳をあけて言う。

「秀先輩ですか？　羽鳥です」

緊張して声が震えるけれど、ギクシャクした言い方にならないように心がけて、精一杯明るい声を出す。

「電話出れなくてすみません。鞆ありがとうございました、明日、取りに行きます」

『……っ』

少しの沈黙の後、ふわっと温かな笑い声が聞こえて、胸に熱い物が込み上げてくる。

『メールちゃんと読んだんだな……安心したよ』

安心した　その言葉が私自身を言っているように感じて、秀先輩の優しさに胸が詰まって泣きそうになる。

こんなに好きな気持ち　そう簡単になくせない、と思った。秀先輩のことがどうしようもなく好きで、ずっとずっと、側で笑顔を見ていたいと思ってしまう。

気持ちを伝えるだけで精一杯だったはずなのに。失恋したのに。欲深い自分に苦笑する。

「はい、ご迷惑かけてすみません」
『いいんだよ。それより……』

そこで一度言葉を切った秀先輩が、少し掠れた声で尋ねてくる。

『今度、一緒に出かけないか？』

そんな誘いを受けたのは初めてでばつと顔を輝かせ、それから秀先輩が私のことを妹みたいと思っていることを思い出して、ぬかよるこびにならないように自分で自分に釘をさす。

後輩としてのお誘いなんだ、変に喜んじゃいけない

「はい、大丈夫ですよ。どこか行きたい場所があるんですか？」

嬉しい気持ちを隠して、平静を装う。

『うん……そうだね、詳しい事はメールするよ』

「わかりました。じゃあ、失礼します」

『ああ。またね、羽鳥』

名前を呼ばただけで体の芯が震えてしまう。

電話を切って机に寄りかかり、はぁー大きなため息をつく。

座っていたのに緊張でいつの間にか立ち上がって電話していて、額に滲んだ汗を手の甲で拭う。手のひらに握りしめた携帯を見つめて、思わず笑みがこぼれる。

普通に話せた　ただそれだけが嬉しくて、秀先輩の変わらない優しさが温かくて、出かけようと誘われたことが心を弾ませる。

「実はこの前お店に来た日は合宿の帰りだったんです。ちょっといろいろあって……」

そこで辰巳さんに視線を向けて、きまり悪い笑みを浮かべる。

「慌てて学校を出てきたので鞆を忘れちゃったんです。で、先輩が部室に置いてくれたのを今日取りに行つて来たんです」

いろいろイコール失恋だと気付いた辰巳さんが片眉を上げて心配そうに私を見つめるから。

「はは……、心配しないでください」

両手の指を伸ばしてから汲んで、顎にあてる。その動作をゆっく

りとやって、口元を和ませる。

「まだ気持ちの整理がついたわけじゃないんです。好きな気持ちは変わらず私の中にあって。でも、辰巳さんに話を聞いてもらって、すっきりしました」

汲んだ手に視線を落としていた私は、ぱっと顔を上げて笑いかける。

「落ち込んでなんていられないって思えたのは、辰巳さんのおかげです。ありがとうございます」

視線の先で、星空の瞳が大きく見開かれて和んだのを見る。

「俺は話を聞いただけですよ……」

謙遜する辰巳さんに、私は首を振る。

「話を聞いてもらっただけで嬉しかったです。だって辰巳さんは、私の男友達第一号なんです」

胸を張って誇らしげに言って、私はその時の辰巳さんの一瞬の表情の変化に気づいていなかった。

「友達第一号……」

ぼそつと返された言葉に、えへへと笑う。

「こんな風に話せる男の人っていなかったんですね。嬉しいなあ、辰巳さんと知り合えて、あっ……同い年なのに辰巳“さん”っ

て呼び方は変かな。辰巳君か、奏君……とか？」

一人でぶちぶち言って顔を上げると、辰巳さんがきょとした顔を私を見ているから、小首をかしげる。

「ダメ……ですか？ 名前で呼ぶなんてずうずうしいですか？」

尋ねると、数回目を瞬いてから辰巳さんが妖艶な笑みでにやりと笑う。

「構わないですよ、奏で。それよりも、同い年なんですから敬語じゃなくていいですよ？」

そう言いながらくすりと笑った辰巳さんは、自分も敬語で話している事に気づいていないのだろうか……なんて疑問に思いながらも、うーんと顎に人差し指を当てて考える。

「じゃ、奏。私のことも下の名前で呼んでいいからね」「わかりました」

そう言っただけとも言えない複雑な表情で笑った奏を、ずっと忘れられなかった。

第11話 レシユノルティア 招待状

私の男友達第一号の辰巳さん じゃなくて奏とは、喫茶店で会
うと話だけの関係。

男友達なんて大げさで、男とか女とか関係なくてようは友人なん
だよ。人見知りする私は女友達も両手で数えられるくらいだし、
その中で親しいのも数人で、奏は親しい友人の分類にはいる。

喫茶店に行くと必ず話しかけてきてくれて なぜか他の人と一
緒の時は話しかけてこなくて、一人の時だけなんだけど 暇を見
つけては話し相手になってくれる。

「喋ってて大丈夫？」

そう聞くと必ず、振り返ってカウンターにいるマスターを見て肩
をすくめる。

「大丈夫ですよ。でも……そんなに気になるのなら、早番の日にお
茶して頂けますか？」

薫るような笑顔でお茶に誘われて、私はくすりと笑う。

「コーヒー飲みに来ているのに、またお茶するの？」

笑って言うと、奏は首を傾げてそうですね……と口の中で呟き。

「では、また夕飯と一緒に食べに行きましょう。今度は居酒屋なん
てどうですか？」

完全に大酒飲みと誤解されていることに苦笑して、眉尻を下げる。私には同じ年だからと言って下の名前で呼び捨てにさせて敬語もやめさせたのに、奏は相変わらず敬語で話しかけてくる。だけどその話し方は、わざと敬語にしていると云うよりは元からそういう喋り方なのか、職業柄沁みついてしまった喋り方に思えて、嫌な気はしなかった。

そのくせ

「れい？ 聞いていますか？」

名前はすっかり下の名前で読んでくるから、照れくさくて困ってしまう。

「あつ……うん、聞いているよ。えっと、奏はいつ早番なの？ 私は夕方空いてるのはね……」

言いながら、誤魔化すように鞆から手帳を取り出して八月のページを開いて絶句する。

「あー……」

苦笑した私の頭の上から、奏がテーブルの上に広げた手帳を遠慮がちに覗きこんで来る。

今日は八月二十三日で、残りの八月はびっしり予定が埋められている。まず明日から五日間は連続でバイト、二十九日はサークルの日でサークルが終わってから実家に帰ってこっちに帰って来るのは三十一日の予定。

「予定つまってますね」

手帳から視線を上げた奏に言われ、頷く。

夏場はとにかくバイト三昧で忙しい。週一回サークルもあるし、課題も少ない訳じゃないから、バイトから帰ってくれば夜は勉強しなくてはならない。逆に言えば、自分次第でいくらでも時間は作れると言っことで……

「今日はバイト休みだから大丈夫だけど、奏は今日は早番じゃないよね？」

基本、奏は一日通して仕事で、早番は週に一回あるかないかだった。

「ええ、今日は違うので終わるのは二十一時すぎだと思います」

渋い顔で言う奏に、今日を逃したらしばらく予定が合わないことを察する。

「いいよ、二十一時すぎでも。その頃、また来るよ」

私は言いながら腕時計にちらつと視線を向け、空になったコーヒークップをソーサーに置く。

「そんな遅い時間に悪いですよ……」

「大丈夫だよ」

「そうですか……？」

へらつと笑った私を、奏は怪訝そうに眉根を寄せて、はぁーっとため息をつく。

「じゃあ、オーナーには伝えておきますから少し早めに来て店内で待って下さい。外で待たれるのは心配で落ち着きませんから」

奏の心配症に、そんな心配しなくても子供じゃないんだから大丈夫なのだと思う。

「うん……」

上目使いで奏を見ていると、奏の瞳がきらつと鋭く光る。

「あつ、うん、わかった。そうするから」

慌てて同意する私を見て、奏は瞳から威圧感を消して尋ねる。

「ところで、れいは何のバイトをしているんですか？」

「ごめんっ!」

奏の声に被さって、私は叫ぶ。腕時計を見ながら慌てて反対側の椅子に置いていた鞆に手を伸ばして立ち上がる。

「もう、ちょっと行かないと……これから用事がるから、また後でね」

私は慌てて会計を済ませてお店を飛び出した。

今日は課題と一緒にやるために七海や学科の友達と学校で会う約

束をしていて、学校に行く前にコーヒーだけ飲みにお店に寄ったのだった。

みんなとの待ち合わせは十三時なんだけど、その前に七海と学食でランチを食べる約束をしている。

待ち合わせの十二時まであと十分しかなくて、私は早足で学校に向かう。

八月のお盆を過ぎてから少しずつ涼しくなると思ったら、残暑が厳しく日中も夜も、汗ばむ暑さだった。

照りつける太陽から顔を隠すように額に腕を当てて校門をくぐり、まっすぐ伸びる並木を抜けて学食に入る。

すでに七海は来てて、全面ガラス張りの窓側の席に座っている。私に気づいて手を振る。

「れい！　ここ、ここ」

「ごめん、遅くなって」

「ちようどでしょ。お昼買いに行こうか」

七海は学食の壁掛け時計を見てにくすりと笑う。席から立ち、食堂入り口にあるショーケースと券売機の方へ向かう。

夏休み中は本当は食堂も休みなんだけど、この時期は補講があって食堂も空いている。

私は椅子の上に鞆を置いて財布だけ取りだすと、七海と一緒に券売機に向かう。

「課題終わりそう？」

日替わりランチや定番のAランチ、Bランチが並んでいるショーケースに視線を向けながら七海に聞かれ、私は肩をすくめる。

「やってはいるけど、バイトが忙しくてなかなか……」

「例の夏場限定のバイト　まだ続けてるの？」
「うん」

額いて券売機にお金を入れてボタンを押す私の横で、七海は呆れ半分、感心半分でため息をつく。

「よく続くね、それにぜんぜん焼けてないのが私には不思議でしようがないよ……」

券売機から出てきたお釣りを取るためにしゃがんだ七海に視線を向けて肩をすくめる。七海も同じようにし、二人で受取カウンターへと向かう。

「それよりさ……」

食券をカウンターに出した七海がちらりと私を見て遠慮がちに言う。

「先輩とどうなったの？」

私だけに聞こえるような小さな声で七海が言う。

学食には私たち以外にもちらほらと人がある。話が聞かれる程側にいる人はいないけど、七海は気を使って、秀先輩　じゃなくて先輩と言った。

私も七海も、食堂のおばちゃんが出してくれた日替わりランチのトレーを受け取って、席の方に視線を向けて歩きながら小声で話す。

「う……ん……」

躊躇いがちに言葉を切った私に、七海はちらっと視線を向けてか

ら、静かに席に座る。

七海には合宿の次の日にメールで秀先輩とどうなったのか聞かれただけ、会った時に話すと返信をしていた。

合宿中に告白するという私の決意を知っているし応援してくれて、バスを降りた私と秀先輩と一緒に歩いて行くところを見ていた七海は、とても気になっているみたいだった。

失恋した　なんて言いにくいけど、ちゃんと言わなきゃいけないよね。

「実はね……」

ランチに視線を落したまま、あの日秀先輩と話したことをすべて伝え、ゆっくりと視線を上げて向かいに座る七海を見る。

「……ということで、失恋しちゃいました」

眉尻を下げて笑うと、七海が眉根を寄せて私をじいーつと見据える。

「そっか、上手くいくと思ってたんだけどな。でも……その割には元気ね、れい」

心配そうに私を見る七海に、苦笑する。

コロッケを食べて箸を置き、手を組んで窓の外に広がる青空を見る。

「うーん、直後はね、すごくショックだったし悲しかったけど、いろいろあって気持ちの整理がついたの」

「ふーん……すっきりした顔してるものね」

七海が澄んだ瞳で私を見つめ、くすりと笑う。

「告白も、無駄じゃなかったみたいね」

その言葉に、えっと七海に視線を向ける。

「れいさ、合宿の前に言ってたでしょ。気持ちを伝えるだけでも私には大進歩だって、この恋で成長出来たらいいって」

頬杖について喋る七海が、口元を綻ばせる。称賛するように目を細めるから、なんだか心がくすぐったくなる。
「ただ」

「そうだね……」

私は微笑み、七海を見る。

初めての恋　秋になったら秀先輩は引退してしまい、そうしたら接点はなくなり会うこともなくなってしまふ。それが嫌で告白を決意して。

結果は振られちゃったけど、気持ちを伝えることが出来ただけでも私にはすごいことなんだ。

望んでいた答えは貰えなかったけれど、秀先輩がただの後輩よりももっと親しく私のことを思ってくれていたことが分かったただでも　無駄なんかじゃなかった。

一瞬で私の心のしこりを解きほぐく言葉を言ってしまう七海のことを、正面からまっすぐに見る。なんて良い友達をもったんだろう。私はおもわずにこにこしてしまい、怪訝に私を見る七海の視線に気づいて、ランチを食べて誤魔化した。

私がランチを食べ始めたのを見て、七海も箸を持って味噌汁を飲み。

「で、どうするの？」

お椀を置いた七海に聞かれ、私はきょとんと首をかしげる。

「どうするって……？」

「秀先輩のことだよっ！」

びしっとお箸で指されて、たじろぐ。

「先輩のこと……？」

いまいち何を言われているのか理解していない私に気づいて、七海が大きなため息について話します。

「振られて、気持ちの整理がついたって言ってたけど、諦めるの？
ってか諦められるの？ もっと積極的に行ったら、これから好き
になってももらえるかもよ？」

あらためて聞かれて、私は少し考えてから自分の気持ちを正直に話
す。

「秀先輩のことは……まだ好きだよ。振られても気持ちは変わらな
い……」

「なら　っ」

ぱっと顔を輝かせて七海が急かすように言うから、私は首を横に
振る。

「でも、両思いになって付き合いたいとか、そういうのはないの。」

先輩は私のこと妹みたいな存在って言うてくれて、引退しても時々会えるなら、それでいいの」

「それって辛くない……？」

七海に聞かれ、私は考えて肩をすくめる。

「分かんない、辛いかもね。でも、秀先輩を好きな気持ちはそんな簡単に消えないと思うから、今はこの状況で満足だよ」

「れいの言うことも分かるけどさあー、見込みがない恋は諦めたら？　そう言う時は新しい出会いとかがあれば吹っ切れるんじゃない？」

七海がそう言うのは私のことを心配してくれてだって分かるけど、私は恋とかそんなに興味がないっていうか、いまはこの気持ちを抱えるだけで手一杯だからなあ。

私は苦笑して。

「そうかなあ……」

って、曖昧に相づちを打った。

昼食後、図書館に行き桃花ちゃんなどの学科の友達四人と合流して課題をやる。お喋りしたり参考本を探したりして、あっという間に閉館の十七時になってしまった。

みんなで駅に向かって歩きながら、七海が私の予定を聞いてくる。

「れい、来週の水曜日って予定空いてる？」

「来週って三十一日？　……なら空いてるかな？」

「予定でもあるの？」

曖昧に答えた私に、七海が片眉を上げて聞く。

「ううん、二十九日から三十一日まで実家に帰る予定なんだ」

「三十一日には戻って来るんでしょ？　ならちようどいいわ。夜、予定明けといてよ」

「ん？　うん、いいよ」

ちようどいい　って言葉になにか引つ掛かるけど、私は頷いて三十一日は早めにこっちに帰ってくることを決めた。

第12話 レシユノルティア コーヒープリンス

駅でみんなと分かれた後、側の本屋に少し寄ってからアパートに戻り、二十時四十五分くらいにカフェ・ブルーベルに向かう。

最初は夕飯の約束だったけど、遅い時間になったし、二十一時まで仕事をしている奏は当然夕方くらいに休憩が入っていてその時にすでに夕飯を食べているだろうと思う。だけど、食べないでいてくれるかも……と思うと夕飯を食べていいのか迷って、結局食べなかった。

お店の中に入ると、閉店間際なのにお客さんがまだ残っていた。奏を探して店内をぐるっと見回すけど見当たらず、どうしようかと立ちつくしていると、側にいた短い髪をつんつんと立てた店員さんが近づいてくる。

「申し訳ありません、お客様。まもなく閉店でラストオーダーは終了してしまっただんですよ」

奏と同じくらい背の高い店員さんを見上げて、緊張で背中がピシピシする。お客として来たのなら、別に緊張なんてしないで注文できるのに、今はお客として来た訳じゃないから人見知りで緊張して上手く話せなかった。

「あの……えっと、かなつ……辰巳さんの……」

男の人と話す時はだいたい七海が間に入ってくれるから、こんな風に男性と話すのはすごい久しぶりで、余計意識して目を見れなくなる。

自分でも何が言いたいのかわからなくなつて、かあーつと顔を赤くして俯くと、店員さんが「ああ……」と言う。

「奏にお客が来るって言つてたの、君のことかな？」

顔を指さして聞かれ、慌てて頷く。

「君、れいちゃん？」

店員さんは顎に手を当てて言う。私がもう一度頷くと、彼は私の頭からつま先まで見て「ふん」って言っていたすら少年のような顔でにやつと笑う。

そんな風にじろじろ見られたら居心地が悪くて、視線を落とす。

「奏は今お得意さんの接待でちよつと出てるよ。奥で待たせるように言われてるから、こつち。おいで」

お得意様の接待　？　喫茶店の従業員でそんなのがあるの？
疑問に思いながらも、手招きされて私は慌てて店員さんの後を追つた。

案内されたのは、従業員用の控室で、壁側に縦長のロッカー、中央に簡素な作業テーブルが置かれている。

テーブルの横に置かれたパイプ椅子の一つに座ってしばらくすると、廊下からがやがやと話声が聞こえて、開かれた扉にぱつと顔を上げると男性が二人入ってきて、一気に体がこわばる。

入ってきた男性も、中に私がいるとは思わなかったみたいで目を見開き、片眉を上げてとんと扉にもたれかかる。

「君、だれ？」

二十代後半くらいの男性に聞かれて、私は慌てて立ち上がる。

「あの……っ」

その時、さつき案内してくれた店員さんがロッカールームに入ってきて、緊張した空気を破るように手を振って私と男性の間に入ってくる。

「あー卯月さん、この子は奏のお客さんだよ。ちょっかい出すととばっちりが俺に来るからやめて下さいよ」

からかうような口調で卯月さんと呼んだ男性に言う。

「へー、奏の客ね……」

そう言って卯月さんも私を品定めするように上から下まで眺めて、くすつと笑うの。

わー、なんだかすごく居心地悪い……

体を縮めて、すっとんと椅子に座る。すると、もう一人 卯月さんの後ろにいた高校生くらいの男の子がロッカーに向かいながら言う。

「奏さんのお客さん？ 珍しいね、奏さんに女性のお客さんなんてでもさ……」

そう言っ、天使のような可愛らしい笑顔でにこりと笑って。

「俺達、これから着替えるんだけど」

言いながらロングエプロンの腰ひもをしようと解いて近くの椅子にかけ、こつちを振り返ってシャツのボタンに手をかける。

「そこにいて着替えを見るつもり？」

その言葉にはっと立ち上がる　　っ

ここは従業員のロッカールームで、この三人が従業員で仕事が終わって着替えに来たことに気づいて、私は慌てて鞆を胸の前に抱きしめて部屋を飛び出した。

閉まる扉の中から、くすくすという笑い声が聞こえる。からかわれたんだって気づいたけど、その時には顔から火が出そうなほど真っ赤になっていた。

はぁーっと大きなため息をついて、客席の方で待っていようと歩き出した時、声をかけられてぱっと顔を上げる。

「れい？　客席にいないと思ったら、こんなところでどうしたんですか？」

見上げると、そこには奏とオーナーがいた。

「えっと、ロッカールームで待ってるように言われたんですけど、従業員の方が着替えるみたいなので……」

尻すばみに声を小さくして言うと、奏とオーナーが顔を見合わせ、眉間に皺を寄せる。

「あいつ……」

顎に手を当てて奏が低い声で唸る。

どうしたのだろうと見上げるとオーナーと視線があつて、オーナーが苦笑いして肩をすくめる。

「奏は君が来たら従業員ロッカーじゃなくて客席で待たせるように言っていたんだよ」

その言い方が、手違いじゃなくてわざと私をロッカーに行かせたと聞こえて、目を見張る。

入り口で声をかけてきて従業員ロッカーに案内してくれた男性を思い出す。

あの人

卯月さんって従業員の人から庇ってくれたから良い人だと思ってたけど、ロッカーに案内したこと自体がわざとだったの!?

私にちよっかい出すとばつちりが自分に来るとか言ってたのに、私がロッカールームにいれば他の従業員に絡まれるって分かってて私を連れていったの……!?

ひくりと頬を引きつらせて、後ろの従業員ロッカーをちらりと振り返る。

扉越しに、三人の男性の声が聞こえてきてぎゅつと眉根を寄せる。七海いわく　ここの従業員はみんなイケメンだって言うけれど、なんだか性格が意地悪な人が多い気がして、ますます男性が苦手になりそうだった。

第12話 レシュノルティア コーヒープリンス（後書き）

人物紹介
うつき はじめ
卯月 元

カフェ・ブルーベルのイケメン従業員、二十七歳

第13話 レシユノルティア 奏の場合

照明が半分落とされた客席に座って待っていると、しばらくして私服に着替えた奏が小走りで掛けてくる。

今日の奏はブルーデニムのジーンズに、白黒ボーダーのTシャツの上に五分丈のグレーのカーディガンを羽織っている。

「お待たせしました」

言いながら、頭越しに扉を押しあけて押さえてくれている奏を仰ぎみると、眉尻を下げてちよつと困ったような顔をしている。

奏が半歩先を歩きながら夜道を進む。

「すみませんでした、俺がいない間に隼人が 従業員がご迷惑をかけたみたいで」

隼人と呼んだのは、あの短髪の人かしら。きつとロッカールームで話したわよね、どんな風に説明したのかな と不安に思う。

「えつと……大丈夫だよ」

きこちなく言った私をちらつと振り返り、奏が大きなため息をつく。

「うちの従業員はみんな男ですからね、男性が苦手だと言っていたれいはロッカールームなんていられないだろと思ったから客席で待たすように言っただけですけど……すみません、俺がもつとちゃんと

しておけば不愉快な思いをさせないですんだのに……」

首を触りながら心苦しそうに言う奏の気遣いに胸がほかほかとする。

男性が苦手って言ったのなんて話の流れで一回言っただけなのに、ちゃんと覚えていてくれたことが嬉しい。

奏はいつも敬語でしゃんとしていてあまり口数が多くなくてクールな感じだけど、さりげない優しさがいつも心に沁みる。

しばらくバス通りを歩いて、そういえばどこに向かっているのか聞いていなかったことに気づくけど、奏が黙って歩いているからなんとなく聞けなくてただついて行く。

歩いている道はいつもアパートから学校まで行く道で、このままもう少し行った所を右に曲がれば私のアパートだと考えていた時、バス通りから横の道に曲がる。突き当たり丁字路の手前のアパートに入っていく奏は、一階の一番奥の扉の前で立ち止まりズボンの中から鍵を取り出して開ける。

私は奏から三步離れたところで立ち止まる。

「どうぞ」

扉を押さえて振り返った奏はそれだけで絵になるほど美しくて、薫るような笑みを浮かべている。

だけどそれよりも 奏のアパートに連れて来られたことに気づいて慌てる。

そういえば、家に送ってもらった時に近所って言ってたな と思ひ出す。

でも、なんで家なのかな……夕飯食べに行くんじゃないのかな？
ていうか、男の人の部屋にこんな時間にお邪魔するなんてどうな
んだろう……

頭の中をいろんな思考が渦巻きその場で躊躇していると、奏が困

ったようにくすりと笑う。

「そんなに警戒しないで下さい」

そう言った奏がなんだか悲しそうな顔で首をかしげているから、私はぐっとお腹に力を込めて一步踏み出す。

「お邪魔します……」

言いながら玄関に入り、その瞬間、ふわりと爽やかなフローラルな香りが漂ってきて靴棚の上に視線を向けると、刈り取られたラベンダーの花が束ねられ逆さに吊るしてあるのが視界に入りこむ。

「ラベンダー……」

大好きな花 のドライフラワー作りかけ？ に見とれて靴

を脱がずにいると、扉を閉めようと中に入ってきた奏が気づいて、

「あっ……」と言う。

「ラベンダー好きなの？」

私が振り返って聞くと、奏は少し困ったように肩をすくめる。

「俺が……というよりは知人が好きでその影響ですかね……」

歯切れ悪く言う奏に気づかず、ほくほくと笑みをこぼす。

「私もラベンダー好きよ。爽やかな香りはなんとも言えないし、風にそよぐ姿が清楚で大好きなの。うちにも鉢があって、いまは遅咲きのプロバンスがまだ咲いているんだ」

吊るされたラベンダーの穂先に指先で触れ、ふふつと笑う。

「これはオカムラサキかな……イングリッシュ系は色が濃くて香りがとくに良いわよね。ラベンダーと言ったら代表的なのがこれだけど、私はラバンディン系も好きよ。春先のシルバーに輝く葉色もなんとも言えなく素敵よ」

べらべらと喋ってしまったことに気づいて、口元に手を当てる。

「……好きなんですね」

なんだか切ない瞳で言われ、ドキンっとしてしまう。

「さあ、いつまでも玄関ではなくて、遠慮なく上がってください」

奏に促され、改めてお邪魔しますと言って靴を脱いで部屋に上がり、出されたスリッパを貸してもらう。

部屋はワンLDK。玄関からさらに扉を進むと、左手にI型キッチン、十畳のリビングダイニングには二人掛けのダイニングテーブルとお洒落なソファールとラグマット。壁側の本棚には本と瓶に詰められたコーヒー豆がディスプレイの様に綺麗に飾られている。

リビングダイニングには三枚引き違い扉があつて、奥に一部屋あることが分かる。

キッチンカウンターには、見た事もないコーヒーマシンの様なものが置かれている。

本棚の本はコーヒーや料理の本ばかりだし、豆といいマシンといい、家でもそうとう勉強している事が分かって感心してしまう。

室内は綺麗に片づけられていて、私のイメージする男性の部屋とはだいぶ印象が違って驚いてしまう。

というか、男性の部屋に来たこと自体が初めてだったと気づいて、僅かに頬が紅潮する。

「その辺に適当に座って下さい」

そう言つて奏は奥の部屋に鞆を置きに行つてしまった。

私は鞆を床に置き、ソファーに座る。改めて部屋をぐるりと見回して、茶色を基調にした室内の中に、違和感のある物に目を止める。それは本棚の横、壁に掛けられたハンガーに結わかれた紫色の女物のハンカチ。

あつ……

と思つた時、奥の部屋から出てきた奏が血相を変えてハンガーを背中に隠す。

「見ましたか ……？」

あまりに真剣な顔で聞かれて、私はくすりと肩を震わせて笑う。

「うん、見ちゃった」

肩をすくめて謝ると、奏の瞳が揺れて切なさを帯びるから、その表情で察する。

あのハンカチ、何なんだろうって思つたけど、こんなに必死で隠したがるなんて好きな子のなんだろうなってしまう。

きっと奏はその子のことが好きで、すごく好きで、だからいつも目の届くところに結わいているのだろう。

そういえば と、玄関での会話を思い出す。

ラベンダーが好きな知人がいるって言つてたけど、きっとその人が奏の好きな人なんだ。ラベンダー色のハンカチなんて、まさにぴったりでしょ。

それに、私が失恋した時に慰めてくれたのも奏が恋をしているからで

いつもだったら人の恋バナとかぜんぜん興味がないのに、なぜだか奏のことには興味が惹かれて、うきうきと瞳を輝かせて聞いてしまっ

「ねえ、あれって奏の好きな人の？」

奏が大きく目を見開き、その空色の瞳が切なげに揺れる。

「……そう、ですよ」

睫毛を伏せて言った奏がなんだか艶っぽくて見入ってしまう。

「そっかー、やっぱり奏には好きな人がいるんだね。失恋した私が言うのもなんだけど、奏の恋が実ってくれると嬉しいな」

心からそう思っというと、奏は複雑そうな表情で笑ってカウンタ―に向かう。

「コーヒー飲みますか？」

「えっと、今はいらない、かな……」

言っただのと同時に、ぐぐぐぐと腹の虫が盛大な悲鳴を上げる。

「きゃっ……」

慌ててお腹を押さえるけれど、押さえたくらいでは音は鳴りやまない。

ぐうぐう、きゅるきゅるきゅる……

お腹を押さえたまま、涙目で顔を上げると、ぽかんとした顔で奏が私を見ていて、次の瞬間、ぷっと吹き出した。

「あつ、すみません。あまりに軽快な音だったので……もしかして、夕食食べていないんですか？」

その質問に片眉を上げる。

「もしかして奏は食べた……？ 初めに夕飯食べようって話だったから食べていいのかどうか迷ってるうちに食べそこなっちゃったのよ……」

ふてくされて言うと、奏が近寄ってきて。

「ごめん……俺があいまいに約束したからですね。実は俺も夕飯食いつぶれてまだなんですよ」

申し訳なさそうに言った奏と目があって、しばらくの沈黙を挟んで。

「じゃあ、これからでも居酒屋に行く？」

「居酒屋に行きますか？」

私と奏の声が被さって、二人顔を見合わせて笑いだす。

いつもは二歩以上の距離を保っているのに、奏が私との距離を一歩、一歩と詰めてくるから、ぴくりと肩を揺らす。

そつと伸ばされた手に手を握られて、ドキンッと大きく胸が跳ねる。

いくら奏が友人で緊張しないといっても、突然のスキンシップには免疫がなくてドギマギしてしまう。

「れいはもう夕飯をすませていると思っていたので、家でコーヒーでも飲みながら話をしようと思ったんですけど……お店を出る前に確認しておけばよかったですね」

すまなそうに言い、奏は握った手を胸の高さに持ち上げてきゅっと力を込める。

「遅くなってしまいましたが、夕飯、一緒に食べに行って頂けますか？」

改まった言い方に微笑をこぼし、私は頷いた。

第13話 レシユノルティア 奏の場合（後書き）

人物紹介

まわたり
馬渡 はやと 隼人

カフェ・ブルーベルのイケメン従業員、バイト二十歳、大学二年生

第14話 恋色ダイス 風味絶佳

「じゃあ、また来るからね。体に気をつけてね」

振り返って言うと、玄関から出てきたお母さんが苦笑する。

「はいはい。いちいち帰ってなくてもお母さん達は大丈夫だから、交通費が無駄じゃない……」

「無駄じゃないよ、お母さんとお姉ちゃんに会いたかったし。また来るからね」

笑い返して言うと、お母さんは呆れた様なため息をつく。

「はいはい。こっちのことは心配なくていいから、れいもちゃんにご飯食べてしっかり勉強するのよ」

「うん。お姉ちゃんによろしくね」

「はいはい」

適当に相づちをうつお母さんに手を振って、駅に向かって歩き出す。

二日前、バイト後に実家のある群馬県桐生に正月ぶりに戻ってきて、昨日はお盆過ぎちゃったけどお父さんのお墓参りして、お母さんとお姉ちゃんと久しぶりに外食して買い物した。

うちは お父さんは私が小学校の時に亡くなって、高校三年生だった七つ年上の姉は大学進学を一時は諦めたんだけど薬剤師になりたいって奨学金で大学に進学、今は薬剤師として小児科に勤めている。

もともとパートをしていたお母さんは上手く家計をやりくりして、県内に住む父方の実家から援助も受けつつ、私達姉妹を育ててくれた。

裕福ではなくて金銭的に切りつめて生活してきたけれど、のほほんとしたお母さんとおっとりしたお姉ちゃんを見て育ったから、お金に困っているという実感はいまいなかった。

だから、ぼんやりとだけど姉みたいな薬剤師になりたいと思っていた。

高校生になった頃は、さすがに家計の事情も理解できる年頃になって、バイトを始める。大学は行かずに就職してもいいかなと思っただけど、やりたいことがあるならちゃんと大学に行きなさいってお母さんに言われて、大学進学を決めそれからは必死に勉強した。

本当は学校も実家から通うつもりだったけど、二時間半は遠いと言ってお母さんとお姉ちゃんが一人暮らし様の資金を溜めていてくれた。

だから私はしっかり勉強しなくちゃいけないくて 奨学金を返すためにも、それと同時に大学生になったのだから生活費と学費くらい自分で出そうと長期休暇はバイトに精を出している。

桐生駅に着いて腕時計と時刻表を見比べる。今は十五時四十八分で、小山行きの電車は五十三分に来る。

七海には柏駅に十九時に来るように言われてて、ここから柏までは二時間半くらいだから、少し早めに着くかなと思って電車が来るのを待つ。

電車に乗って座席に座ると、さっきまでぜんぜん眠くなんかなかったのに、急激な睡魔に襲われてうとうとし始める。

最近朝から晩までバイトで帰ってきてからは課題やって、睡眠時間が少なかったな……と気づく。次の乗り換えまで一時間あるし寝てもいいかな

そう思った次の瞬間には乗り換えの小山に着いていて慌てて電車を降りる。

半分うとうとしながら柏駅に着いたのは、十八時四十分頃だった。改札を出てすぐのところに七海がいるのを見つけて駆け寄ると、横に桃花ちゃんと舞ちゃんがいることに気づいてちょっと驚く。

「おつ、来たよ、れい」

はつらつとした声で言ったのは舞ちゃん。彼女も同じ学科の友達でいつも集まる六人グループのまとめ役的な存在さらさらの茶髪シヨートヘア、前髪をピンで止めている。普段はジーンズが多いのに、今日はオレンジのフレアスカートにミルクティー色のブラウスを合わせたフェミニンなカンジ。

「れい、早かったね。これなら時間十分あるね」

意味深ににこにこ言う七海を見れば、バックプリーツの白のミニスカートに青系統の花柄のシフォンブラウスを着ている。舞ちゃんと違って七海はいつもフェミニン系のファッションだけど、いつもより気合が入っている様な気がする……その手には大きな鞆が……嫌な予感に、ぱつと横に立つお団子ヘアがトレードマークの桃花ちゃんを見てから自分の服を見下ろして愕然とする。

いつもガーリーな桃花ちゃんですえお団子にふわふわのシュシュをして、赤系のチェック柄のジャンパースカートと白いブラウスを合わせた姿で、いつもよりお洒落をしている事が伝わってくる。

それに引き換え私は 実家帰りということで大きめの鞆と手提げ鞆を持ち、黒の細身のパンツに紺地に花柄のＴシャツのカジュアル

ルな格好。イタリアンでも食べに行くのかなってくらいお洒落している三人とは、私だけが場違いな格好をしている。

あつ……

以前にも一度だけ同じ目にあっているから、私はすぐに今の状況を理解して、回れ右して足早に改札に逃げ込もうとしたんだけど

「れい、待ったっ！」

七海は私が逃げるのを予想済みの様にぐっと掴んだ手に力を入れてにやりと嫌な笑みを浮かべる。

「さあ、お着替えに行きましょうかね？」

「やつ……、やだ……」

七海に掴まれた腕を勢いよく振り払おうとしたんだけど、必死の抵抗も空しく、反対側から七海よりも意味ありげな笑みを浮かべた舞ちゃんに腕を掴まれる。ずるずると引きずられるようにして、そここのパウダールームに引きずられて行く。

「はい、これに着替えて」

七海に袋を押し付けられて、着替え台のあるトイレの個室に押し込められる。

私は渋々鍵をかける。袋の中身を見て、はあーっと大きなため息をつく。

遡ること一年前、そういえばその時も夏休み中だった。七海に突然遊ばうって呼び出されて行ったら私以外はみんなお洒落していてその時はどうしたんだろうって首を傾げていたら、ちよっとトイレ

行こうって連れていかれて　今と同じ状況に。

着替えて、これから合コンだって言われて啞然としたっけかな……
まったく同じ手に引っ掛かった自分に苦笑する。まあ、合コンなんて行っても、人見知りアンド男性が苦手な私は人数合わせでしかないから渋々ついて行っただよな。合コンなんて行ったことなかったし、興味がないと言ったら嘘になるし。

だけどね……、合コンに行って後悔しましたよ。男の子がべたべた触ってきたり話しかけてきたりして、とてもじゃないけれど耐えられませんでした。

七海もその様子を見てて、ごめんって苦笑してたから、もう二度と合コンの誘いはないと思ってたのに

はあー。もう一度大きなため息について、今更嫌なんて言えない状況に諦めて、着替えることにした。

合コンなんて伝えていないから私がめちゃくちや普段着で来ることも想定内で、七海の普段着を用意して来てくれる訳だけど……

「ちょっと七海！？　これ、スカートの丈短すぎない！？」

着替えて、スカートの裾を押さえながら絶叫する。用意された服は黒地に赤とオレンジの花柄のワンピース。胸元から裾にかけて中央に二本の黒いレースが施され、胸下で切り替えのついた細身のシフォン生地。それでもってミニスカート……

「短くない、短くない」

個室の外から素っ気ない声が返ってきて私は、はあーと肩を下ろす。

なんだろう……、去年用意されてた服は、ここまで気合いが入った感じじゃなかったのに。だって、この服、七海が着てるのなんて数回しか見たことないよ！？

カチャリと鍵を外して外に出ると、今度は瞳を輝かせた舞ちゃんに腕を引かれてパウダールームの椅子に座らされる。

「今日も化粧してないね」

にやつと舞ちゃんに笑われ、ちよつと機嫌が悪くなる。頬を膨らませてそつばを向くと、顎をぐいつと掴まれて正面を向かされる。

「はいはい、前向いて。目、つぶって」

ささつと鞆から化粧ポーチを出した舞ちゃんに言われ目を閉じると、下地、ファンデーションを手際よく塗っていく。

「だって、化粧品買う余裕なんてないし……」

愚痴ると、舞ちゃんがふって鼻で笑う。

「まあね、れいはそのままでも可愛いからいいと思うけど、二十歳過ぎたんだから少しくらい化粧してもいいんじゃない？」

「そのうちね……」

気のない返事をする。

「はい、出来た」

舞ちゃんに言われ目を開ける。目の前の鏡の中……は全然見えなくて、化粧で変わったのかどうかいまいち実感なくて首をかしげると、背後に回って髪の毛をいじり始めた舞ちゃんが苦笑する。

「あーあ、せつかく可愛くしてあげたのに、本人は見えてないなん

てもつたいないなあ」

言いながら下半分の毛を残して、サイドの毛束を三つ編みにして後ろで束ねてシルバーの花型のクリップをつける。

「眼鏡したら？」

横で出来上がるのを待っていた七海に言われて、せっかく舞ちゃんがやってくれたからと思い、手鞆から授業で使っている茶色い縁の眼鏡を取り出す。

まとまらないからと言って肩までの天パをいつもは後ろでまとめているけれど、いまはその髪が下ろされて、栗毛の髪がくねくねとうねっている。

まるで自分じゃないみたいな格好に、照れ臭くなる。

「いいじゃん、いいじゃん！ れい、可愛い！ さすが舞ちゃん！」

私と舞ちゃんに賛辞を言ってから、ぐっと姿勢を伸ばして七海が力強く言う。

「じゃ、行きますかっ」

化粧をしている自分をちゃんと見るのは初めてで、その時の私はちよつとぼーっとしていたんだと思う。

第15話 恋色ダイス 二人の行方

着いた場所は、お洒落なイタリアンバー。

天井の高い店内は広く長テーブルが置かれたフロアの奥にはカウンター席がある。電球色の間接照明で薄暗く落ち着いた雰囲気で、「イタリアンでも食べに行くのかな」って思ったのはあながち間違いではなかったみたい。

前回の合コンはカラオケだったけど、今回はディナーなのかなと思う。

七海が店員さんに予約名を告げると、八人掛けの長テーブルへと案内してくれた。

私は一番後ろからついて行く。案内された席で七海と舞ちゃんがなにか話して、一列に並んで座るのかと思ったら、一席ずつ開けて交互に座る。

まだ男性陣は来ていないみたいで、テーブルの上にはナプキンが綺麗に八つ並んでいるだけだった。

「何時に待ち合わせなの？」

なんとなく気になって、向かい側対角線上に座る七海に聞く。

「十九時半よ、もう少しで来るんじゃない？」

腕時計で時間を確認するとまだ十九時十五分で、早く来ていることに気づく。

私と一つ席を空けて座った舞ちゃんが、前髪を直しながら七海に聞く。

「今日来るのって七海の友達って言ってたよね？　どんな人達？」
「幹事は高校の友達の未至磨^{みしま}って言って今は江戸川台大学に通ってる二年生、同じ年ね」

みしま君と聞いて、私は首をかしげる。

「他のメンバーは大学の友達って言ってたかな」

顎に人差し指を当てて話す七海に、私は尋ねる。

「ね、七海。みしま君って、あの未至磨君？」

「そうそう、高三の時同じクラスだった未至磨」

「そういえば、七海ちゃんといえちゃんとは同じ高校なのよね」

桃花ちゃんに聞かれて頷く。

未至磨君　漢字がすごく特徴的だったから覚えている。中学・高校と一緒にクラスも何度か一緒になったことがある。その未至磨君が近くの大学に通っているなんて知らなくて驚く。

「七海、未至磨君と連絡取ってたの？」

「えー、違うよ。この間たまたま会ってさ……」

たまたま会って、合コンしようって流れになるのがすごいと感心してしまう。

「あつ、来た来た」

七海の声に入り口を振り返って、数秒、目を瞬く。

「こんばんはー」

「どうもー」

「今日はよろしく願いします」

三人が立ち上がってにこやかな笑顔で男性陣に挨拶する中、私は一人、立ち上がりそびれて座ったまま呆然とする。

「かな……」

やっとのことと言った言葉が、他の人の声にかき消される。

「あれ、君、れいちゃん？」

爽やかな声に顔を上げると、つんつんと短髪を立たせた男性が私に近づいてきて、腰をかがめて顔を覗きこむ。

確か、隼人さん……

「やっぱり、そうだ。店に来た時と雰囲気が違うからあれって思ったけど、今日は眼鏡で知的な感じだね」

言われて初めて、眼鏡をかけっぱなしだったことに気づく

今日はやけに周りの景色が鮮明に見えると思ったら、パウダーリムで眼鏡かけた時外し忘れていたんだ。

「なんだ？ 隼人、知り合い？」

その声に顔を上げると高校生の時よりも少し大人っぽくなった末至磨君ともう一人の男性、それから 奏が驚いたような顔で立っていた。

「じゃー、順番に自己紹介ということで、まずは俺から。未至磨諒、江戸川台大学社会学部経営社会学科に通う二年生です。猿渡と中高が同じでした」

ブイサインで周りを見回し、人好きのする笑顔を浮かべる未至磨君。

「猿渡 七海です。未至磨とは高校の同級生で今は武蔵野理科大学薬学部に通っています」

「猪瀬 馨、諒と同じ学科で、趣味はサッカーです。よろしく」

「兎澤 舞です。七海と同じく薬学生です」

向かい側中央に座る未至磨君から反時計回りに自己紹介が始まる。舞ちゃんが挨拶終わって、私と舞ちゃんの間 隣に座る人物に視線を向ける。

「はじめまして、辰巳 奏と申します。武蔵野理科大学の近くの喫茶店で働いています」

綺麗に頭を下げた姿勢を正した奏に、みんなが「ああ、ブルーベルの……」と言った表情になる。

私はちらつと横に座る奏を見て、ただ呆然とする。

まさかこんな所で奏と会うとは思わなくて、偶然にびっくりして自己紹介が自分の番に回ってきた事に気づかずに奏をじーっと見ていたら。

こつちを見た奏の空色の瞳と視線があって、はっとする。

「れいの番よ」

七海に言われ慌てて名前を名乗る。

「あつ、あの……えっと、羽鳥 れいです……」

みんなの視線が全部私に集まっっていて、ぼぼつと頭から湯気が出
そうな程緊張して名前を言うだけで精一杯だった。

「れいは人見知りするのよ、ちょっと緊張しているだけだから、ね
っ」

「あー、羽鳥さんとも高校一緒だったよね。俺のこと覚えてる？」

七海のフォローに未至磨君がくすりと笑って話しかける。

「うん……覚えてるよ……」

消え入りそうな小さな声で俯いて答えると、未至磨君があどけな
い笑顔を見せる。

「あははっ、恥ずかしがり屋なのは変わってないね」

未至磨君の一言で場が和み、次の人へと自己紹介のバトンが渡さ
れる。

「江戸川台社会学部経営社会学科二年、馬渡 まわたり 隼人 はやと。ブルーベル
でバイトしてるから、女の子達とは会った事あるかもね」

俯いていた視線をそおーっと上げて、向かい側に座る隼人さんを見
る。隼人さんは軽い口調で挨拶して、全員に視線を配り、最後に
私に視線を向けて、くすりと意地悪な笑みを浮かべる。

「安孫子^{あひこ} 桃花です。よろしく願いします」

桃花ちゃんの挨拶で自己紹介が終わり、乾杯用のビールを頼んで乾杯する。

「カンパニー！」

しばらくするとコースの料理が運ばれてきて、それぞれが近くの席の人と話しだす。

私はビールを数口飲んで置く。

「……れい、どうしてここにいるんですか？」

隣に姿勢正しく座っている奏がこっちを向かずに小声で言い、私はぱつと振り仰ぐ。

「えっと、七海に騙されて連れて来られたの……」

戸惑いがちに呟くと、呆れたようなため息をついて。

「やっぱり、そんなことですか……」

っていうのよ……やっぱりってなによ。

「まさかれいがいるとは思わなくて、最初すぐに気付きませんでしたよ」

ああ、私がいた事に驚いたのか。そういえば、最初も私を見て固まっていたし……

そんなに私って合コンに不釣り合いかな……？

「人見知りのれいがいるなんて……やっぱり猿渡さんが……」

奏が独り言のように何か言っで、私はよく聞き取れなかった。困って奏をじーっと見てみると、こっちを向いた奏と視線が合っでドキンとする。

初めて眼鏡越しで見る奏は、イケメン店員と七海達が騒ぐだけあって、端正な顔立ちをしている。きりつとした二重、通った鼻梁、薄く形の良い唇、そして一番目を引くのは羨ましいくらいサラサラの黒髪。肩につくくらいの長さの髪をハーフアップで結んでいる。いまだき長髪なんてって思っけど、それさえも魅力にしている。今日の奏の格好は、細身のベージュの綿パンツに白のシャツ、青と黒のチェックのストールを首からかけている。胸の前でストールの裾が揺れている。

「眼鏡……かけているなんて珍しいですね」

尋ねられて、眼鏡のテンプルに指を当てて眼鏡をはずす。

「そうだね。いつもは授業の時しかかけてないんだけど」

「視力悪いんですか？」

「うん。裸眼でこの距離だと、奏の顔もぼんやりかな」

苦笑しながら眼鏡を畳んでしまおうとした私の手に、奏が手を重ねる。

「しまっんですか？ ……そのままかけていて下さい」

その言葉にキョトンとして首をかしげる。だけど眼鏡を外しているし店内が薄暗いせいで、いまいち奏の表情がよみとれない。

「でも、いつもかけていないから眼鏡かけていると変な感じがして……」

眼鏡かけている事をすっかり忘れていたのに、そういつて誤魔化す。眼鏡をかけていると周りが見えすぎて、この状況でいつも以上に緊張しないでいることが出来ない。

「お願いします、眼鏡をかけていて下さい」

表情は分からなかったけど切ない声で懇願され、私はしぶしぶ眼鏡をかけ直した。

第16話 恋色ダイス 誘惑の時雨

眼鏡をかけてふつと顔を上げると正面に座っていた隼人さんと目があつて、含みのある笑みを浮かべて私を見た。

「ねっ、れいちゃんってさ、よくブルーベルに来ているよね。存在感薄いからいままであんまり気づかなかったけど、いつも壁側に座る子でしょ？」

悪気のない笑顔で存在感がないとずけずけ言われ……ちよつと顔を引きつらせる。

そりゃあ、私は特別可愛いわけでもないし、服だっていつも地味だし、注文する時以外は従業員の人は目も合わせないし最低限の会話すらしないけど……こうもはっきり存在感がないって言われると、へこんでしまう。

「はあ……」

あいまいに頷き返すと、隣に座っている奏が隼人さんの言葉を咎めるように強い口調で言う。

「隼人、その言い方は失礼だろう？ だいたいお前は」

そう言つて隼人さんに食つてかかろうとした時。着信音が流れ、奏がズボンのポケットから携帯を取り出して僅かに目を見開く。

「ちよつと電話がかかってきたので失礼します……もしもし」

みんなに頭を下げて立ちあがり、店内の静かな場所に移動しながら携帯を耳に押し当てる。

奏が席を立ったのをきっかけに、桃花ちゃんと舞ちゃんがお手洗いに席を立つ。

人数が減り、隣に座っていた桃花ちゃんがいないからか、隼人さんが席を立てて奏の席に移動してきた。

なっ、なんで私の隣に座るの　！？

「奏ってうるさいよな、小姑みたいだと思わないか？」

爽やかだけど少し癖のある笑顔で言った隼人さんに、私はもごとごと覇気のない声で答える。

「そんなことないと思うけど……」

「ふーん……」

そう言った私を隼人さんはじーっと見つめて、にやつと意地悪な笑みを浮かべる。

「れいちゃんってさ、奏と仲良いよな。この間も店に奏のこと迎えに来てたし。あっ、もしかして奏のこと好きとか？」

質問責めにあって、恥ずかしくしていたたまれなくて、その言葉に必死で首を振る。

「やっ、違っ……」

どこをどう解釈したら私が奏を好きってことになるのか理解できなくて慌てて否定する。

私が好きなのは今でも秀先輩だし、奏には好きな人がいるって言うていた。変な誤解をされては奏にも迷惑になるし、一生懸命否定したんだけど私の必死さなんて気にとめた様子も無く。

「そ？ まっ、違うっていうならいいけど」

って、あっさり話をぶつ切りにされちゃう。

誤解されなかったのはよかったんだけど、そうもあっさりされると呆けてしまう。話がどんどん飛んでいってついていけない。だって

「じゃあさ、俺と付き合わない？」

なんて、いきなり言うのよ……

「俺、れいちゃんに興味があるんだよね」

ええ っ!?

突然のことに驚いたんだけど、その後も質問責めに合い まあ、ほとんど答えられなかったけど 隼人さんが私に抱いている好意は恋愛感情というよりも好奇心のようだった。

「じゃ、アドレス教えてよ」

慣れた仕草で腰を浮かしてズボンの後ろポケットから携帯を取り出した隼人さんは、遠心力で折りたたみ式の携帯を開くとすっと私の方へ向ける。

教えるなんて言うてないのに携帯を向けられ、私は渋々鞆から携

帯を取り出す。

「私のアドレスなんて聞いても仕様が無いのに……」

ひとりごちた言葉を聞かれてしまったみたいで、隼さんがきよとんと首をかしげる。

「なんで？ 俺、アドレス教えてもらった子にはマメにメールするよ？」

アドレス教えてもらった子、その発言からは、明らかにたくさん女の子からアドレスを聞いていることが分かって、私は顔を引きつらせる。

「メール……なんてしなくていいです……」

「ん？ メールは苦手？ じゃあ、電話の方がいい？ 付き合いはじめは電話よりもメールの方がいいと思うけど……あつ、デートにも誘うよ」

隼さんが満面の笑みでなんか意味不明な事言っているから、私は適当に相づち打って聞き流すことにした。

お手洗いから戻ってきた桃花ちゃんと舞ちゃんは、隼さんが席を移動しているのを見て元の席とは違う席に座って、微妙に他の人達も席を移動した。

電話を終えて帰って来た奏は最初に七海が座っていた席、私からは一番遠い席に座っていた。

薄暗い路地

壁に追い詰められた私の目の前にいるのは隼人さんで、顔の横に手について私との距離を詰めてくる。

「あつ、あの……隼人さん？ あの……っ」

てんぱって話しかける私に、隼人さんは意地悪な笑みを浮かべて言う。

「いいから黙って」

言いながらどんどん顔を近づけてきて、息が触れそうな距離になる……

いつ、嫌あ　！？

なんなの、どうしてこんなことになってるのあ　！？

時は遡って、数十分前。

時刻は二十一時半を過ぎ、ディナー合コンを終えてみんなは二次会のカラオケに行くという。

私は明日も朝からバイトだし、連日のバイト続きによる疲れと合コンの気疲れで頭痛がしてきて、二次会には行かずに帰ると告げる。七海は渋い顔をしたけど、もともと騙して合コンに連れて来たのだし最終的には帰ることを許してくれた。

お会計を済ませてお店を出た後、お手洗いに寄ってから帰ることにした。緊張でトイレに行きたかったけど、隼人さんがずっと話しかけてくるからなかなかタイミングが掴めなくてずっと行けなかったんだよね。

洗った手をハンカチで拭いてお店の廊下を進みお店を出ると、お

店の壁にもたれかかって隼人さんが立っていた。

眼鏡越しに見る隼人さんは、七海いわく“イケメン店員”ぞろいのブルーベルで働いているだけあって、奏にも負けないくらい綺麗な顔をしている。大きめの瞳は茶色がかっていて、きりっとした眉と不遜に微笑む唇が魅力的。

右膝を折って足裏を壁につけ、だるそうに立っているその姿さえ絵になっていて、通り過ぎる女性がちらちら振り返っていく。

「隼人さん……どうしたの？」

みんなはもう二次会の場所に移動していると思っていたから、そこにいるはずのない隼人さんがいて驚く。

「ん？ れいちゃんのことを待っていたんだ」

爽やかな笑顔でそんなことを言われて、心臓が大きく飛び跳ねる・

「えっ!？」

思わず大きな声を出すと、隼人さんはぶつと吹き出してにやにやと意地悪な笑みを浮かべる。

「からかったのね……?」

からかわれたただだと分かってても、心臓が早鐘を打って顔は真っ赤になってしまう。

人見知りだし男の人は苦手で、滅多に男の人と話すことがない私は、待ってた　て言われるだけでドキドキしてしまう。

意地悪な笑いのまま、隼人さんは少し腰をかがめて私の顔を下から覗きこむ。

「からかってないよ。待つてたつて言ったのは、ほんと」

「えっ、あっ……そうなの？ あれ？ 私は二次会行かないよ？」

「うん、知ってる、帰るんでしょ。送ってくよ」

そう言つて壁につけていた足裏をぐつと蹴り、私の前に歩み出る。自然な仕草で手を握られて、私は引つ張られるように歩きだす。

えっ、ええ　！？

男の人に手を繋がれて歩くのなんて初めてで、心臓が破裂しそうなほどドキドキする。

そう考えて、奏に手を繋がれたことがあつたのを思い出すけど、あの時は精神的に滅入つていてドキドキするとかそんな状況じゃなかったし、あまりの強引さに気が動転していただけだった。

あの時の奏の強引っぷりを思い出して、初対面の印象と今ではだいぶ違うことに苦笑する。

隼人さんは優しく腕を掴み、少し歩くのは早いけど時々振り返つて私のことを気にしてくれる。しばらく手を繋がれて歩いて、「あれ？」と首をかしげる。

「あの、隼人さん？ 駅、こっちじゃないよ？」

大通りを外れて、路地に進んでいく隼人さんに声をかけたんだけど、隼人さんはちらつと振り返つただけで何も答えてくれなかった。やっと止まってくれたと思った時には、なぜか壁に追い詰められていて

「れいちゃん、俺と付き合わない？」

台コンの時も言われたセリフに、不覚にも胸がドキンと跳ねてしまふ。

だつて間近に綺麗な顔を近づけられて、うっとりするような甘い声、少し意地悪な笑みを向けられてドキマギせずにはいられなかった。

答えないのをイエスだと思ったのか一步一步と距離を詰められ、後ずさった私の背中が壁についてしまう。

「あつ、あの……隼人さん？ あの……っ」

てんぱってる私に隼人さんは意地悪な笑みを浮かべて言う。

「いいから黙って」

僅かに目を細め、艶っぽい声で言いながらどんどん顔を近づけてくる。

息が触れそうな距離になり、唇が触れそうな距離に、私はぎゅっと目を瞑った

第16話 恋色ダイス 誘惑の時雨（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（^^）

第17話 恋色ダイス 思い出のかなた

「おい、何やってんだっ ！？」

突然聞こえた荒々しい声に、ぎゅっと瞑っていた目を開くと険しい表情の奏が隼人さんの胸ぐらを掴んでいて、ぎよっとする。

「えっ、奏 ！？」

いつもと話し方が違うから、奏の声だとは思わなくて目を見開いて驚く。

私が制止する間もなく、奏のパンチが隼人さんの顔面に命中する。
ボコッ、ドッターン っ！

大きな音を響かして隼人さんが路地に倒れ込む。

「きゃーっ！？」

いきなり殴りとばしたりするから驚いて悲鳴をあげる。

床に片膝を立てて起き上がった隼人さんは、口の端からつつすと血が滲んでいる。

「あっ……隼人さん、大丈夫ですか？」

口の中が切れて血が出てる隼人さんに駆け寄ろうとしたら、後ろから強引に腕を引かれて奏の胸に中に押さえこまれる。

「やっ……なに！？ 奏！？」

突然のことに驚いて振り仰ぐと奏が見た事もないような怖い顔をしているから、ドキンっと大きく胸が跳ねる。

奏は私を片腕で抱きこむようにし一瞥すると、隼人さんに視線を向ける。

「隼人、お前、れいに何したか分かってるのか？」

怒りに震える声で言った奏に、隼人さんはぺつと床に血を吐いて手の甲で口元を拭くと皮肉気な笑みを浮かべる。

「何って　まだ何もしてないだろ。だいたい俺とれいちゃんが何しようが、奏には関係ないよなあ　？」

奏は何か言い返そうとしたのをやめてきゅつと強く奥歯を噛みしめる。そのまま黙り込んだ奏に対して、隼人さんは大きなため息をつくと立ち上がり、ぱんぱんとお尻をはたいて呆れた声を出す。

「奏　独占欲丸出しだな……」

そう言った隼人さんは、私にすまなそうな視線を向けて路地を出て行ってしまった。

私は隼人さんの言葉の意味が分からなくて、思考が止まる。

しばらくその場に呆けたように立ちつくしていた私は、はっと我に返って恐る恐る奏に声をかける。

「えっと、奏　？　そろそろ離してくれるかな……」

私はずっと奏の腕に包まれるように抱えられ、背中には奏の厚い胸が密着している。冷静になった瞬間、奏のことを意識してしまって頭から湯気が出そうだった。

体を離してほしくて言ったのに、なぜか腕にぎゅーっと力を籠められて強く抱きしめられる。

ドキンッ

大きく胸が震え、体の中心が疼く。

前にも感じた鼓動の早さに警戒音が響いて、どうにか腕を離してもらおうとしたら

「れい、好きだ」

肩越しに切なく震える声で奏に言われ、ぎゅっと胸が締め付けられる。

自分の聞いた言葉が信じられなくて、どうしようもなく鼓動が早鐘を打つ。

「俺じゃダメなの？ いつも君の事を考えているのに」

奏は囁くように言うと、私の髪の毛を優しい手つきで梳く。

髪の毛に指をからめられた瞬間、体中の神経が髪の毛にあるんじゃないかってくらい敏感になって、体の中央から甘い痺れが広がっていく。

奏が、私のことを、好き？

そのことに思考が囚われ、頭が上手く回らない。

だって、私と奏が知り合ったのはついこの間で、数回しか話したことがなくて、お互いのことをそんなに知らない。

それに私が好きなのは秀先輩で、奏が好きなのは

そう考えて、奏の部屋で見たラベンダー色のハンカチと、血相を変えてハンカチを隠した時の切なさに揺れる奏の顔を思い出して、

一気に頭に血がのぼる。

胸の上に回された奏の腕の温かい熱に吸い寄せられるように伸ばそうとしていた手で、乱暴に奏の腕を掴んで自分の体からひきはがす。

振り向きざま、きつと苛立ちを宿した瞳で奏を睨みつけ、私は駆けだしていた

なんなの、奏は　！？

私のことが好きって、奏にはちゃんと好きな人がいるくせに。どうしてあんな嘘をつくの！？

真剣な瞳、あまりにも綺麗なバリトンで好きって言われたらどんな女の子だってくらぐらしちゃうに決まっている。

だから私の心が揺さぶられたのは、決して奏を好きだからじゃない

い
思わず奏の手に伸ばしてしまったのだって、深い意味はないんだ。私が好きなのは秀先輩で、奏のことはただの友達としか見ていな

い
必死に心の中で否定しながら、私の頬に一筋の涙が溺れ落ちる。それならどうして、私はこんなに傷ついているのだろう

からかわれたんだって気づいて、苛立ちと同じくらい悲しかった。信頼していた奏に裏切られたようで、なにも言い返すことが出来なかった。

私は泣きながら、無我夢中で駅に向かって走った

好き　　そう告白されて逃げ出すのはこれが二度目だ……

どこをどう走ったのか、街灯に照らされた見知らぬ住宅街の小道をだんだんとスピードを緩めて走るのをやめた。

しばらくそのまま歩いて、ふっとそんなことを考えて高一の最悪の記憶を思い出してしまった。

振り返りざまにキスをされ、好きだと言われた高一の春。

彼のことは印象的だった目にかかる黒くて量のある前髪は覚えてるけど、それ以外のことは顔も名前も覚えていない。

もともと同じクラスと言ってもほとんど話したことなくて、いきなり好きだなんて言われてからかわれたのかと思ったくらい、彼と私の接点はなくて

そういえば、彼について一つ思い出した

逃げ帰った家で一晚中彼のことを考えていた。なぜ告白したのか、私のどこが好きなのか、明日はどんな顔をして会ったらいいのか、ほとんど話したことがない人に告白されて動揺する心の中に少しは嬉しい気持ちもあったのかもしれないけど、私はそれに気づかないくらいキスされたことに衝撃を受けていた。

とにかく、教室で彼と視線があっただけでたまれなくてどうしたらいいのかとそればかり考えて、ほとんど眠れなかった。ただ。

翌日登校すると、彼は転校したと担任の先生が言った。

転校のことを知っていたのは誰もいなくて、もしかしたら親しい友達は知っていたのかもしれないけど、教室中がざわめいたのを……思い出した。

確か、彼が転校のことを言うのをその日まで担任に口止めしていたらしい。

私はさんざん、彼とどんな顔をして会ったらいいのか悩んだのに、彼は教室からいなくなってしまった。

もし、彼が転校しないでキスのことを謝ってきたり、そうでなくても話しかけられていたら、こんなふうに告白とキスが最悪の記憶として深く脳裏に刻まれることはなかったかもしれない。

はぁー……

とぼとぼと重たい足取りを止め、私は大きなため息をつく。
夜空を見上げると、繊維のように細い月が寂しげに空に浮かんでる。

あの時はただキスされたことがショックで逃げ出したけど、今は
どうして奏から逃げ出してしまったのだろうか……

奏のことを思い出して、ため息をもう一度つく。頬に触れると、
さっきまで流れていた涙がまたこぼれはじめて、思わず嗚咽を漏らす。

「うつ……うつ……」

織月に照らされた夜空に、ただ静かに嗚咽が消えて行った。

第18話 恋色ダイス 星が丘ララバイ

朝、鏡の中に写る自分は、泣きすぎて目が腫れていて火照ってだるそうな顔をしている。

ピピピピピッ……

脇に挟んだ体温計から音がして取り出すと、小さな液晶には「三十九度六分」の数字

なんだかだるくて頭が痛いから、風邪じゃないことを確かめるために熱を計ったのに、予想外の熱の高さに目の前がぐらぐらする。

今日も朝からバイトだったけど、さすがにこの熱じゃ行けないよね……

私は仕方なくバイト先に休むことを伝え、もう一度布団の中にもぐって寝ることにした。

遮光カーテンをひいていても隙間から差し込む光に部屋は明るい。二度寝から目が覚めると、汗をぐっしょりかいていて気持ち悪くてシャワーを浴びて着替えることにする。少しお腹もすいてきて、朝から何も食べてないことに気づいて起きたついでに冷凍ごはんでおじやを作って遅い朝食兼昼食にする。

テレビをつけながら雑貨屋で買った一九九五円の長方形の折りたたみ机におじやの入ったお椀を置いて食べて、食べ終わった時ふっと思いついてクローゼットをあさる。

確か、この辺りに……

昨日からもやもやした物が胸の底に溜まってて、それを解消するために半畳のクローゼットの奥からガムテープで口を閉じた段ボール箱を引っ張り出し、その中から重厚なえんじ色のアルバムを取り

出した。

私に告白した次の日に転校していった彼が同じ中学だったことを思い出して、アルバムで確認すれば、胸に溜まったもやもやがなくなるかもしれないと思ったの。

朦朧とする頭で重みのあるアルバムを抱え、クローゼットの前からベッドに移動する。ベッドの下に座って寄りかかり、立てた膝の上でアルバムを開く。

何枚かページをめくって、三年一組のページで手を止める。四組までである中、私は一組で、中学の頃の自分の写真が載っていて、同じページには七海も載っている。

私はゆっくりとページをめくり、二組三組と一人一人の顔写真を見て、記憶の中の彼と一致するか確認していく。

二組と三組の中には彼はいなくて、四組を開く。

端から顔写真を見ていき、一つの写真にぴくりと眉を動かす。

黒くうっとうしい量の前髪が目にかかり、黒ぶちの眼鏡をかけた少年

記憶の中の彼よりも少し幼い雰囲気だけど、間違いなく彼だと思った。それと同時に視界に入った文字に衝撃を受ける。

眼鏡をかけた少年の顔写真の下には “辰巳 奏” と書かれていた。

か、なで ！？

私と奏は中学校が同じだった ？

うっん、それよりも 奏があの子！？

私に告白してきた男の子は 奏だったの ！？

だって、奏は眼鏡はかけてないし、髪の毛だってこんなにもつさりしていない。写真の男の子は眼鏡と前髪で瞳がよく見えないけれど、写真と今の容姿とはあまりにかけ離れていて、とても同一人物とは思えなかった。

ぐらりと歪む視界の端で、見知ったもう一つの名前を見つけて、大きく胸が跳ねる。

未至磨君も三年四組

未至磨君と奏は同じクラスだったことがあって、転校した後も連絡を取り合う仲だったから、奏は合コンに来ていたの？

昨日は合コンに騙されて連れて行かれたショックと男の子がいて緊張して、そこに奏が現れた驚きで未至磨君との関係とか全然考えなかったけど、二人の間になにかしらの関係がないと合コンに誘ったりしないわよね……

他のメンバーの隼人さんと猪瀬君は未至磨君と同じ大学の同じ学部だっけって聞いた。奏は大学に行っていないから大学の知り合いってことはないし、隼人さんに誘われて　っていうのもなんか違うカンジがする。そう、だって、奏と未至磨君は親しい間柄みたいだった。普通に話していたし……やっぱり、二人は同級生で親友で奏は私と同級生だった　……

アルバムの写真に写る“辰巳 奏”が同姓同名の別人かとも考えたけど、未至磨君と同級生ということから、私の知っている奏とこの辰巳奏が同一人物という事実に繋がる。

つまり、高校生の時に告白してきたのは奏で……私のファーストキスの相手も

そこまで考えてぐらんと激しい目眩がして、一度思考を止めて、お椀を片づけベッドに潜り込む。

もう一度寝直したら、少しは頭の中が整理されるかもしれないそう思ったのに、奏のことが頭から離れない。

奏と私が同中出身。高一の時は同じクラスで、告白してきて奏は今でも私を好きなのかな？

そんなことを考えてしまっただけで、ぼっと顔に火がついたように真っ赤になってしまう。

やっ、やだな……そんなことないよね、今更。

そうよ、だって奏には好きな人がいるもの。奏の部屋で見たラベンダー色のハンカチと、血相を変えてハンカチを隠した時の切なさに揺れる奏の顔を思い出して、一気に顔の火照りが引いていく。

そもそも、同級生って気づいていたなら喫茶店で会った時に言ってくれるはずよ。そうじゃなくても、同級生だったって知らせる機会はたくさんあったでしょ？

じゃあ、奏は私と同級生だったって気づいていないの？
そう考えて、矛盾点に気づく。

違う　奏ははじめから私だって気づいていたんだわ。だからあの日、秀先輩に失恋して泣いていた私を強引に連れ出した
それなら、どうして？　どうして、同級生だったって言わないの？

一つ答えが分かると、一つ分からなくなってしまう。
ただ、目眩のする頭とだるい体で考えついた結論は、奏が私のことを微塵も好きじゃないということ

高校の時、告白されて答えずに逃げてしまった私を、今でも好きになわけがない。それに奏には好きな人がいるのを知っている。だから、奏の告白は嫌がらせで　告白から逃げた私への復讐のための告白だったのよ。

あの告白の彼が奏だと気づいていない私にもう一度同じことをして、困っている私を見て笑っているに違いないわ

こんなことならアルバムを開かなければ良かった。こんな記憶なら思い出さなければ良かった

奏が同級生で、告白してきた男の子だったなんて思い出さなければ、笑って奏の告白を冗談にすることが出来たのに

悲しくて切なくて、心が傷ついてしまった。

こんなことってあんまりよ。復讐のために、好きでもない子に気のあるそぶりを見せて告白するなんて、最低な人間のすることだわ

朦朧とする意識の中、ざわざわと胸が波立って、閉じた瞳から涙が一筋流れ落ちた

その日の夜、私の熱は四十度を越え、ふらふらの状態のまま誰にも連絡を取れず、病院にも行けず、三日間音信不通となった

風邪をひいてから五日目。七海と会う約束をしていたのだけど、電源が落ちた携帯にも気づかず放置していたから、連絡の全く取れない私のことを心配してアパートに尋ねてきてくれた。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「うん、もう熱は微熱くらいまで下がったから……」

熱と頭痛だけで病院に行かずに家に寝てれば治ると思ったら、予想外に長引いてしまった。私はパジャマの上にカーディガンを羽織って、咳はでてなかったけど念のためにマスクをしてる。へらへらと喋る私を見て、七海は片眉を上げる。

「ちゃんと病院に行かないからこついうことになるのよ」

「はい」

「もう、ちゃんと聞ってるのっ!？」

コンビニで買ってきてくれたお弁当をレンジで温めながら、七海が苛立ちを露わに行ってくる。

私は手に持ったあつあつのココアに口をつけて、にこつと微笑む。

「うん」

面倒くさくて病院に行かなかったって言ったけど、本当はお金をかけたくなかったことに気づいている七海が、それでもあえてそこを突っ込んでこない優しさに、口元が緩んでしまう。

まあ、初日に病院に行かなかった理由はそれだけど、次の日から倒れて病院に行く気力もなかったというのは本当だけど。

温めたお弁当を持って、七海が向かいに座る。お弁当を食べながらしばらく話した時。

「体調良くなったならさ」

七海が意味深に言うから、私はお弁当から顔を上げて七海を見る。

「ブルーベル、一緒に行こうよ」

ブルーベルにはよく七海と一緒に行くけれど、なんとなく誘われたことに違和感を覚えて七海をじーっと見つめていると、その顔が徐々に赤くなる。

「実はね……好きな人が出来たの……」

その言葉にどきつとする。

「えっ……それって……」

もしかして、奏？

第18話 恋色ダイス 星が丘ララバイ（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです（^^）

第19話 恋色ダイス 心の扉を叩く音

合コンで、七海は奏と隣の席に座って、仲良さそうに話していたのを思い出して、胸がちくちくと痛む。

奏のことが好きなの　そう尋ねようとしたのに、言葉が出てこない。

「実はね……卯月さんっていう従業員の人」

七海が頬を染めて言って、私は聞き覚えのある名前に気づかれないうちに安堵のため息をつく。

「ああ、そんな人いたね……」

ロッカールームで会った卯月さんを思い出して顔を顰めると、七海が訝しんで私を見る。

「ちょっと！　れい、卯月さんと知り合いなの！？　男性苦手のくせにいつ知り合ったのよ！？」

机の上に手をついて顔を近づけてすごい剣幕で問い詰められて、私は体をひいて七海から距離をとる。

「えっ……知り合いじゃないよ。ぜんぜん、知らない人」

ぜんぜん知らない人ではないけれど、たった数分会っただけで知り合いとは言えないよね。

両手を勢いよく振って否定する私に、七海が片眉を上げて座り直す。

「そう？ まあ、そうよね、れいが男の人の知り合いがいるわけないよね」

なんだかその言葉に棘があって、でもその通りだから言い返せないけど。

「いいの、私は男の人なんて興味ないもの……」

これも嘘だけど。だって、私は

「それよりさ、一緒に行ってくれるよね？」

女友達も男友達も多くて、誰とでも気さくに話せる七海だけど、好きな人の前ではすごく緊張して一人だとまともに話せなくなるらしい 私からしたら、ぜんぜんまともだと思うけど。

だから七海に好きな人が出来ると、私は好きな人に会う七海に引っ張られてついていく。私が一緒に行っても、どうせ間を取り持ちたり話しに加わるなんてことは出来ないのに、なぜか私を連れていくのよね。

まあ、一緒に行くだけで、特に私はなにかをしなければいけない訳じゃないからいいんだけど。でもね、今回は……

「ごめん……私、行けない」

「えっ、どうして!？」

予想外の返答に七海がすっとんきょうな声を上げる。

「ブルーベルには 行きたくないの」

決意も固く言い切った私に、七海が訝しげに片眉を上げる。

「なに なんがあったの？」

週三回以上通う行きつけの喫茶店にいきなり行きたくないなんて
言いだせば、なにかあると思うのが普通だよね。

だけど、奏が同級生だったことや、ファーストキスの相手だった
とか、復讐とか

今は全部を話す気にはなれなくて、私は曖昧に首をかしげる。

「ん 、今度、話すね」

七海は私が話したくなのを悟って、ふうーっとため息をつく。

「わかった、言いたくなったら聞かせてね。ブルーベルには、桃
ちゃんか舞、誘うよ」

「うん、ごめんね」

それから二週間が経ち後期講義が始まって大学に行くようになった
けど、私は一度もブルーベルには行かなかった。

そしてあの日から、私の微熱は続いていた

「れい？ もう講義終わったよ？」

「きゃっ……」

視界に七海の顔のアップがいきなり入りこんで、私は驚きで身をひいて背もたれにしたたかに背中をぶつける。

「なにやってるの……？」

呆れた顔で七海に言われ、私は笑って誤魔化す。

「えへへ……」

七海は机に片手をつき、もう一方に手を腰に手を当ててため息をつく。

「最近のれいはずっとぼんやりしてるね」

ずっと続く微熱のせいなのか、違うなにかのせいなのか
ただ、気持ちの整理がつかなくて、ずっと心にもややもやした黒い塊が残っていた。

奏がどういふつもりであんなことを言ったのかが分からない。分からないなら、直接本人に会って聞けばいいのかもしれないけど……
…会いたくなかった。

奏のことを考えてちくちく痛む胸に翻弄される。

私は今でも、あの時から逃げ続けているのかもしれない

このままではダメだって分かっているのに、一步を踏み出すだけの勇気がなかった。

もし本当に復讐だったら、私は ……

それなのに、今、私はどうしてこんなところにいるの？
！？
ブルーベルは家から大学の間にはなくて、大学よりさらに駅に向

かった大通りから一本外れたところにある。

駅に用事があつて行かなければならない時も、なるべくブルーベルに近寄らない道を選んでいたのに、七海に引つ張られてブルーベルの並ぶ通りを歩いていた。

「ちよつと、七海っ！ 新しく見つけたお店に連れて行つてくれるつて話しだつたじゃない！？ この辺りに新しいお店なんて」

このままもう少し進めば、ブルーベルについてしまう。私は必死に抵抗して足を踏ん張り、腕をひく七海から逃れようとする。

私はブルーベルには行きたくないのよっ。どうして連れて行こうとするのぉ　！？

引つ張り合いになつてた腕を急に七海に離されて、私はバランスを失つて後ろに数歩よろける。

「もうっ！ まだブルーベルには行かないと言っているの？ あんなに気に入つて通つてたのに、何が気に入らないわけ！？」

「なにつて……」

それは奏に会いたくないからよ

そう言つてしまいたかつたけど、言えなくてぐつと唇をかみしめて俯くと、七海が腰に手を当てて大きなため息をつく。

「まだ、話せる状態じゃないわけ　？」

ちらつと顔を上げて七海の顔を見ると、心配そうな光を宿した目をすがめて私を見ているから、言葉で伝える代わりに小さく頷く。

「はぁー……分かつた、せつかく卯月さんと仲良くなつたかられいに紹介しようと思つたけど、また今度にする」

卯月さんを紹介　というのがなんだかもすごく嫌で、私は顔を顰めて七海を見る。

「私に紹介されても困るんだけど……」

一度話した時の印象が悪かったというのもあるけど、男の人を紹介されても緊張して話せないから困るというのもある。

「まあ、そうだけど。卯月さんが今度は友達も連れておいでって言うから……」

七海は最近、以前の私のように一人でブルーベルに通っているらしい。

でもそれって、営業で言われただけじゃ……

七海もそれに気づいていて、私を無理やり誘ったのかな。それなら一緒に行つてあげるべきかな。でも、だけど

「ごめん、今は無理……」

心苦しくて申し訳なくて、私は俯いて言う。

「分かった　無理やり連れて来てごめんね、じゃ、また明日」

「うん、また学校でね」

七海は笑顔で手を振って、ブルーベルまで小走りに駆けて行く。黒縁の硝子扉の中に消えていく七海の姿を見送り、掠れていくパイプチャイムの涼やかな音色を聞いて、家に帰ろうと踵を返した時。

「れい」

「　　っ」

そこにいた人物に、私は言葉を失って口元に手を当てる。
奏

後ろに立っていた奏は、喫茶店の制服の上に羽織った紺色のスウェット素材のカーディガンのポケットに手を入れてスーパーのビニール袋を下げていた。

私はきゅっと唇をかみしめて奏から視線をそらすと、俯いたまま奏の横を足早に通り過ぎようとして　腕を強く引かれ、住宅の間の小道に連れ込まれてしまった。

「やつ、痛い　なにする……の……」

きつと苛立った視線を奏に向けると、そこには威圧的な瞳が鋭い光を宿してぎらりと光る。

ぞわっと背筋に冷たいものが這い上がり、体が震える。

「どうして、店に来ないんですか？」

冷えた氷の様な声に、私は視線を合わせずに答える。

「バイトと課題が忙しかったの……」

「それだけですか？」

「奏には関係ないでしょ、あつ　」

二の腕を強く引きあげられて、無理やり顔を上げさせられる。間近に妖艶な光を宿した瞳があつて、不覚にもドキドキしてしまつて、今度は反対側に視線をそらす。

「関係ない　？　ならどうして、俺のことを見ないんですか？」

核心をつかれて、胸がじくじくと痛む。だけど

「俺がなにかした？」

奏のその言葉に、胸にずっと押しとどめていた気持ちが涙と一緒に溢れだす。

「なにかしたか、ですって　？　そんなの、したじゃない。さんざん、人の気持ちを振りまわして　」

私の言葉が言い終わらない内に、顔を無理やりあげさせられて腕を掴んだもう片方の手で私の顎を掴む。至近距離で奏の星空のような漆黒の瞳と視線が絡む。その瞳の奥には、焦がれるような熱と何かを強く求めるような光があって、胸が苦しくなる。

瞬きをした一瞬の隙に奏の唇を押しあてられて、一秒後にキスをされたと感じて、思考が急速に回り始める。

「やつ　」

掴まれていた腕を強く振り払う。私の瞳は溢れてくる涙で霞み、溢れてくる感情のまま叫んでいた。

「復讐なら、もう十分でしょ！？」

自分で言った言葉に胸が切り裂かれるように痛んで涙が止まらない。

奏には好きな人がいるのに、どうしてキスなんかするの
本当に嫌がらせ……復讐のためなの

違う　って、奏の口からその言葉を聞けたなら、渦巻いている

気持ちも不安な気持ちもすべてなかったことに出来るのに
私の見つめる先で、奏の瞳が見開かれ切なく揺れるから 違う
って言うてくれないから

「どうしてこんなことをするの……ひどい、奏のこと信じていたの
に」

私は泣き叫んでその場を駆けだした。

信じていた友人に裏切られたから？

どうして気づかれたんだって、奏の表情が驚いていたから？
違う、そんなんじゃないかって私は……

胸に押し寄せてくるもどかしい気持ちに、胸が苦しかった。

第20話 恋色ダイス 好きなかもしれない

ずっと溜めこんでいた気持ちをぶちまけてすっきりしたはずなのに、涙が後から後から溢れて来て、止まらなかった。

また逃げ出してしまった。そのことに罪悪感がつのり、自分の想像通り奏が復讐のために私に近づいたんだと知って 胸が引き裂かれるように痛んだ。

失恋した日の出会いすら計画的なものだと思つと、胸のもやもやが大きくなる。

あの優しさも、すべては偽りだったの？

もう何もかもが信じられなくて、ただ苦しくて

その日、私は再び熱で寝込んでしまった。

十月、秋らしい陽気になり、昼間でも長袖ではないと肌寒く感じる日が多くなってきた。

改札前の柱の銀縁に映った顔を覗きこみ、乱れた前髪を横に流してリップを塗りなおす。

「羽鳥っ！ ごめん、待ったか？」

改札を抜けて駆け寄ってきた秀先輩を見て、私は慌ててリップを靴にしまう。目元を和ませて首を横に振る。

「いいえ、私もいま来たところです」

「高橋先生、話したすと長くていつもゼミの時間長引くんだ……」

首を触りながら苦笑す秀先輩に、私も笑い返す。

「そうですね、講義もいつも休み時間潰れちゃうんですよ」

そう言つて、改札前からコンコースを渡つて駅前の画材屋さんに入る。

今日は秀先輩と待ち合わせて二人で買い物

夏合宿の告白の後、私と秀先輩はギクシャクすることもなく、今まで通りの関係が続けていた。仲のいい先輩と後輩　　だけど一つだけ違うのは約束をしたこと。

『今度、一緒に出かけないか？』

秀先輩のその言葉が嬉しくて、消せない気持ちちが膨らむのが分かった。

見たい映画があつてのお誘いだつただけど、私が風邪で寝込んだりいろいろあつて予定が合わなくて、のびのびになっていた“お出かけ”が今日というわけ。

「でも、すみません……私の買出しに付き合つて貰う形になつてしまつて……」

画材屋に入り、店内中央のエスカレーターに乗つて前に立つ秀先輩を見上げる。

秀先輩は夏休み明けに研究室の配属が発表されて、ゼミが始まり卒業研究に向けて忙しくなる時期でなかなか二人の予定が合わなくて、やっと合つたのが今日だったのだけど、私の買出しをするとい

う用事に秀先輩について来てもらう形になってしまった。

おまけに買出しというのがサークルの歓送会の備品で　秀先輩は歓送される立場なのに買出しに付き合わせるってどうなの！？

うう……ジャンケンの弱い自分を呪ってしまう。

肩を落として沈んでいる私を見て、秀先輩はふわりと優しい笑みを浮かべて、ぽんぽんと大きな手で頭を撫でてくれた。

「気にするな、俺もちようどこで買いたい物あったからさ。でも

」

そう言って、秀先輩が口元に拳を当てて咳払いをする。

「本当は映画とかに、羽鳥と一緒に行きたかったけど……」

掠れた声で、少し頬を染めて言った秀先輩の言葉に、私は胸がきゅーんと締め付けられる。

わっ

「私も　秀先輩と映画行きたい……です」

そんなことを言ってしまった、かぁーっと顔が赤くなるのが分かって俯く。

今まで通りの関係　それでも少し変わったことがある。

なんだか秀先輩が私に向ける瞳が柔らかくて、私だけは特別なんじゃないかって、自惚れてしまいそうになる。

今までも時々メールをしていたけど、ほとんどがサークルの連絡だった。でも出かける約束をしてからはお互いの予定の確認とか些細なことだけど、個人的な内容のメールのやり取りをするようになった。

妹みたいな存在だと言われた時は、恋愛対象として見られていないことに落胆したけれど、妹でも秀先輩の中で特別な存在でいられるならそれでいいかもしれないと思った。

初めての気持ち、淡く切なく大切な私の恋だった

振られて傷ついて、だけど秀先輩を困らせたくて言った訳じゃない。今までの関係を壊したかった訳じゃない。少しでも前に進めれば、人見知りで男性が苦手でいつも逃げてばかりいる自分も少しは成長出来るかもしれないと思って

どうしようもない失恋に、はじめは悲しくて何もかもが受け入れられなくて。だけど。

『どうしようもなくなんかありませんよ。よく、頑張りましたね』

そう言ってくれた奏の言葉で救われた。

秀先輩を好きな気持ちはそう簡単には消せなくて、ただ好きな気持ちを持ち続けてもいいんだと重た。

優しく頭を撫でられるような、心をとろかすような言葉で励ましてくれたから、前向きになれたんだ

奏のおかげなんだよ　　心の中で呟いて、胸がぎゅっと締め付けられる。

それなのに、もう奏と普通に接することは出来ない。

復讐のためだけに奏は私に近づいて、好きだとか心にもない事を言って私をからかって

許せないとかそんな気持ちよりもなによりも、悲しくて苦しかった。

ねえ、奏　　失恋をして時に慰めてくれたあの優しさも、全部ぜんぶ嘘だったの　　？

「……羽鳥？」

急に声をかけられて、考え込んでしまっていたことに気づいてはつとする。目の前に秀先輩の心配そうな顔が覗きこんでて、私は慌てて尋ねる。

「あつ、なんですか、秀先輩」

正面に立った秀先輩は少し腰をかがめて私と目線の高さを同じにすると、その瞳に真剣な光を宿す。

「大丈夫か……？」

それが何に対しての大丈夫と聞かれたのか分からなくて、首をかしげる。秀先輩を安心させるように笑顔を作ったんだけど、なんだか上手く笑えなくて泣きそうになる。

大好きな秀先輩と一緒に初めてのお出かけなのに、私の頭の中は奏のことばでいっぱいだった。

こんなに好きな秀先輩を目の前にして、心が弾まない。笑顔を作ろうとして 私なにやってるんだろ……

私は泣き笑いのような笑みを浮かべて秀先輩を見る。

「大丈夫ですよ」

ぜんぜん大丈夫じゃないけど、秀先輩に話す気にはなれなくてそう言うしかなかった。

秀先輩は大丈夫じゃないことに気づきながらも、それ以上詮索しないでいてくれた。その優しさが胸に沁み入る。それなのに、考えるのは奏のことだった

第20話 恋色ダイス 好きなかもしれない（後書き）

更新遅くなってすみません>m(_____)m<
ちよこちよこ執筆してるので、気長にお待ちください！

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです。

第21話 恋色ダイス 恋を始める距離

沈んだ気持ちで買出しを終えて電車に乗り込む。画材店があったのは学校がある運河駅から五駅離れた柏駅で、現地待ち合わせだったから駅で分かれるのかと思ったら秀先輩は買った物を学校まで運ぶと言ってくれた。

「どうせ、俺もサークルに顔出すから」

そう言った秀先輩の顔がなんだか寂しげに見えたのは気のせいだろうか……

部室に着くと七海が一人で雑誌を読んでいた。

「あれ？ れい、今日はギリギリに来るって言ってなかった？」

「あー、うん、そうなんだけど……」

歯切れ悪く言って部室に入った私の後ろにいる人物を見て、七海が大きく目を見開く。

「えっ、あっ……秀先輩、こんにちはっ」

言いながら姿勢を正して頭を下げる。

三年生は十月の歓送会を終えて引退ということになっているけど、実際は夏の合宿を最後に研究室が忙しくて来なくなる人が多い。

九月からは三年生の出席は減って、二年生が最上級学年というこ

とになっていて、目の前に現れた秀先輩に驚き、寛いでいた事への少しの後ろめたさから七海は居住まいを正した。

「こんにちは、猿渡。今日は俺もサークルに出ようと思ってね」

「あつ、そうだったんですか」

どもる七海にふわりといつもの優しい笑みを浮かべた秀先輩は、部室の奥へと行く。

「ちよつ……れい、どういうことよ!?　なんで秀先輩と一緒に来たの!?!」

肩の服を掴まれて側に引き寄せられ、七海に小声で尋ねられる。その瞳は好奇心を丸出しで、私は思わず苦笑する。

「えっと、かくかくしかじかで　歓送会の買出しを手伝ってもらいました」

手に持っていたビニール袋を持ち上げて、ぺこつと頭を下げる。部室の奥に行っていた秀先輩が顔を出し。

「羽鳥、この荷物はここらへんに置いておけばいいかな?」

そう言って手に持っていた大容量のビニール袋を奥の空いている棚へと置く。

「はいっ、荷物持って頂いてありがとうございます」

「いいえ、こちらこそ」

秀先輩は星の輝きの瞳を和ませ優しい笑みを浮かべるから、私も

つられて微笑み、二人の間にほんわかした雰囲気が出る。

「ただ、そんなことに気づいていない七海が私と秀先輩の交わる視線の中に入り込んでくる。」

「あつと、購買部に用事があるの忘れてた、れいもついて来て。秀先輩、すみません、サークル始まる時間には戻るので、お願いします。」

そう言った七海は、有無を言わずに私の腕を引っ張って部室を出て行った。

「ちょっと、なに？ どういうこと？ どうしてれいと秀先輩と一緒に買出し行ってるのよ!？」

購買部と隣接する学食の一席で、興奮気味に捲し立てる七海を上目使いに見て、私はお茶を静かにすすむ。

「だからね、秀先輩と一緒に出かけようって言われてて、本当は映画に行く予定だったんだけど予定が合わなくてのびのびになって、これ以上伸ばすのもあれだしってなって、今日私が柏に行く用事があるって言ったら一緒に行こうってことになったの。それで買出し手伝ってもらって、サークル出るからって部室まで荷物持ってもらって……」

順序立てて説明する私の言葉を遮って、七海は悩ましげに額に手を当てる。

「なにそれ……れいって秀先輩に振られたんじゃないかな？」

「うん……」

「でも、二人で出かけたと言って言われたんだよね？ それってさ
秀先輩はれいのこと好きって事じゃないの？」

真剣な表情で言った七海を私は呆然と見つめ、それからあいまいに笑って首をかしげる。

「どうだろう……」

「どうだろうって、なによー。やる気ないわねえ……れいさ、夏休み
にこのままの関係でいいって言ったじゃない？ 振られても好きな
気持ちは変わらないって。引退してからも時々会えればいいって
言っけどさ、そんな悠長なこと言ったら、そのうちきつと後悔す
るよ」

「後悔　？」

七海の言葉がなんだか胸に深く突き刺さる。

このままでいたらダメ　　なんだか警告にも似た言葉が胸がじく
じくと痛み始める。

「私はさ、れいには幸せになっただけだと思っただけだ。辛い恋なら諦めな
って言ったよ。新しい恋を見つけるために嘘ついて合コンにも連れ
て行ったけどさ　　前言撤回っ！　　きつとさ、秀先輩はれいに告白
されて女性として意識するようになったんだよ」

「そんな、七海の買いかぶり過ぎだよ……」

先輩が私に少しでも好意をよせてくれてたら嬉しい。だけど、そ
れは七海の想像の域を出ないとこの話で、私は苦笑する。

「そんなことないってっ！　　げんに、今日だって二人で出かけたな
らデートだよ！　　デートに誘うなんて好きだからだよ。先輩はまだ
自分の気持ちの変化に気づいていないだけで、妹よりももっと特別

にれいのことを見てると思うよっ！」

自信満々に言った七海が、私と視線があって首をかしげる。

「れい　？」

その時の私はどんな顔をしてたんだろうか？　諦めた顔、嬉しい顔、悲しい顔　そのどれもだったかもしれない。

七海が片眉を上げて、訝しげに私を見据える。

「なに？　なにかあったの　？」

秀先輩のことよりも、今、私の胸に占拠した気持ちがどんどん大きくなって苦しかった。

「七海……私、ね……聞いてほしいことがあるの……」

掠れた声を必死に絞り出す。泣きそうで唇をきつく結んでから、顔を上げて七海に話し始めた。

「ブルーベルの従業員の　辰巳さんって分かる？」

「ああ、同じ中学出身の辰巳君のこと？」

「七海、気づいていたの！？　ブルーベルで働いてるのが同級生だって……」

「ううん、まさか。お店で会った時はぜんぜん気づいてなかったよ。だから合コンで話した時に彼から言われてびっくりしたわ。辰巳君とは中二の時同じクラスだったけど、その時と印象が違いすぎてぜんぜん気づかなかった。すごいイケメンになったよね」

七海が奏に気づいていたのか確かめたかったんだけど、気づいていなかったと聞いて私だけじゃなかったんだとんだか安心する。

「で、辰巳君がどうかしたの？」

きょんとした顔で尋ねる七海に、私はどう話を切り出そうかと戸惑う。

私が奏と初めて同じクラスになったのは高一の時で、その時七海と私はクラスが別だったから、奏が転校したことも、最悪の記憶の告白相手が奏だとも七海は知らない。

だけど、七海がたった一度同じクラスになっただけの奏のことを、今の奏とすぐに一致しないにしてもしっかりと覚えていたことに驚く。私なんて告白された時点でだって奏と同中だったことも知らなかったのに

まあ、私は人見知りで人の顔と名前を覚えるが苦手ではあったけど。

黙り込んでしまった私に、七海は急かすでもなく辛抱強く待ってくれた。そんな七海の優しさに、私は思い切ってすべてを打ち明けることにした。

高一の時告白してきたのが奏だったこと、再会し二度目の告白をされたこと

「復讐されたのよ」

私の言葉に、ずっと静かに聞いていた七海の瞳が鋭い光を帯びてギラリと光る。

しばらく黙り込んだ七海は、顔を上げて私をまっすぐに見つめる。

「そうかな？ 辰巳君ってそういうことする人には思えないけど？」

あまりに意外な言葉に、私は数回目を瞬く。

「一度しかクラス一緒になったことないし、そんなに話した記憶ないけど。彼ってさ、真面目で思いやりのある人だったと思うよ。合コンで会った時も、すごく感じ良かったし、悪だくみとかして人を騙すようには見えない……」

「だけど　っ」

首を傾げて言う七海の声に被さって、私は悲痛な声を上げる。

「そうとしか思えないよ。奏には好きな人がいるって言ってたんだよ？　それなのに私に好きだとか言ってキスするなんておかしい

……」

心が張り裂けそうな悲鳴のような声で言った私を、七海が真っ正面から見据えてくる。私はなんだか胸がドキドキとして、背筋がざわざわする。七海はふうーっと大きなため息をついて俯き、上げた顔には複雑な笑みを浮かべていた。

「辰巳君のこと　好きなんでしょう？」

呆れた様な口調で七海が言い、ずっと私にハンカチを差し出した。ラベンダー色の四隅に刺繍の施されたハンカチ。見覚えのあるそのハンカチを見つめ、七海を見上げる。

「れい、泣いてる　秀先輩のこと話す時はそんな顔しなかったね。好きに…… なっちゃったんだね、辰巳君のこと」

七海に言われてはじめて、自分が泣いていることに気づく。差し

出されたハンカチを受け取って、目元を拭う。
私が落ち着くのを待って、七海が苦笑する。

「ずっと悩んでたのは辰巳君のこと？ ブルーベルに行かないって
言ってたのも辰巳君に会いたくないから？」

私は喋ったら、また涙がこぼれてきそうで、頷くだけで返事をす
る。

「悩んでるなら、私がいつでも話聞くし相談に乗る。でも、もやも
や悩んでるだけじゃ何も解決しないんだよ？ 怖くつてもさ、本人
にちゃんと聞いてはつきりさせた方がいいよ。何か事情があったの
かもよ？ ねっ、辰巳君に会いに行きな」

諭すような静かな七海の声に、目元をハンカチで押さえる。その
裏側で涙が溢れてくる。私は小さく頷いて、決意を固める。
はつきりさせる。

ブルーベルに行くわ

第22話 センチメンタルジャーニー

どうしてこう神様はいじわるなんだろうか

やっと決心して奏に会いに来てみれば、奏はバイトを辞めた後で連絡が取れなくなってしまった。

なんで辞めたのか聞いたのだけど卯月さんは理由までは知らないっていうし、奏に会うために声をかけた時は平気だったけど、男性苦手意識がうずうずと顔を出してそれ以上卯月さんと話すことは出来なくて、そそくさとブルーベルを後にした。

喫茶店で働くのが夢だと言っていた奏がブルーベルを辞めた。なんで？ 思い当たる答えは一つ。私への復讐が終わったから姿を消した

再びどろどろとした感情が這い上がってきて、奏への不信任が募る。

奏から直接聞くまでは、奏を信じると決めたのに。

失恋の時に気分転換にゲーセンに連れて行ってくれたこと。真剣に自分の心配をしていてくれたこと。あの時の奏の優しさが嘘だとは思えなくて、奏の口から直接違うって聞けたらいいと思った。だけど。

奏が突然姿を消してしまって、もうなにを信じればいいのか分からなくなってしまった。

七海や合コンで奏と会っている桃花ちゃんと舞ちゃんにも確かめ

たけど、奏とアドレスを交換している人はいなかった。

学食でみんなでお昼を食べて、お昼時間が過ぎて三限目の講義がある桃花ちゃんと舞ちゃんを見送って、講義がない私と七海は学食に残っていた。

「未至磨に聞いてみようか？」

奏がブルーベルを辞めていて連絡が取れなくなったことを聞いた七海が提案してくれたのだけど、私は首を横に振る。

「ううん、いいや」

「なんで？ 辰巳君を合コンに呼ぶくらいなら未至磨は連絡先知つてると思うよ？」

不満そうに眉根を寄せる七海に、私は苦笑する。

奏の連絡先は知りたい。だけど、七海と未至磨君経由で聞くのは、なんだか奏のことを詮索しているみたいで嫌だった。せめて私が未至磨君に直接聞ければいいのだけど。そう考えて、ある人のことを思い出す。

「ほんとに 聞かなくていいの？」

「うん、ちょっと心当たりがあるから、そこを当たってみるね」

そう言って、私は席を立った。

ブルルルル……

規則的な機械音に、どんどん鼓動が速くなっていく。

人見知りの私だけど、電話も苦手……

顔が見えないんだから、直接話すよりはましでしょって思われがちだけど、顔が見えないと言葉だけから相手の真意を計らなくちゃいけないくて、すごくときどきする。

『もしもし？』

突然聞こえた男性の声に、大きく胸が跳ねる。

『もしもし？ れいちゃん？』

少年っぽいおどけた口調に、間違いなく電話をかけた相手に繋がったことを知って、胸をなでおろす。

「あの……隼人さんですか？」

『そうだけど、なに？ 間違えて俺にかけちゃった？ れいちゃんから電話でびびったんだけど……』

「えっと、間違いじゃないです。隼人さんにちよつとお聞きしたいことがあつて」

私は胸元で拳を作り、決意の代わりにぎゅっと力を込める。

「辰巳さんの連絡先を教えてくださいんですが」

電話をかけた先は隼人さん。初対面でからかわれて印象最悪で、合コンの時もなんだか軽いノリについていけないし、危うく迫られてキスされそうにもなったりしたけど……

去り際のすまなそうにした隼人さんの顔を思い出して、悪い人とは思えなかった。

もちろん、あの時はビックリしたし、強引さに戸惑ったりしたけど、奏のことを直接聞けるのは隼人さんだけだったから。

合コンでアドレスを交換したものの、その後一度も連絡を取っていないのに、こんなこと聞くのはどうかとも思ってたけど、隼人さんに聞く以外、いい方法が思いつかなくて

『いいよ、奏のアドレス教えても。ってか、あんなに仲良さそうに見えて知らなかったことにビックリ。でも交換条件ね。俺と一日デートしよう。そしたらアドレス教えてあげるよ』

にやりと不敵な笑みを浮かべた様な口調の隼人さんに 実際は電話越しだから表情は分からないけど、私はその交換条件を飲むことにした。

「いやー、れいちゃんから電話かかってきた時はほんとビックリ。ほら、合コンの時に俺ちよっと酔ってて悪ふざけが過ぎたっていうか」

壁際に追い込まれ、無理やりキスをしようとしたのを悪ふざけの一言で片づけてしまう隼人さんには苦笑するしかなかったけど、今日会って最初に謝ってもらってるから、路地でのことはなかったことにしようと思ったの。

「いいですよ、もう謝ってもらったし……」

「でもさ、俺に怒ってブルーベルにしばらく来なかったんじゃない

の？」

映画館に併設の喫茶店、丸テーブルを挟んで向かいに座る隼人さんが上目使いに私の顔を覗きこむ。なんだか子犬が怒られて耳を垂れ下げしょんぼりしているみたいな顔をされて、私のが悪いことしてるみたいな罪悪感が押し寄せる。

「えっと、違いますよ？ ブルーベルに行かなかったのは」

奏を避けてたからだけど。

「ずっと風邪気味だったのと、夏休みの課題が終わらなくて忙しかっただけです」

「そうなんだ？」

その一言でぱっと顔を輝かせて、きらきらと瞳を輝かせる隼人さんを見て、なんだか脱力してしまう。

デートなんて言われたから、どんなとこに連れて行かれるのかと思えば、普通に　　といつても、私にとってこれが初デートになるのかな？　　映画見て、喫茶店でお茶して、この後はぶらぶらウインドーショッピングの予定らしい。

人見知りだし男性が苦手な私は、数回話しただけの隼人さんと一日一緒に過ごして平静でいられるかどうかすごく不安だったけど、なんのことはない。隼人さんはちょっとちゃめっけがあるけど普通に良い人で、いままで男性と一括りにして苦手意識を持っていたことが申し訳なくなる。

「じゃ、行こうか？」

そう言つて席を立つた隼人さんは、あの時のように自然に手を握つて私の半歩前を歩きだす。

大きな手に包まれた自分の手を見て心臓がドキドキと鼓動を打つけど、こんな時にも考えてしまうのは奏のことだった……

隼人さんの手は大きくて少し硬くてごつごつしている。だけど奏の手は指が長くて綺麗ですべすべの肌だった。

映画館を出て、駅の反対側にあるショッピングモールに入りぶらぶらと歩く。

時々、隼人さんが興味の惹かれたお店に私を引っ張って行つては帽子や眼鏡を試着したり、CDショップで視聴したりした。

このまま普通に楽しい一日が終わるはずだったのに、視界の端に探していた人影を見つけて振り返る。

横顔だけど、間違えるはずがない。通った鼻筋、長身、それからなによりもさらさらの黒髪をハーフアップに結んでいるのは 奏に違いなかった。

奏がいた。こんな近くにいた

そう思つた次の瞬間、私は見てしまったの。

お店から出てきた綺麗な女性が奏に駆け寄り、奏が何か話して見たこともないような笑みを女性に向けているのを

ちくんと胸に何かが突き刺さる。

ああ……きつとあの人が奏の好きな人なんだろうな……

胸の痛みに 奏を好きだと言う自分の気持ちに気づいた瞬間、私の恋は終わってしまった。

第23話 届かない一等星 月の番人

ベッドに寄りかかって天井を見上げた私は、携帯の画面に映し出された番号を見つめて大きなため息をつく。

「はあ〜……」

パチンと鈍い音を立てて携帯を閉じると、立ち上がりながら側に置いてある鞆に放り投げて鞆を拾い上げる。スカートの皺を伸ばして、壁付きのハンガーからスーツの上着を外して袖を通し、その上に黒のトレンチコートを羽織る。

季節は秋から冬に移り変わろうとしていて、上着なしでは寒い日が多くなってきた。

今日は天文研究部歓送会。柏駅と豊四季駅の間にある料亭ときわで行われ、送る側の一・二年はスーツなのだ。

七海いわく文化会なのに体育会みたいなノリみたいで疲れるというけど、天文研究部を作った第一期の部長さんがこういうノリが好きだったみたいで、以後代々受け継がれている伝統だったりする。

まあ、年に何回もあるわけじゃないし、部活というよりもサークルのくくりになる天文研究部はこういう時でもない全員が集まることがないから私は好きだけど。

部屋を出て学校に向かって歩き出した私は、コートの上から巻いたストールに顔をうずめる。もう日が暮れかかっている、顔にかかる風がひんやりと冷たい。西の空を赤く染める夕陽がセンチメンタルな気持ちにさせる。

結局 隼人さんとの一日デートの終わりに奏の電話番号とメールアドレスを覚えてもらったのに、連絡することは出来なかった。

奏がなんで私にあんな嘘をついたのか。どうして同級生だと黙っていたのか。いろいろと聞きたいことはあったけど、なんだかすべてがどうでもよくなってしまった

もし奏に何か事情があったのだとしても、奏が私に好きだと言った言葉は嘘で　その唯一の真実に胸が切なく締め付けられる。

奏にはちゃんと好きな人がいて、その人に愛おしそうに笑いかけと一緒に歩いているのを見てしまったから。その時の光景を思い出して、視界の端ににじむ涙を誤魔化すように俯き、道路を歩く人とすれ違う。

奏に好きだと言われて心が揺さぶられたのが、奏を好きだからじやなかったら良かったのに

自分の気持ちに気づく前だったら、こんなに傷つかないで済んだのかもしれない。

今更そんなことを考えたって、好きになっちゃった気持ちはどうしようもないのに、心が痛いって叫んでいてどうしようもなかった。

こんなに心が痛むのは　信頼していた奏に裏切られたからじゃない、奏の言葉が嘘だったから悲しかったんだ。かき乱された心が切なく痛んで、溢れてくる涙を必死に堪えて唇とぎゅっと噛みしめる。

後悔してるわけじゃない

例え、好きだと言った言葉が嘘だったとしても、失恋した私を連れ出してくれた優しさや頑張ったねって言ってくれた奏の強さが嘘だとは思えないから。

奏の優しさに慰められたのは事実で、奏のおかげで秀先輩への気持ちに一区切りつけられた。

復讐のために近づいたのだとしても、奏のすべてが嘘だったとは思えなくて、好きにならなければ良かったなんて思わない。

復讐されたことに気がつかずに奏のことを好きになっちゃうなんて　私、なんてバカなんだろう。

一人、ストールの下の口元に苦笑を浮かべて泣き笑う。

だけど、これがきつと好きって気持ち。自分の意志とは関係なく、気づいたら好きになっていて、その人のことを考えるだけで胸がほかほか温かくなって、そして切なくしめつけられる

裏切られた悲しみ。失恋の痛み。今はまだ、すべてをなかつたことには出来ないけど、いつか奏と再び出会う時には、笑顔でまた会えたらいいと思う。

長い時間をかけてゆつくりと、ちょっとはみ出した気持ちが友達の好きに戻る時にはきつと笑顔で会えると思うから

校門をくぐり、すぐ横にある部室棟に向かう。校内は土曜日で生徒の姿はほとんどなく、静けさに包まれていた。部室棟に着くと、開けはなたれた軽音部が扉から楽器の音が聞こえてくる。冷たい空気を振動する音がどこか寂しげで、胸がくすぐられる。

細長い部室棟を進み、中央の階段を登って二階にある天文研究部に行く。ドアノブに手をかけて鍵が空いていることに気づいて、首をかしげる。

今日は十八時から歓送会で、今は十六時を過ぎたところ。一年生と手伝いのある二年は十七時に料亭ときわに集合で、この間買出しした荷物を取りに来た私以外にこの時間に部室に人がいるなんて思いもしなくて不審に思う。

ゆつくりとドアを引きあけると、入ってすぐ右側の椅子に座っている秀先輩と視線があって、ドキンと胸が高鳴る。

「えっ……秀先輩……？」

私の小さな驚きの声が聞こえたのか、秀先輩はくすりと笑い、手に持っていた雑誌を閉じる。

「やあ、羽鳥」

ふわりと薫る優しい笑みを浮かべた秀先輩を見つめながら部室に入り、後ろ手で扉を閉める。

「こんにちは。秀先輩……どうして部室に……？」

「ん？ ああ、俺はさっきまでゼミがあつたんだ。教授が来週出張でいないから土曜なのに講義で学校」

肩をすくめて秀先輩は言い、苦笑いを浮かべる。

「で、歓送会までまだ時間があるから部室で暇つぶし」

そう言つて持ち上げた本は、部室に置いてある天体関係の雑誌。去年までは、今の四年生が自費で買っていたものを部室に置いていたのだけど、その先輩が引退した後も雑誌を読みたいと言う意見が多くて部費で購読することになった。

「そうなんですか、私は荷物を取りに寄つたんです」

奥の棚を指さして、一緒に買出しに言つた時に秀先輩が持つてくれた買い物袋を取り出す。

右手に手提げ鞆と大きな紙袋を一つ、左手に二つ持つて部室を出て行こうとすると、秀先輩に呼びとめられてしまう。

「待つて、俺も一緒に行くよ。その荷物は一人では持てないだろ？」
「えっ、でも、まだかなり時間ありますよ？」

一人で持つていくつもりだったからきよんと首を傾げて尋ねた私を、秀先輩はきまり悪そうに見て唇を動かす。首をかきながら一

度落とした視線をあげて、その瞳を複雑な光を宿して立ち上がる。

「いいんだ、羽鳥を待っていたから……」

掠れた小さな声だったけどちゃんと聞こえて、秀先輩の言葉に胸が大きく跳ねる。

「秀先輩　？」

戸惑いがちに見上げると、切ない笑みを浮かべた秀先輩が無言で私に近づく。左手に持っていた紙袋二つをさりげない仕草で取り、私の頭越しに部室の扉を押しあけて微笑む。

「行こうか　？」

私は静かに頷き、部室を出る。

待っていた　そう聞こえたのは間違いじゃなかったのか確かめなかったけど、なんだか秀先輩の切ない表情に胸が締め付けられて聞き返すことが出来なかった。

学校を出て駅まで歩き、電車に乗って豊四季駅から料亭ときわに向かう。その間、秀先輩とはたわいもない話をして、あっという間についてしまった。

部室で見た切ない顔が見間違いだったかのように、秀先輩は何事もなかったようにいつものふわりと和やかな笑みを浮かべているし。本当に気のせいだったかとも思ったのだけど。

「すみませんっ！　歓送会的主役に荷物運びなどさせてしまっ……」

料亭ときわの入り口よりも少し外れたところで、持ってもらって

いた紙袋を受け取った私は恐縮して何度も頭を下げる。

荷物を持ってもらったことだけでなく、ときわまで来たのに中は準備中に入れず、時間を潰すために駅に戻って十八時頃にまた来ると秀先輩に言われて、迷惑ばかりかけてしまったことに本当に申し訳なくなる。

「本当にすみません……」

「いいんだよ、俺が運ぶって言ったんだから羽鳥が謝ることない」

「でも……」

「それより、そろそろ中に入らないと、それ、待ってるんじゃない」

そう言って、体の前に回した両手で持つ紙袋三つを視線で指す。

「あつ……」

私はぱつと顔をあげて、後方にあるときわに視線を向ける。それから秀先輩をまっすぐ見上げ。

「荷物持って頂いてありがとうございます、じゃあ準備してきますね」

「ああ」

お辞儀をしてから秀先輩に背を向ける。紙袋を左右の手に持ち、ときわの入り口をくぐろうとした時

ぐいっと腕を掴まれて後ろに引く張られるから、私は驚いて後ろを仰ぎ見る。

息が触れそうな距離に秀先輩の端正な顔があつて、甘やかな眼差しがまっすぐに私をみつめていて、胸がきゅっとなる。

「羽鳥」

呼びとめられたのは数秒の出来事なのに、永遠のように長く感じる。

「歓送会の後に話があるんだ」

濃くなり始めたブルーの空には白い下弦の月が浮かんでいた。

第24話 届かない一等星 てのひらの星

「羽鳥、好きだ」

一瞬、なんとされたのか頭がついていけなくて呆けてしまったのだけど、私をまつすぐに見つめる秀先輩の瞳があまりにも真剣で、わずかに頬を染めてはにかむ笑顔はいつもの秀先輩よりも子供っぽく感じる。

歓送会の後に話がある　そう言って呼び出した秀先輩の用件は、思いもかけないものだった。

歓送会から二次会へと向かう途中、七海には後から二次会に行く　と告げて、通りかかった線路沿いの公園に秀先輩と二人で向かう。夜の公園には誰もいなくて、電灯に照らされた遊具がきらめく。遊具の横を通り過ぎ、空き地の横に並ぶベンチの側で立ち止まった秀先輩が振り向いて、長い影が伸びる。

漆黒の夜空に浮かぶ下弦の月は静かな音色を奏でている。

長い沈黙の後、秀先輩の唇がゆっくりと動く。

「今さらと思うかもしれないけど、羽鳥が俺のこと好きだって言うてくれてすごく嬉しかった。妹みたいに思っているから今までの関係を続けたいって言ったのは俺だけど、部も引退して先輩後輩としてのままだんだんだん会うこともなくなって　そう考えたらそんなのは嫌だった。もつと羽鳥のことを知りたいし、側にいたい。好きだって気づいたんだ」

まさか好きだと言われるなんて思ってもみなくて、体中に甘い痺れが広がって嬉しくて涙が溢れてくる。

「秀先輩……」

滲む視界に大好きな秀先輩が映る。

「羽鳥はもう俺のこと好きじゃないかもしれないけど」

きまり悪そうに目元を細める秀先輩に、私は思い切り首を左右に振る。

そんなことない。秀先輩のことは今でも好きで、大好きで。ただど

胸におしよせる感情に言葉が上手く出てこなくて、ぎゅっと唇をかみしめる。

「羽鳥？」

その時の私はどんな顔をしていたのだろうか。秀先輩は心配そうに私の顔を覗きこみ、ぽんぽんと大きな手で頭を二度なでると優しく切ない笑みを浮かべる。

「俺のこと……まだ好きでいてくれてる？」

静かな問いかけに、私は縦に首を振る。

「俺と……付き合ってくれる？」

少しの間をおいて、小さく横に首を振る。

秀先輩が好き。だけど心を締めるのは奏の存在で

でも奏への気持ちは諦めなければいけないものだ知っているから、まだ恋とも呼べないこの小さな気持ちにちゃんと向き合うだけの時間が必要で。中途半端な気持ちでは、秀先輩と付き合うなんて出来なかった。

秀先輩は複雑な笑みを浮かべて、首をかしげる。

「俺に……見込みはある？ 先輩とか後輩とか関係なく、これから一緒に出かけてくれる？」

見込みとかは分からないけど、純粹に、秀先輩と一緒に出かけたと思った。約束していた映画はまだ見ていないし、秀先輩と一緒に楽しいと思ったから。私は秀先輩に笑いかける。

「はい」

私と秀先輩は以前よりもメールや電話のやり取りが増えて、休み時間が合えば学校で会い、休みの日には一緒にでかけるようになった。

距離感先輩後輩の関係とあまり変わっていないかもしれないけれど、サークルで顔を合わせなくなった代わりのように二人きりで会う時間が増えて、徐々に二人の関係は変わっていったのかもしれない。

先輩は私が保留にした答えについて催促するようなことはなくて、その話に触れることもなかった。

奏のことやいろいろな相談に乗ってもらった七海には、秀先輩に告白されたことをすべて話した。

買出しに付き合ってもらったと知った時の七海はもつと積極的になるべきだって煽ったけど、今回はそんなふうには言わなかった。ただ静かに話を聞いて、氣遣わしげに私を見つめる。

「れいが決めたことなら、私が口出しすることじゃないし。それに今のれいはしっかり前を見てる。それならいいと思う」

つてはにかんだ笑みを浮かべた。

前を向いているのかは自分では分らないけど、以前のように奏のことであつたのだ悩むこともなくなつて、秀先輩と過ごす時間は穏やかに過ぎていく。

秋風に舞う色づいた葉がカサカサと音を立てて、胸が疼く時もある。結局、奏に何も聞けなくて後悔というか心残りはある。ただ、いつか、かならず奏に会う時があるような気がして、それが何年後かは分らないけどその予感に胸が跳ねる。

秀先輩のことは好きだけど、奏のことも気になって。中途半端な気持ちは嫌だとも思いつながら、友達以上恋人未満の関係が一月半続き、季節はすっかり秋から冬へ。街はクリスマスカラーに染まっていた。

「あゝ、やっと終わったあ……」

二限終業のチャイムの音に重なって、七海が机に伏して脱力する。それを見て横に座っていた桃花ちゃんと舞ちゃんが苦笑する。

「これで明日からは晴れて冬休みかぁー」

「今年についてないね、せっかくの祝日で三連休なのに月曜日の振り替えて講義なんて。祝日が増えてもこれじゃ意味ないよね」

桃花ちゃんに同意して私は頷く。

今日は十二月二十三日、世間は三連休でお休みムードなのに、うちの大学は普通に講義がある。クリスマス前ということもあって、今日の講義に不満な人は多いと思う。

「あつ、じゃあ、私は行くねっ」

慌ただしく教科書を鞆に閉まって立ち上がったのは舞ちゃんと桃花ちゃん。

「えっ、今日はお昼食べて行かないの？」

「ごめん、これから約束あるんだ。またね」

尋ねた私に早口で答えた舞ちゃんは、扉に向かって歩き出す。その後ろ姿はステップを踏んでいる。

未だに机に突っ伏したままの七海は、顔だけを私に向ける。

「舞は彼氏と二泊三日で旅行なんだって。桃ちゃんは実家に帰るみたいよ」

「へえー、そうなんだ。今講義終わったばかりなのに、みんな多忙だね」

ぼんやりとそんなことを言うと、きつと眉を吊り上げた七海に叱責される。

「れいだったら、なにとぼけたこと言ってるのよ！ 当たり前でしょ、明日はクリスマスイブ！ 彼氏持ちはみんな忙しいのよっ！」

「七海も忙しいの？」

机をばしばし叩きながら力説する七海の迫力に気圧されながらも
んとなく聞き返してしまつた私は、鋭い視線で一睨みされて顔を強
張らせる。

「……っ」

無言の七海の返事にしまつたと思い、だけど言つてしまつたこと
は取り消せなくて冷や汗が額に溢れてくる。

「えっと……」

七海は相変わらずブルーベルに一人で通っているらしいが、卯月
さんの反応はいまいち良くないらしい。

何か言わなければと思つて口を開くけど、何を言えばいいのかさ
っぱり思いつかなくて、結局口を閉じる。

そんな私を、机に伏したままの七海が上目使いに見上げ、真摯な
瞳を向ける。

「他人事みたいに言つてるけど、れいはデートじゃないの？」

「えっと、秀先輩とは明日会つ約束はしてるけど、私のはデートと
いうか……」

「ごによごによと口ごもつて答える私を見て、七海は体を起こす。

お昼時間ということもあり、講義室の中にはすでに私と七海以外
の生徒はいなくなっていた。

「付き合つてなくても、二人で出かけるならデートだって、言つた
じゃない」

抑揚のない声で言った七海の言葉に、私は胸がひやりとする。

「ちょうど私も先輩も見たい映画があったからお台場に行くことになったただだよ……」

数回瞬いて、困ったように笑う私に、七海ははっきりと言い切る。

「クリスマスデートでしょ」

その言葉がずきんと胸に突き刺さる。

秀先輩がなにも言ってこないからって、ずっとこのままでいい訳がないことは分かっている。

二十四日が近づくにつれて、あいまいな私と秀先輩の関係をはっきりさせなければいけないとひしひしと感じて辛かった。

中途半端は嫌だと思いながら、秀先輩の優しさに甘えて。付き合えないとか思いながら、秀先輩と二人で何度も出かけて期待を持たせて、自分の気持ちに気づかないふりをして

秀先輩と両思いになって付き合うなんて、ずっと夢みたいなことだと思っていた。その夢が目の前にちらついているのに、私は見えない影に焦がれてしまう。会いたいと思ってしまふ気持ちを、どうしようも出来なかった

第24話 届かない一等星 てのひらの星（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂けると嬉しいです。

第25話 届かない一等星 雪の降る日には

窓から差し込む太陽の光はまぶしくて、部屋の中はきらきらと輝いているように見える。まるでこれから初めてのデートに行くような胸の高鳴りに、知らず頬が綻んでしまう。

鏡の前に立った私は、念入りに服装をチェックする。もう何日も前から悩みに悩んで今日のコーディネートを決めていたのにも関わらず、今になってどこかおかしくないと気になってしまう。

白地に小花柄のプリントされた膝丈のワンピース。胸元にはオフホワイトのベルベトリボンがまかれている。持っている服は動きやすいズボンばかりだし、お洒落にもそれほど興味がなくて可愛い服なんてほとんど持っていない私だったけど、今日のために七海がよく行くお店に連れていってもらって服を買ったのだった。

デートじゃないとか言い続けながらも、クリスマスイブにお台場に出かけると思うと、うきうきせずにはいらなかった。

何度も鏡で確認して、額にかかる髪の毛を直す。

「うん、バッチリ」

鏡の中の自分に笑いかけて、私はニットのロングカーディガンを羽織り、玄関でブーツをはく。

ずっと言えなかった気持ちを言う決めた

決意を胸に、私はしっかりと顔を上げて駅に向かった。

約束の時間よりも少し早くついてしまって、私は時間を確認した携帯を鞆の中に戻す。

待つのは好きだけど、待っている間そわそわして落ち着かない。
駅で待ち合わせするのは苦手だから、今日は映画館の前にある広場で待ち合わせ。

近くには私以外にも待ち合わせをしている人や、カップルで写真を撮っている人がいて、後ろを振り仰ぐ。そこには本物のもみの木のクリスマスツリーが、天に向かうように伸び、一番上にはオレンジ色の星が壮麗に輝いている。夜になり、飾られた色とりどりのガラス玉がライトアップされるともつと綺麗なんだろうなと想像する。ぴゅーっと吹きこむ冷たい海風が頬をなでていき、体を震わせる。今日はうんと寒くなるって天気予報で言っていたから着こんできたつもりなのに、寒くて震えが止まらない。

見上げた空はどこまでも透きとおるブルースカイ。真上にのぼった太陽があふれんばかりに日差しを振りまいているのに、風が強く西の方から雲が広がって来る。

うつすらとした雲がたなびいて青空に模様をつける。その様子を眺めているのも楽しくて、目元を和ませて空を仰ぎ、口元に当てた手にはあーっと息を吹きかける。

これからのことを考えたら笑ったりできる余裕はないのに、なんだか胸がふわふわと心地よい。良いことが起きそうな予感がする。その瞬間。

わぁーっとため息のような声が響き渡る。

緑の葉を広げる樹木クリスマスツリーを見上げていた私は、そこにちらちらと白いものが舞うのを見て息を飲む。と同時に、この時期に似つかわしくない大好きな香りを感じて大きく鼓動がうつ。

大きく息を吸い込めば爽やかに広がるラベンダーブルーの薫りに心が締め付けられる。先程感じた予感がどんどん大きくなって、ぱつと振り向くと、そこにいたのは

きりつとした二重、通った鼻梁、薄く形の良い唇、肩につくくらの長さのサラサラの黒髪。間違えるはずがない、奏だった。

最後に会ったのはまだ暑さの残る九月、三カ月ぶりに目の前に現

れた奏が一瞬幻ではないかと思ってしまふ。だけど、私を見る奏の瞳が大きく揺れて立ち止まるように動きがゆっくりとなって、幻なんかじゃないんだって思った。

胸に不安と疑念が一気に押し寄せて引いていき、ただ会えてうれしい気持ちだけが残る。

「奏……」

気持ちのまま名前を呼んだのだけど、立ち止まるようにゆっくりだった動きがその瞬間、再生されたように動きが速くなり、奏は挨拶も交わさずに私の真横を通り過ぎて行ってしまった。

えっ

確かに視線があつたはずなのに、無視されて、胸がきゅっと痛む。不覚にも泣きそうになって誤魔化すように俯いた時、鞆の中の携帯が鳴りだす。

慌てて手の甲で目元を拭って携帯を取り出して通話ボタンを押す。

「はい、もしもし……」

『あつ、羽鳥？ ごめん、電車が遅れててまだ駅なんだ』

慌ててたから誰からの電話かも確認するのを忘れてて、だけど受話器の向こうから聞こえる優しい秀先輩の声を聞いて、なぜだか涙が溢れてくる。

「秀先輩……」

震える言葉を切ってもう一度目を拭い、から元気に明るい声を出す。

「そんなんですか。私はもう待ち合わせ場所にいるんですけど、待

つてるのでゆっくり来て下さいね」

『ありがとう。だけど外で待っているのは寒いだろ？　今日は特別冷えるからな』

「そうですね、今日はすごい寒いですよ。あつ、さっき雪がぱらつと降ったんですよ」

雪のことを思い出して、くすりと笑う。雪が降ったのは一瞬でもうやんでしまつて、ホワイトクリスマスって言えるほどじゃないけど、雪が降ったことが心を弾ませる。

本当は胸が切なく痛いのに、笑えるような気分になんてくれた雪に感謝する。

『へえ、そうなんだ、俺も見なかったな。今地下鉄のホームだから無理だけど』

「また降るといいですね」

『ああ。そっちに着くまでまだ時間かかるから、映画館の中で待ってて。いいね？』

「はい」

優しい響きで言った秀先輩に頷き返して、クリスマスツリーに背を向けて広場から続く階段を登り始める。

『じゃあ、電車来たから切るね』

「はい」

『またあとで』

ふわりと笑う秀先輩の声が耳にくすぐったくて、甘い痺れに襲われる。

「はい。待ってますね」

電話を切った途端、直前の苦しい気持ちが襲いかかって、携帯を握りぎゅっと唇をかみしめる。

秀先輩と話しただけでこんなに温かい気持ちになるのに、奏の事を思い出して、奏のことだけで体中すべての感覚が囚われる。

切なくて苦しくて、こんなに好きな気持ちが溢れてきて、泣きそうだった。

私は涙を堪えて、わざとらしく顔を上げて階段を登る。その瞬間、二の腕を後ろから強い力で引っ張られて、私はバランスを失って階段を踏み外して後ろに倒れかかり、奏の胸に抱きとめられた。

「どこ行くんですか？」

耳元で低い声がして目を上げると、そこに息が止まりそうなほど綺麗な奏の瞳があつて、大きく胸が跳ねる。

私をまっすぐにみつめる奏の瞳は強い光を帯びていて、冷たく、そしてあまりにも美しく、吸い寄せられてしまいそうだった。

「えっ……奏……？」

いきなりだったから、状況がつかめなくて戸惑いがちに奏の名を呼ぶ。

背中に間での男らしい厚い胸を感じて、それが優しく私を受け止めていて、心が揺さぶられる。それから、無視されたばかりだということを思い出して、苛立つ感情が湧きおこる。

自分の心を落ち着かせるようにぎゅっと目を瞑って、それから。

「……っ、奏には関係ないでしょ」

感情的にならないように言うてから、腕をつっぱって奏の胸の中

から体を離す。掴まれたままの腕をといて階段を登ろうとしたのだけど、奏の手にぎゅっと力が込められて、痛みに眉間に皺を寄せる。

「秀先輩と会うんですか　？」

なんで奏がそのことを知っているのか驚いたけど、さっき視線があつた時は無視して素通りしたのに、自分の質問を押しとおそうとする強引な奏に腹がたつ。

「そうよ、秀先輩とデートなのっ！」

私はキツと顔を上げて奏を睨み、心を痛めながら叫ぶ。

本当はデートじゃないし、奏に話したいことや聞きたいことがあるのに、苛立つままに言っていた。

ずっと掴まれていた二の腕から奏の手が離れる。もう奏に掴まれていないのにそこにいる感覚に胸が疼く。それを隠すように反対の手で二の腕を掴んで、俯いて唇をかみしめる。苦しくて切なくてやるせない。

何も言ってこない奏に焦燥感が募り、後ろめたくて居心地が悪い。沈黙が重苦しくて、早く奏の前から立ち去りたかった。

「急いでるから」

掠れた小さな声で言うと同時に、奏の返事を待たずに階段を登るだけ。

次の瞬間、後ろから強く奏に抱きしめられて、瞠目する。

「れい、好きだ　」

ふわりと肩から回された奏の腕は力強く、優しくて。

三度目になる奏の告白の言葉が胸に沁みて、どうしようもなく心が震えた。

やんだと思っていた雪がはらはらと舞い落ちて、視界を白く濁らせた。

第26話 届かない一等星 ただひとつの想い

思いもかけない告白に頭の中は真っ白。好きだと言われるのは三度目で、驚きよりも信じられないという負の気持ちがまさってしまっ
て、詰らずにはいられなかった。だって。

「奏には好きな人がいるでしょ？ それなのにどうして私にそんなことを言うの」

苛立ちの中に切なさを感じさせて、声が震えてしまう。

「だから俺が好きなのはいいなんです」

すっぽりと奏に包まれるように抱かれたまま、耳元で甘やかな声
でささやかれて、体中に奏の熱を感じて、頭がどうにかなくなってしま
いそうだった。

私も好き そう言っただけで済ませようになる気持ちを押しさ
えて、ぐっと唇をかみしめる。

だって、好きだなんて言葉、信じられなくて……

私は振り向いて、とんと奏の胸に頭をついて、胸を押しつける。

ふいの私の行動に奏はきょとした顔を向け、青空のように澄ん
だ瞳を私に注ぐ。

「れい……？」

痛々しいくらい静かな声で奏に名前を呼ばれて、ぴくんと肩を
揺らして、頭を左右に振る。

「分からない　奏の言うことが分からないよ。好きだっていうのは高校の時の話？　どうして今更その話をするの？　どうして再会した時に同級生だって言わなかったの……それは言えなかったから？　私は……男の人が苦手で、だけど奏は違って初めてできた男友達だと思っていた、信賴していたのに。奏には好きな人がいるって言っていたでしょ。あのラベンダー色のハンカチの人、奏がその人と一緒に歩いているのを見たの」

「えっ……」

「あのとき高校の時、何も言わないで逃げたから　？」

見つめた先に、奏の動揺に大きく揺れる瞳があつて、胸が締め付けられる。そんな苦しそうな顔をしないでほしかった。

私は泣き笑い、奏に告げる。

「私は奏が好きだよ……よかったね、これで復讐が果たせて」

言つと同時に目の前にある奏の胸を力一杯押しのけて、駆けだした。無我夢中で階段を駆け上がり、陸橋を走って映画館が併設されているシヨッピングモールに駆けこむ。

奥へと延びる通路を小走りで進み、頬を伝う涙をぬぐった時、携帯がなっていることに気づく。

「はい……っ」

『羽鳥？　今どこ？　俺、映画館の前にいるけど、いる？』

「……っ、すみません、もうすぐ着きます……」

鼻をすすって、走るスピードを上げる。映画館の入り口が見えて、その前で辺りを見回している秀先輩の姿を見つけて、ぶわっと胸に熱い気持ちが入み上げる。

秀先輩も私に気がついて、ふわりと優しい笑みを浮かべて、片手を上げる。

「羽鳥」

「秀先輩」

すぐるような思いで秀先輩の側に駆け寄った時、後ろから強い力で引き寄せられる。

「っ!？」

振り仰ぐと、青のように澄んだ真剣な奏の瞳が目の前にあって、息を飲む。あまりに真剣な瞳に、目を瞬いてみいつてしまう。

「羽鳥……?」

戸惑いがちな秀先輩の声にはっとして、奏と秀先輩の顔を見比べる。

奏は私を見ずに、まっすぐ秀先輩を見据えると、瞳の色を濃くする。

「秀先輩……ですか？ すみませんが、彼女に用事があるのでちょっとお借りします」

えっ？

奏の言葉に反応出来ないで呆然としている秀先輩の前から、私を引っ張ってずんずん歩きだしてしまう。

「あっ、やだっ。なにするのよっ！ 奏、離して。今日は秀先輩と約束してた……」

私の必死の抵抗も聞き入れてもらえず、奏は無言で歩き続ける。だけど、最初は強引に私の二の腕を掴んでいた手が、いつの間にか手のひらを優しく包んで、私の歩調に合わせて歩いていることに気づいてしまつて、それ以上抵抗することが出来なかった。

説明もなしに秀先輩を置いて来てしまったことは気がかりだったが、奏がどうして私を追いかけてきたのか、どこに連れて行くかとしているのか、知りたかった。

いいかげん、すべてのことを、はっきりとさせたかったの。

ゆっくりと歩く奏に引かれて、私はなんだか無性に切なくなつて、静かに涙を流した。この涙がなんの涙なのか自分でも分からなくて、繋がれていない方の手で目元を拭う。

振り返った奏と視線が合い、泣いていることに気づいた奏が複雑そうに瞳を揺らし、静かな声で言った。

「すみませんでした、強引に連れ出してしまつて……ただ、どうしても話したいことがあつたから」

強引なのは今回が初めてじゃない

秀先輩に振られて泣いている私を連れ出してくれた時のことを思い出して、その時とかぶつて、皮肉気な笑みを浮かべる。

電車に乗っている間、私と奏は一言も話さないまま、どこに向かつているのかも分からなかったけど、次第に見慣れた駅に近づいていき、馴染んだ運河駅で電車を降りる。

空はすっかり薄雲で覆われてどんよりとしている。日射しがなくなつただけで、吹きつける風の寒さが一層強く感じる。

わずかに体を震わせると、繋がれていた手にぎゅっと力が込められて、半歩前を歩く奏の大きな背中を振り仰ぐ。

着いたのは奏のアパートで、以前来た時のようには戸惑わずに奏に促されて中に入る。

一体、奏の部屋で何を話したいのかは分からなかったけど、これで気持ちに整理がつくならいいと思った。

例えば、奏の好きな人についての話でも、私の思いが報われないものだったとしても、奏の口から真実を聞けるのならそれで十分だと思った。

お台場で奏と会った時は突然の出来事で頭に血がのぼって冷静に考えることは出来なかったけど、奏の口から真実を聞く　それが私の望みだったのだから。

洗われたように澄んでいく心に、奏に気づかれないように微笑をもらす。

もともと　今日は秀先輩に会った時に自分の正直な気持ちを伝えるつもりだった。秀先輩とは付き合えない　って。

秀先輩のことは好き、だけど、それと同じくらい　ううん、それ以上に奏が胸を占める気持ちが大きくなっていることに気づいてしまったの。

奏がどういっても私に好きだって言ったのか、他に好きな人がいるのに、何一つ奏のことを分らないのに、気がついたら強く惹かれていた。

奏のことを考えると苦しくて切なくて、涙が止まらない。秀先輩といると心がほかほかして楽しくて、大好きだなんて思える。それなのに、奏のことが好きでどうしようもなかった。

だから秀先輩とは付き合えない、奏への気持ちに決着をつけるまでは、秀先輩とは先輩と後輩の関係に戻りたいと伝えるつもりだった。

だって、奏はブルーベルから姿を消しちゃって、いつ会えるかもわからなくて、いつ決着をつけられるか分からないのに、待つと言った秀先輩の言葉に甘えるわけにはいかなかったから。

「ここに座つててください」

そう言つて、お台場からずっと繋いだままだった手を離れた奏が、ソファ―に私を座らせる。

奏は奥の部屋に続く三枚の引き違い扉を開けて、しばらくしてから戻ってきた。その手にはラベンダー色のハンカチを持つて。

私は差し出されたハンカチを見つめて目を瞬き、首を傾げて奏を見上げる。

このハンカチの持ち主　奏とデートしていた綺麗な女性のこと
が好きだと言われるとばかり思っていたら、奏の口から紡がれたのは予想もしていなかった言葉だった。

第27話 届かない一等星 紺碧の宝箱

目の前に差し出されたのはラベンダー色のハンカチ。奏の部屋に大切に飾られていた、奏の好きな人のハンカチ

「これ、ずっとれいに返そうと思っていたのですが、返せなかった俺のお守りだったから」

言いながら、ゆっくりとハンカチに口づけた奏は、甘やかな視線を私に投げかける。

「え？」

私はすっとんきょうな声をあげて、ぽかんと口を開ける。

「私の……ハンカチ……？」

何を言っているのか理解できなくて呆然とする私を、奏は目をすがめて訝しむ。

「気づいていなかったんですか……？」

そう言った奏の声は上ずり、戸惑いと驚きをにじませていた。

「これ、れいのハンカチですよ。中学の時、隣の席になった時に貸してくれた……本当に覚えて、ない……？」

空色の瞳が大きく見開かれて、それからくしゃりと顔を歪めて奏は手のひらで隠した。

私は手のひらに置かれたラベンダー色のハンカチをまじまじと見つめ、四隅の刺繍を見て、つい最近、七海が貸してくれたハンカチと同じものだ気づく。

あつ……思い出した。

中学の時、ラベンダー色のハンカチを見つけて嬉しくて即買いで、二枚買って一枚を七海にプレゼントしておそろいで持っていたお気に入り、のハンカチだということ。いつのまにかそのハンカチは失くなっていて、ハンカチを持っていたこともすっかり忘れていた。

「本当にこれ、私の……？」

自分でも忘れていたハンカチを奏が持っていたことが信じられなくて戸惑いがちに聞き返すと、奏は肩をすくめて私を見下ろす。ダイングチェアをソファアの側に引き寄せた奏は、長い足をもてあそぶようにして座ると大きなため息をついて、額にかかるさらさらの黒髪を大きくかきあげた。

「本当に気づいていなかったんですね、それでれいがなんであんなことを言ったのか納得がいきました……」

ため息のような小さな声だったから聞き取れなくて首を傾げたのだけど、奏はふわりと儂げな笑みを浮かべる。

「中学三年の二学期、席替えで俺とれいは隣同士の席になりました。その頃の俺は暗いダサいって女子にうつとうしがられて、それなのにれいは普通に話しかけてくれた。体育で擦り剥いた肘を手当てしてもらおうと保健室に言った時、れいがそのハンカチを貸してくれたんです。『これを使って』って。血がついて汚れるからって断

った俺に、大丈夫だから手当てした方がいって言ってくれました。たぶん、その時からずっと好きなんです」

奏は静かに目を伏せて、長い睫毛の影をその美しい瞳に落としながら、うつとるするほどあざやかに微笑んだ。

「高校入ってすぐに転校すると決まって、転校する前にどうしてもれいに気持ちを伝えたかった。けどなかなかタイミングが掴めなくて、ぐずぐずして、やっと言えたのは転校の前日であの時のことがずっと忘れられなかった。れいが初めてブルーベルに来た日、一目でれいだと気づいて会えたことが嬉しくて、だけど聞いてしまったから　れいが男性恐怖症になった原因が俺だって……だから話しかけたかったけど、話しかけられなくて。でもずっと視線はれいを追ってしまっていた」

そこで言葉を切った奏は、きまり悪そうに口元を手で覆って、ごによごにと言い訳っぽく話す。

「あの時　その、唇が当たってしまったのはわざとじゃなくて……すみませんでした」

そう言って立ち上がった奏は深く頭を下げる。その態度がすごく誠実で心に沁みる。

「会って最初に言うべきことだったのに、苦い記憶を蒸し返すことになってれいに嫌な思いをさせたくなくて　いや、こんなのは詭弁ですね。本当は俺が思い出してほしくなかっただけです。昔のダサイ俺なんて思い出さずに、俺を好きになって欲しかった。だから、れいが俺のこと同級生だと気づいていないことをいいことに、ずっと黙っているつもりでした」

「でも、七海には同級生だって言ったんでしょ……？」

七海に同級生だって言ったのは、私への復讐が終わって、もう気づかれてもいいと思ったからだとずっと思っていた。胸に抱えていた疑問を投げかけると、奏は片眉をあげてきらめく眼差しで私を見つめる。

「それは……このハンカチを見られて、れいが俺のことを思い出したと思っただですよ。まさかハンカチが自分のものだとも気づかないで、あらぬ誤解をされてるとは思ってもみませんでした……」

呆れたように言われて、その言葉が癪に障る。

「だって、失くしたと思っけてまさか奏が私のハンカチを持つてるなんて思わないわよ。それに奏はあの時、好きな人のハンカチだって言っけてたから私のだなんて思いもなくて あっ、そうよ。じゃあ、この前一緒に歩いてた綺麗な女性はだれなの？ あの人が奏の言っけてた好きな人じゃないの？」

なんだか頭が混乱して、自分で喋っけてても上手く状況を整理できなくて、痛む額に手を当てる。

「この前 つていつ頃？」

真剣な瞳にぎらつと光を反射させた奏にドキンとして、私は記憶をたどる。

「えっと、十月の初めの頃……」

顎に手を当てて考える奏は、それだけで絵になるほど綺麗で、た

め息が出るほど素敵だった。ぼーっと見つめしまった私は、ふと視線を上げた奏と目があってしまって、ドギマギする私を皮肉気な笑みを浮かべて見た。

「ああ、それは叔母ですよ」

「叔母さん？」

「そう。あ……虎沢オーナー分かりますね？ 彼は父の弟、俺の叔父にあたる人で、一緒にいた人はオーナーの奥さん。つまり叔母です」

「そんな……同じ年くらいに見えたのに」

本当に一緒にいた人がとてもじゃないけど叔母さんには見えなくて言っただけなのに、奏は目元を和ませてくすりと笑う。

「ああ見えて三十代です。それ、すみれさんに言ったらすごく喜びますよ」

慈しみにあふれた瞳で見られて、居心地が悪い。奏の言葉を疑う理由はなくて、すんなりと真実が心に広がる。

なんだか今なら何でも聞けそうで、もうこの際、聞けることを全部聞いてしまおうと思ったの。

「でも、どうして叔母さんと一緒に？ というか、お店辞めたって聞いたけど……」

眉根を寄せて尋ねると、一瞬、目を見開いた奏は、次の瞬間お腹を抱えて笑いだしたの。私は、馬鹿にされたように感じて、むっと頬を膨らませる。

涙にぬれた目を横に流して私を見た奏は、まだ笑いながら言う。

「どこで聞いたんですか、それ。辞めたんじゃない、ちょっとした休暇ですよ」

「休暇？」

予想もしていなかった単語に、私はオウム返しする。

「ええ、実は祖父母がイギリスに住んでいまして、久しぶりに顔を見せるようにと電話がかかってきたので、休暇も兼ねて一月半ほど行っていたんですよ。叔母と一緒に出かけていたのは、祖父母へのお土産を一緒に買いに」

オーナーと親戚だということにも驚いたけど、祖父母がイギリスに住んでいると聞いてさらに驚く。

「えっ……じゃあ、奏ってハーフとか？」

話がそれていることのも気づかずに尋ねてしまう。

「父方の祖父がイギリス人で、俺はクォーターってことになりますね。もともと小さい頃はイギリスに住んでいて小学五年からは日本にいたのですが、高校に入ってからすぐにまたイギリスに戻ることに。仕事の都合だから仕方ないのは分かっていますが、高校を卒業してからは日本の喫茶店で働きたくて叔父の店で雇ってもらっていたんです。父も俺が日本に来てからはまた違う国に仕事で行くことになって、ちょうどいいと思ったんでしょね」

苦笑した奏はそこで言葉を切って、甘やかなにきらめく視線を向けるから、ドキンとしてしまう。

「一緒にいたのは叔母で、俺が好きなのは……」

第27話 届かない一等星 紺碧の宝箱（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押して頂くだけです。

第28話 届かない一等星 愛しさのかけら

「俺が好きなのは 爽やかなフローラルの香りをさせたラベンダー好きの女の子。イギリスに行ってからもずっと忘れられないただ一人の彼女。ハンカチを見るたびに思い出して、あまりに好きすぎて彼女の好きなラベンダーの鉢植えを飾ったりして 誤解は解けましたか？」

ずっと胸にうずまいていた疑念が晴れていって、私は微笑む。
なんだ、復讐じゃなかったんだ。奏はずっと私のことを好きでいてくれて、それで

そこまで思い至って、自分でも分かるくらいかぁーっと顔が赤くなる。

やだ……奏が好きなのは私だったのに、違う人を好きだとか勝手に勘違いして、復讐とか騒いで……恥ずかしい。

赤くなった頬を両手で隠すようにはさんで俯く。

勘違いと、それから 奏がどんなに私のことを好きか語った言葉が、今になって鮮やかによみがえってしまって、さらに顔が赤くなる。きつと頭から湯気が出ていたのではないかというくらい。

私がおろおろしていると、下げていた視界の中に、しゃがみこんだ奏の端正な顔が入ってきて、一気に鼓動が速くなる。

「分かりましたか？ 俺がどれほどいいのことを好きか」

甘やかな瞳が一瞬うるんで、奏は頬を少しゆがめて、ささやくように声を落とした。あまりにも魅惑的な瞳で見つめられて、ドキンとする。痛いくらい胸が締め付けられて、どうしていいか分からない

かった。

私はドギマギとして、口をパクパクと動かす。
なんて答えたらいいのか分からなくて。しかも、お台場で奏に好きだと言ってしまったことまで思い出して、どうしようもないくらい緊張する。

そんな私を面白がるように目を細めた奏は、ずっと細い指を私に伸ばし頬に触れる直前

プルプルッ！

電話を知らせる着信音が大きく響いて、奏が手をぎこちなく止める。

奏は小さな吐息をもらすと、しかたなさそうな笑みを浮かべて私の鞆に視線を向ける。

「いいですよ、電話に出て下さい」

私は奏から視線を慌てて鞆に移し、鳴り続ける携帯を探り出し、通話ボタンを押す。

「もしもし……」

出る直前に確認したディスプレイの名前に、ごくんと唾を飲みこむ。

『あつ、羽鳥？ いま大丈夫かな……？』

受話器越しに聞こえる戸惑いがちな声に、ちらりと奏を盗み見て立ち上がる。

「はい、大丈夫です。あの……ちょっと待って下さい」

奏が強く私を見据えた涼やかな瞳を、針のようにきらめかせる。怖いほど美しい視線に、携帯を手で塞ぎ服に当てて早口に言う。

「ちょっと、外で電話してくるね……」

奏の返事を待たずに、私はその場から逃げだすように表に出る。突き刺さる視線が痛くて、そこに秀先輩と電話なんて怖くて出来なかったのよ。

「すみません、お待たせしました」

私は言いながら、奏のアパートを出て、通りを少し進んだところにある電信柱の側に移動する。

「大丈夫だよ。もしかして……さっきの、彼と一緒に？」

その言葉に、秀先輩を置いて勝手に帰ってきてしまったことを思い出す。電話だからとか関係なく、慌てて頭を下げて謝る。

「あの、さっきはすみませんでしたっ！ 約束をすっぱかしてしまって、本当にすみません……」

「ん……」

歯切れ悪く答える秀先輩は、くすりと苦々しい笑いをこぼした後。

「驚いたけど大丈夫、羽鳥は悪くないよ。事情はよくわからないけど、羽鳥が俺の返事を保留にしているのは……彼が原因？」

秀先輩の言葉がひどく切なく胸を震わせる。

今日伝えようと思っていたことを、電話で伝える訳にはいかない

と思つて、ぎゅっと瞳を閉じる。

「はい……、今日、秀先輩にお話ししようと思つていました。ちゃんと、直接会つて、お話ししなければならぬことがあります。もう一度これから会つて頂けますか？」

静かに言つた言葉に、しばしの沈黙を挟んで、優しい声が帰つて来る。

『うん、いいよ。じゃあ、十七時に柏駅で』

「はい、わかりました」

電話を切つた後もしばらくぼーっとその場に立ちつきしていた私の視界に、いきなり奏の端正な顔が入ってきて、驚いて後ろに体を引く。

「電話は……終わりましたか？」

奏が怪訝に眉根を寄せているのに気づいた私は、ドキドキと高鳴る鼓動に気づかれぬように視線をそらし、俯いて答える。

「うん、終わったよ。それでね、ちよつとこの後用事が出来ちゃったから、帰るね」

「れい？」

「ほら、誤解は解けたし、話したいことつてハンカチのことでしょう？ ちゃんと返してもらつたし、もう用事は済んだでしょ」

奏の返事を待たずにそのまま帰ろうとした私は、奏の腕を伸ばして壁に手をつく動作によつていた壁と奏に囲まれて、身動きが取れ

ない状態になってしまった。

「あの、奏……？」

恐る恐る視線を上げると、そこには奏のあざやかな瞳があつて、私をまっすぐに見つめていた。射止めるような瞳で、情熱的に見ていたの。

そんなふうに見つめられて、体の奥から甘い痺れが広がって、その場に縫いとめられたように動けなくなってしまう。

「れい　、俺が言ったこと、ちゃんと聞いていましたか　？」

「えっ、うん、聞いてたよ……ハンカチ、大切にとっていてくれてありがとね」

そう言つて、私は甘い視線から逃れるように顔を背ける。

本当は奏がなんのことを聞いているのか分かったけど、なんと答えたらいいか分からなくて誤魔化してしまう。

奏は話をそらしたことに不服そうに眉根を寄せながらも、それ以上は何か言ったりせずに、私を囲んでいた腕を解き、体を離す。

奏の熱を感じてしまう距離から解放されたことに横で気づかれないうちにほっと安堵の息をついて、私は家に向かって歩き出した。

奏が復讐じゃなく私のことを好きだと言ってくれて、嬉しかった

だけど、それが今もなのか計りかねて、戸惑っていた。どんどん溢れていく気持ちをもてあまして、奏と向き合うことが出来なかった。

気持ちに整理がついたといったら嘘になる。まだ私の心ココロに止められない想いがあつて。だけど、奏の口から真実を聞けて、復讐じゃ

なかったと知れたことだけで満足だった。

今はとにかく、秀先輩に会うことが先決で、それから自分の気持ちを見つめ直せばいいと思った。

奏のアパートから少し歩いて自分のアパートへ行き、四階にある部屋へと階段を登り始めた時、ふっと、酔いつぶれてしまった日のことを思い出す。

そう言えば 結局あの日はどうやって帰ったのだろうか。秀先輩に送ってもらったように思っていたけど、そんなことはあり得なくて、ずっと謎のままだった。自分で帰ったとしたなら、記憶もないままエレベーターのないこのアパートの階段を四階まで一人で登れたのだろうかと疑問だった。

機会があれば秀先輩に聞いてみようと思う。

簡単に身支度を整えてアパートを出て駅に向かい、電車に乗って待ち合わせの柏駅に向かう。

一緒に映画を見た後に言うつもりだったことを

第28話 届かない一等星 愛しさのかけら（後書き）

ランキングに参加しています。

「小説家になろう 勝手にランキング」ぽちっと押していただくだ
けです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2584w/>

君色ブレンド

2011年11月26日20時58分発行